

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経済理論	平出 宜勝	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513310

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

基礎から応用までの経済理論を学ぶ。

概要

本講義では、ミクロ経済学とマクロ経済学の基礎から応用までを復習しながら学ぶ。授業テキストにしたがって議論しながら理解を深めていく。授業の時間以外で取り組んでもらうレポートは添削を行い返却する。

キーワード

ミクロ経済学、マクロ経済学、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

ミクロ経済学やマクロ経済学の分析ツールを用いて経済分析を行うことができる。

経済学の専門用語について説明できる。

授業計画

第1回 はじめに・授業で用いる数学の復習

第2回 市場と経済活動I(需要曲線, 供給曲線)

第3回 市場と経済活動II(余剰分析)

第4回 消費者行動の理論I(効用, 無差別曲線)

第5回 消費者行動の理論II(効用最大化)

第6回 消費者行動の理論III(最適消費点の変化)

第7回 企業行動の理論I(各種費用)

第8回 企業行動の理論II(利潤最大化)

第9回 独占企業の利潤最大化行動

第10回 寡占市場の分析

第11回 経済成長とは

第12回 経済が成長するメカニズムI(ソロー・モデル)

第13回 経済が成長するメカニズムII(定常状態の分析)

第14回 経済成長の要因分解

第15回 まとめ

授業の進捗や受講者の理解度などを考慮して、上記の計画は変更することもある。

授業の予習・復習

授業の前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。予習については、テキスト等の該当箇所をまとめ、レポート/レジュメとして提出してもらう。また、復習のための練習問題を配布し、解答を提出してもらう。

使用教材

テキストは、授業のはじめに受講生の皆さんと相談の上選定したい。参考文献は、各授業時のテーマに沿ってその都度紹介する。

評価方法

レポート60%、平常点40%で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

ミクロ経済学やマクロ経済学の基本的な専門用語について理解していることが望ましい。オフィスアワーは講義時にお伝えします。

前年度の授業評価

今年度より担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経済政策	槇 満信	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513331

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

経済政策の優れた研究成果を読む

概要

経済政策は難しい分野である。そのときそのときの経済にとって真に意味のある政策を志向するならば、理論を知っているだけでは不十分であり、現実についてもつねに関心を持ち、具にあれこれ調べていなければならないからである。また、同時には叶えることのできないいくつかの目標間で優先順位をつけねばならないことも生じる。しかしそのことは逆にいえば、経済政策はとてもやりがいのある分野であるということでもある。

この科目では、経済政策の分野における優れた研究成果を読むことで、経済政策について考えるための訓練を積む。

今年度はJ. ハスケル／S. ウェストレイク『無形資産が経済を支配する』を読む。これは、無形資産の重要性がたかまるにつれ資本主義がどう替わってゆくかを論じた書物である。

具体的には毎回報告者を決めておき、担当部分に書かれてあったこと、読んでいて考えたこと、気になって調べたことなどについて報告してもらう。その後、参加者間での議論に入る。

キーワード

現代資本主義論、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

具体的な経済政策について、ふかみのある議論ができる。

授業計画

- 第1回 顔合わせ・イントロダクション
- 第2回 無形資産の台頭で何が変わるのか？
- 第3回 姿を消す資本
- 第4回 無形投資の計測
- 第5回 無形投資はどこが違うのか？：無形資産の4S
- 第6回 無形資産、投資、生産性、長期停滞
- 第7回 無形資産と格差の増大
- 第8回 無形資産のためのインフラと、無形インフラ
- 第9回 無形経済への投資資金という課題
- 第10回 無形経済での競争、経営、投資
- 第11回 無形経済での公共政策
- 第12回 無形経済はこの先どこに向かうのか？
- 第13回 授業の主題にかかわる論文を読む(1)
- 第14回 授業の主題にかかわる論文を読む(2)
- 第15回 これまでの議論のまとめ

授業の予習・復習

2単位の修得に必要な学習時間は90時間(講義の場合は受講30時間と予習・復習に60時間)となっているので、毎回、その時間数に見合ったおさらいをしっかりとしておくこと。

授業参加者には、毎回自分が報告する積もりで原稿をこしらえてくることを求める。

使用教材

J. ハスケル／S. ウェストレイク『無形資産が経済を支配する:資本のない資本主義の正体』(山形浩生訳、東洋経済新報社、2020年)をテキスト・ブックとする。

評価方法

報告の中身、議論での発言、参加態度にそれぞれ、34パーセント、33パーセント、33パーセントの重みをつける。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

大学院の科目であるので、学部で経済学を学んでいることが望ましい。

質問等があるときは、個別に連絡をもらえれば、対応する時間(オフィス・アワー)を設ける。

前年度の授業評価

ベーシック・インカムについて、実際的な問題から理念上の問題まで学生さんと共にふかめられたと考える。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
国際経済	カムチャイ ライサミ	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513336

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

国際金融の理論と政策

概要

金融自由化により、20世紀末から今日に至るまでグローバル金融危機が頻繁に発生している。世界経済に悪影響を及ぼしている。これらの仕組みと原因を理解するためには、まず国際金融の理論が必要になる。それと同時に、現実の国際金融の制度や政策も学ばなければならない。

本科目は、国際金融の理論と政策について学習することを目的とする。

授業はパワーポイントなどを中心とし、必要に応じて関連する時事問題を紹介しながら進行する。

毎授業後には勉強になった点や感想などのフィードバックを提出してもらう。

キーワード

国際収支、為替レート、利子率平価説、購買力平価説、固定相場制、変動相場制、マネーサプライ、マンデル＝フレミング・モデル、国際金融のトリレンマ、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. 国際金融の理論と政策が説明できる。
2. 国際金融取引や通貨制度について意見を述べることができる。
3. 国際金融の時事問題を調べることができる。

授業計画

- 第1回 国民所得計算と国際収支
- 第2回 国際取引と為替
- 第3回 貨幣の需給と金利
- 第4回 為替レートの短期決定
- 第5回 インフレと為替レート
- 第6回 購買力平価説
- 第7回 長期為替レートの一般モデル
- 第8回 短期の産出と為替レート
- 第9回 金融・財政政策の効果
- 第10回 貿易フローの調整と経常収支
- 第11回 固定相場制と為替介入
- 第12回 国際通貨システム
- 第13回 金融のグローバル化
- 第14回 最適通貨圏とユーロ
- 第15回 発展途上国の成長と危機

受講者数により講義と演習の割合を調整する場合がある。

授業の予習・復習

授業前後に必ず合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

教科書： P.R.クルーグマン／M.オブストフェルド／M.J.メリッツ著 [2017]『クルーグマン国際経済学～理論と政策～ 下・金融編』(原書第10版)、丸善出版、定価(本体5,000円＋税) ISBN:9784621300589

教科書の使用方法是： 毎回の授業に持参し、時間外でも熟読する。

評価方法

平常点30%、発言30%、レジュメ30%、発表10%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ① 学部レベルのミクロ経済学・マクロ経済学の知識が要求される。
- ② 数式とグラフが頻繁に出てくるので大学数学の知識が必須である。
- ③ 学習態度等は減点の対象になる場合がある。

オフィス・アワー： 木 17:00～17:30

e-mail: kamchai@eco.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

近年、受講者は学部のときに経済学を専攻していない人がほとんどである。ミクロ経済学やマクロ経済学の予備知識がないまま受講すると、ハードルはかなり高い。あまりおすすめできない。学部レベルの経済学と数学の知識が必須になっているので、慎重に履修登録を検討すること。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営管理	大野 陽子	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513360

使用言語

日本語で行なう授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

経営学の理論とその展開

概要

経営管理特論は、古典的管理論、マイクロ組織論、マクロ組織論の3つのパーツから構成され、それぞれの分野の代表的学説について、基礎的な学術的位置づけが講義されます。本講義は、理論的知見の背景や学術的意義の検討を目的とした学説研究を志向しています。これらを理解することにより、経営学を体系的に理解することを目的としています。

キーワード

古典的管理論、マイクロ組織論、マクロ組織論

授業の到達目標

社会科学としての経営学の理論の発展をたどりながら、経営学の各論における代表的な考えを学び、理解することを目標とする。また、これらを学ぶことにより、経営学の社会科学たるゆえんを理解し、修士論文のための経営学の課題について自ら導出ことができる基礎力をつけることを目標とする。

授業計画

1. イントロダクション
2. 古典的管理論1 経営と組織
2. 古典的管理論2 官僚制と機能主義的組織論
3. 古典的管理論3 科学的管理論
4. 古典的管理論4 人間関係論
5. 近代組織論1 新人間関係論と組織行動論
6. 近代組織論2 意思決定論
7. 近代組織論3 経営戦略論
8. 前半授業まとめとレポート
9. ミクロ組織論1 モチベーション
10. ミクロ組織論2 組織社会化
11. マクロ組織論1 コンティンジェンシー論
12. マクロ組織論2 ポストコンティンジェンシー論
13. マクロ組織論3 人的資源マネジメント
14. マクロ組織論4 リーダーシップ論
15. 全体授業まとめとレポート

尚、授業内容や順序は、受講生の理解度と進捗状況によって変更することがあります。

授業の予習・復習

授業を理解するためには、予習と復習は不可欠です。また、予習と復習は、学びの連続性を高め、理解力を深めることになります。各自、ノートを作成することにより、予習と復習に2時間を割き、全体で30時間を確保するようにしてください。

使用教材

授業資料は配布します。参考文献については授業内で提示します。

評価方法

講義で説明した内容を、次の講義で発表してもらいます。第8回目の授業では、前半部分の授業について自分のノートに基づいてレポートを作成し、発表してもらいます。第15回目の授業でも同じように後半部分の授業についての発表を求めます。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

講義内容をより深く理解するための参考文献は授業内で提示します。経営学は身近な学問です。組織や企業における現象を見て、どのような理論を用いることで説明できるのかを常に考えることが、経営学を理解することにつながります。そのような自主的に努力することを求めます。

質問はメールにて受け付けます。メールアドレスは授業内で共有します。メールには、必ず件名に講義名と名前を記載してください。

前年度の授業評価

今年度より担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営管理	馬頭 忠治	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513360

使用言語

日本語で行なう授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

管理論と組織論の現在とその系譜

概要

日本の経営学はその多くをアメリカのマネジメント論に負っている。この意味でも、アメリカのマネジメント論を学説的に歴史的に体系づけることは、経営学研究の不可欠で基本的な作業となる。

そのために、授業では、①アメリカのマネジメント論の今をフレデリック・ラルー『ティール組織ーマネジメントの常識を覆す次世代型組織の出現ー』に学んでいく。その上で、②馬頭忠治『アソシエーションとマネジメント』でマネジメント思想の通史的な理解を深め、経営学の基本的な課題を知る。

キーワード

ティール組織、アソシエーション、マネジメント、ワーク・デザイン、変化するパラダイム、アクティブラーニング

授業の到達目標

現在のビジネスは、VUCA的状況にいかに向き合うかを抜きに何事も語れない。つまり、Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)というVUCA世界を全体として理解して、ビジネスの現場におけるマネジメントやワーク・デザインを設計しなければ、マネジメントも戦略も有効ではなくなり、二次的な問題を惹起する。

であれば、私たちは、こうした時代認識に立つマネジメント論を学習し、これまでの経営管理思想や戦略論を反省しつつ、新しい未来を出現させる理論を探求することが焦眉の課題となる。

授業の到達目標は、こうした課題を深く知悉し、自らのオリジナルな見解をつくって、経営学の一翼を担えるようになることにある。

授業計画

以上のような目標を達成するために、2冊の著書に学ぶ。

すなわち、まず、『ティール組織』と『アソシエーションとマネジメント』の各章を丁寧にフォローし、その主張を全体として理解しながら、現代組織が抱える問題を知る。そのうえで、いったい何が本質的に問われているかをグループ討議しながら確かめていく。

- 1、授業のテーマはいかにして決められたか？
- 2、『ティール組織』は何を問うているのかー変化するパラダイム:過去と現在の組織モデルー。
- 3、ティール組織の構造とその文化的背景
- 4、全体性認識とティール組織
- 5、全体性を取り戻すという行為とは？
- 6、ティール組織を創造するとは？
- 7、ティール組織からなるティール社会とは？
- 8、『ティール組織』の学説的位相について
- 9、アソシエーションとは何か？

- 10、アソシエーションとアメリカ・マネジメント
- 11、ボランティア・アソシエーションの歴史とコーポレート・アメリカ
- 12、マネジメント思想と方法としての全体性論
- 13、経営学原論としてのアソシエーション論
- 14、デュルケムのアソシエーション論とドラッカーの産業社会論
- 15、まとめのプレゼンテーション

授業の予習・復習

授業を実質的な討議の場にするためにも、予習と復習は不可欠である。また、予習と復習は、学びの連続性を高め、理解力を深める。予習と復習に2時間を割り、全体で30時間を確保すること。それは自らの研究ノートづくりという具体的な課題を達成することと言えば、少ない位と考える。

使用教材

フレデリック・ラルー『ティール組織』英治出版、2500円。

馬頭忠治『アソシエーションとマネジメント』ラゲーナ出版、3000円（著者2割引きで購入できますので、本屋などに注文しないでください）。

評価方法

毎回の授業につき、各自、講義ノートを作成すること。その作成したものを授業で毎回、発表し、その質疑に答えてより良いものにすること。最後の授業で、各自、学んだことをプレゼンテーションすること。その講義ノートとプレゼンテーションで評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

テキスト以外に、アメリカのMITのピーター・ゼンゲやオットー・シャーマーによる現代組織論を自主学習すること。また、VUCAの時代は、私たちにとってどんな意味があるのか、どういった選択肢がありうるのかといった広い知見をもって、授業に臨むこと。

また、連絡などはメールでお願いします。私のアドレスは、batoh@eco.iuk.ac.jpです。

前年度の授業評価

今年度より担当

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
会計	櫛部 幸子	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

会計の基礎概念、財務諸表体系、会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、個別財務諸表に関する総論を理解する。

概要

本講義では、我が国における制度会計の基礎となる知識、会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計、個別論点を中心にとりあげる。会計とは何か、どうあるべきかを考え、会計的な思考を身に着けることができるよう、各論点内容の発表を行う形式で講義を進める。定期試験(レポート)・授業評価に対するフィードバックに関しては、要望があればオフィスアワーに個別に返却いたします。

キーワード

制度会計の基礎知識、会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計、個別論点、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標: 会計の基礎概念、会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計について理解できる。さらに負債、純資産、収益と費用、個別論点についても学び、財務諸表体系について理解できる。

授業計画

- 第1回 総論(会計の意義と分類)
- 第2回 会計制度と会計基準(会社と企業会計制度の枠組み、会社法会計、金融商品取引法会計、税務会計)
- 第3回 企業会計基準(企業会計原則と概念フレームワーク)
- 第4回 企業会計基準(一般原則)
- 第5回 損益計算論(費用収益の認識・測定)
- 第6回 損益計算論(損益計算と利益概念)
- 第7回 貸借対照表論(資産の意義と分類)
- 第8回 貸借対照表論(資産の測定と評価方法、費用配分の原則)
- 第9回 貸借対照表論(負債・純資産の意義)
- 第10回 財務諸表(体系、貸借対照表・損益計算書・株主資本等変動計算書、付属明細表と注記)
- 第11回 キャッシュ・フロー計算書(意義と作成方法)
- 第12回 連結財務諸表(意義と一般原則・一般基準、基礎概念と会計処理)
- 第13回 金融資産(意義と発生・消滅の認識・評価)
- 第14回 リース会計(意義と会計処理)
- 第15回 税効果会計(意義と会計処理)

授業の予習・復習

受講前後に、必ず4時間以上の予習・復習を行うこと。授業プリントの見直し、論点整理を行うこと。

使用教材

(テキスト)

授業中の板書、配布プリント

(参考文献)

井上達男・山地範明『エッセンシャル財務会計』中央経済社、2013年。

武田隆二『会計学一般教程 第7版』中央経済社、2008年。

広瀬義州『財務会計 第12版』中央経済社、2014年。

評価方法

平素の努力を評価する。積極的な発言・発表・議論を評価する。

平常点(40%)、レポート・課題提出(30%)、発表(30%)

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問や要望は授業後にお聞きします。授業時間外は研究室のメール・アドレスにメールをしてください。日時を決めてお聞きします。定期試験・評価に対するフィードバックに関しては、要望があればオフィスアワーに個別に返却いたします。

前年度の授業評価

生徒全員が理解し、授業についてけるよう丁寧な対応を常に心掛けている。今回の授業評価においてその成果が表れており、おおむね満足している。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
国際経営	康上 賢淑	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513354

使用言語

日本語(主)英語・中国語・韓国語(兼)

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

国際経営における企業理念・企業戦略と行動

概要

企業の経営活動はすでにグローバル化しており、その戦略も国際的視点のうえで打ち出さなければならない。国際経営における基礎知識を、それぞれの国の多国籍企業の事例に通じて分析し、その成功と失敗の要因を探る。主に国際経営論の概念、企業の国際的戦略、組織構図、経営管理および国際マーケティング理論を議論し、国際経営の本質を問い、解明する。授業方法は各自にテキストを読み、順番を決めて報告し、討論を行う。講義の最終回の合宿で課題検討とフィードバックを行う。

キーワード

海外直接投資、国際市場参入戦略、グローバル企業、グローバル経営戦略、研究開発、技術移転、合併、買収、合弁、提携…、アクティブラーニング

授業の到達目標

国際経営とは何か？国際的経営環境と企業行動との関連性に焦点を絞り、多国籍企業をケースに企業理念と戦略・行動を分析することができる。それを通じて、関連する専門知識を学び、身に付けることができる。

授業計画

1. 講義のガイダンス
2. 国際経営と多国籍企業
3. 国際経営戦略
4. 国際市場参入政策
5. グローバル経営戦略
6. 国際経営組織の構造
7. 国際経営管理の特徴
8. 国際競争戦略と技術革新
9. アジアにおける日本企業の技術移転
10. 技術戦略の国際的展開
11. 合弁と買収
12. 提携
13. グローバリズムの本質
14. 国際経営の将来
15. まとめ(討論会)

授業の予習・復習

授業の前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

1. 竹田志郎編著『新・国際経営』文真堂、2011年、2,800円
2. 吉原英樹・白木三秀・新宅純二郎・浅川和宏『ケースに学ぶ国際経営』有斐閣ブックス、2013年、2,800円
3. その他参考文献は授業において紹介する。

評価方法

毎回の発言・発表の内容50点、積極性と質問の内容50点にする。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業は教師と学生の議論する形式で行う。学生の発表内容は事前に指定して行い、期末には小論文を提出することなどがある。積極的な議論、質問は大歓迎。事前の予習をしてくるのが参加の前提条件である。オフィスアワーは月曜日から金曜日の12時20分から13時の間に研究室で行う。

前年度の授業評価

学生の積極的な学ぶ姿勢に励まされ、多くの知識を共に学び、共有してきた。今後、難しいキーワードは英語か中国語等で説明し、理解を深めていきたい。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
金融経済	磯山 啓明	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513380

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

資産評価モデルの理論

概要

資産評価モデル(Asset Pricing Model)の理論を主に扱う。資産評価モデルは、不確実性の下でどのように証券の価格が決定されるのか、投資家がリスクを負担したことに対する補償をどれほど求めるのかを記述する。資本市場において、証券の価格が資産評価モデルによって適切に記述されているのか、またどのように記述されるべきなのかを考察することになる。

授業では、教科書を分担して読んで報告してもらい、コメントや討論を通じて、理解を深める。

キーワード

資産評価モデルの理論, Asset Pricing Theory, Stochastic Discount Factor, アクティブラーニング

授業の到達目標

- ・証券の価格やリターンを記述する理論を理解すること。
- ・ファイナンス理論とその実証分析について、説明できること。

授業計画

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 Basic Pricing Equation, 確率的割引因子SDF(Stochastic Discount Factor)
- 第3回 ファイナンスにおける伝統的な諸問題
- 第4回 モデル構築の際に置かれている仮定, 一般均衡
- 第5回 消費CAPMの実証分析, CAPM, APT, ICAPM
- 第6回 条件付き請求権(Contingent Claims), リスク中立確率測度(Risk-Neutral Probabilities)
- 第7回 投資家のF.O.C.(first order condition), Risk Sharing
- 第8回 State DiagramとPrice Function
- 第9回 一物一価の法則とSDFの存在
- 第10回 無裁定条件と正のSDF
- 第11回 Mean-Variance Frontier, Beta Pricingモデル
- 第12回 Mean-Variance Frontierの直交分解
- 第13回 SDF, Beta Pricing Model, Mean-Variance Frontierの関係性(1)
- 第14回 SDF, Beta Pricing Model, Mean-Variance Frontierの関係性(2)
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

授業の前後で合計4時間程度の予習・復習をし、次回授業の該当箇所についてテキストを読んでおくこと。

使用教材

<テキスト>

Cochrane, J.H.(2005) Asset Pricing Model, Princeton University Press.

<参考文献>

Pennacchi, G.(2007) Theory of Asset Pricing, Springer Boston.

評価方法

平常点70%, 発表30%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- (1)金融市場に関する新聞記事やニュースなどに関心を持つこと。
- (2)英語のテキストを使用する。よく読んで理解してから授業に臨む姿勢が求められる。
- (3)授業時間外の対応については、最初の授業で知らせる。

前年度の授業評価

今年度より担当

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経済	松本 俊哉	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO516020

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

経済のデジタル化について考える

概要

世界経済においてデジタル技術の進化は著しく、先進諸国のみならず、中国、インド、東南アジア諸国などの新興国・途上国の経済・産業・社会を大きく変化させている。世界経済と日本経済において生じている変動を「デジタル化」を軸に検討する。

授業はテキスト輪読の形式で行う。各章の報告と討論を行った次の週には参考文献をもとに補足的な議論を行う。

キーワード

デジタル経済、プラットフォームビジネス、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

「デジタル化」の経済(学)的意味、社会的影響について理解し、自分の見解を述べることができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 序章「想像を超える新興国」報告と討論
- 第3回 第1章「デジタル化と新興国の現在」報告と討論
- 第4回 第1章の補足議論
- 第5回 第2章「課題解決の地殻変動」報告と討論
- 第6回 第2章の補足議論
- 第7回 第3章「飛び越え型発展の論理」報告と討論
- 第8回 第3章の補足議論
- 第9回 第4章「新興国リスクの虚実」報告と討論
- 第10回 第4章の補足議論
- 第11回 第5章「デジタル権威主義とポスト・トゥルース」報告と討論
- 第12回 第5章の補足議論
- 第13回 第6章「共創パートナーとしての日本へ」報告と討論
- 第14回 第6章の補足議論
- 第15回 全体のまとめ

※テキスト輪読の進捗度合いによって授業計画を変更する場合がある。

授業の予習・復習

各回のテキストの範囲を熟読し、議論に参加できるよう準備しておくこと。

授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

伊藤亜聖『デジタル化する新興国－先進国を超えるか、監視社会の到来か』中公新書、2020年
参考文献は適宜紹介する。

評価方法

平常点(参加姿勢、報告内容)60%、レポート40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問には授業後に対応する。メール等で連絡があれば個別に対応する。
詳細は初回の授業で案内する。

前年度の授業評価

開講していない。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
都市経済	石塚 孔信	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513329

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

1990年代からの長引く不況の中で、都市のあり方も経済成長期のものとはおのずと異なるものとなってきた。この講義のテーマは、現代の都市の問題を経済学的なアプローチから説明することである。

概要

現代の都市のイメージは、「みやこ」や「いち」といった牧歌的なものとは程遠く、急速な都市化の結果である過密、過大の弊害に悩まされているという姿がクローズアップされている。都市における住宅難、地価高騰、交通混雑、公害、公共施設不足、地方財政赤字といった諸問題は、ますます深刻化しているようである。都市経済学は、都市の経済の構造や機能を体系的、総合的に分析し、都市経済の発展や変動の法則を見いだすことを通じて、このような複雑な都市問題を解明していくことを目的としている。

この講義では、都市・地域の構造や機能をミクロ経済学やマクロ経済学の理論を援用して分析し、都市システムの構造を解明する。さらには理論モデルに実際のデータを投入してシミュレーションを行い、理論モデルの現実への適用を吟味してみたい。そして、その結果を都市経済生活の実践への応用に役立てたい。したがって、理論分析だけでなく実証分析も行うのでノートパソコンを準備しておいて欲しい。

最終的な課題となるレポートに対するコメントはメールで示すことになる。

キーワード

都市経済学、地域経済学、経済立地論、アクティブラーニング

授業の到達目標

都市システムの構造を解明するための分析ツールを身につけることが出来る。

授業計画

- 第1回 都市・地域経済学の課題(地域の概念)
- 第2回 都市・地域経済学の課題(グローバル化と地域経済)
- 第3回 日本の地域構造(産業構造の変化と地域構造)
- 第4回 日本の地域構造(人口動態から見た地域構造)
- 第5回 地域経済と所得形成(地域所得の決定)
- 第6回 地域経済と所得形成(地域の産業連関分析)
- 第7回 地域成長の経済分析(需要主導型モデル)
- 第8回 地域成長の経済分析(供給主導型モデル)
- 第9回 産業の立地(工業立地論)
- 第10回 産業の立地(空間的競争理論)
- 第11回 都市の成立・発展(都市の形成発展の要因)
- 第12回 都市の成立・発展(都市化と都市圏の形成)
- 第13回 都市の土地利用(地価と地代)
- 第14回 都市の土地利用(住宅の立地の理論)

第15回 まとめ

授業の予習・復習

授業前後に必ず4時間程度の予習・復習を行うこと。
授業に臨む際にテキストに目を通して質問点をまとめておくこと。
授業後は、問題点を整理しておくこと。

使用教材

テキスト

『地域経済学入門』山田浩之・徳岡一幸 有斐閣

参考文献

『都市と地域の立地論』神頭広好 古今書院

『都市と地域の経済学』中村良平・田渕隆俊 有斐閣

『都市経済学』山崎福寿・浅田義久 日本評論社

『多変量解析のはなし』有馬・石村共著 東京図書

『ミクロ経済学入門』西村和雄 岩波書店

『入門マクロ経済学』中谷 巖 日本評論社

評価方法

成績評価は毎回の講義でのレジュメの作成及び質疑応答(60%)と試験の代わりに提出してもらったレポートの内容(40%)を総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ①ミクロ経済学・マクロ経済学の講義を受講することが望ましい。
- ②統計の基礎も学習する。
- ③質問や問い合わせがある場合には以下のところに御連絡下さい。

TEL:099-285-7586

E-mail: ishiduka@leh.kagoshima-u.ac.jp

前年度の授業評価

大学院生の報告をベースに講義を進めているが、ペースが遅くなりがちなので、講義とのバランス等、進め方に工夫をする必要がある。経済理論の説明に時間をかけすぎているので、グラフ等を事前に準備して、その部分の説明の効率化を図りたい。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
欧米経済	西原 誠司	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513336

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

パリ同時多発テロと難民問題に揺れるヨーロッパ、「人種」差別・イスラム排外主義の主張を行う共和党の大統領が退陣し、新しい民主党の大統領が選出されたアメリカ。第二次世界大戦の悲劇——アンネ・フランクの悲劇——を二度と繰り返さないためにつくられた戦後の欧米の政治・経済システムが、今岐路に立たされている。不戦共同体＝EUと戦争・紛争を繰り返してきたアメリカの政治・経済システムを比較しつつ、これからの世界の政治・経済システムの在り方をともに考える。

概要

20世紀は、「戦争と革命の世紀」といわれてきた。その最終局面でベルリンの壁が崩壊し、米ソ冷戦体制が終結する。世界中の多くの人々がこれで平和な世界がやってくる——血と暴力によって紛争を解決するやり方に終止符がうたれる——と期待を込めて21世紀にのぞんだ。

ところが、次々と民族紛争が頻発し、9.11米国同時多発テロ、ウクライナ紛争、シリア内戦、ヨーロッパに押し寄せる大量の難民、パリ同時多発テロと暴力と紛争はおさまるところか、むしろ増大する傾向を示している。それはなぜであろうか。これを食い止める方法はないのであろうか。

このような問題の解決の糸口は、グローバル化する経済の中にある。すなわち、国境を越えてグローバルに展開する企業は、その経済活動の本性から世界平和を要請している。というのは、多数の国に工場や支店をもつ企業は、国と国との戦争によってその活動基盤を根底的に破壊されるからである。にもかかわらず、なぜ、紛争が頻発するのか。それは、他方で、戦争が存在することによって巨万の富を獲得する企業と政府の結びつき(「軍産複合体」)が存在するからである。

この二つを軸に、EUと米国の政治・経済システムを比較・分析し、新しい世界秩序の在り方をともに探っていく。

なお、授業方法としては、毎回、そのテーマにふさわしい映像資料および文献資料を提示し、それをもとに対話・討論する形式で進行していく。そこで出された疑問点、さらに深めるべき討論点については、できるだけその授業で解決するよう心がけるが、時間的に制約があるので、Lineおよびメールを使い、次回の授業が始まるまでに相互に応答するという形で対応し、フィードバック型の授業になるよう工夫したい。

キーワード

LOVE&PECEの経済学、経済のグローバル化、軍産複合体、イスラムフォビア、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- 1.資本主義経済の基本的仕組み＝原理がわかる。
- 2.19世紀資本主義システムと20世紀資本主義システムの構造の違いがわかる。
- 3.グローバリズムと新たな国際的地域経済ブロック形成の関係が理解できる。
- 4.現代の世界で起こっている様々な問題に興味関心がもてる。
- 5.学んだことを行動に生かす方法がわかる。

授業計画

- 1.はじめに——アンネ・フランクの悲劇をくりかえさないために

- 2.戦争と革命の世紀(20世紀)の経済システムと19世紀の経済システム
- 3.グローバル化する経済と世界大戦の終焉と新たな経済恐慌の発現
- 4.新たな国際的地域経済ブロックの誕生と新たな紛争の登場
- 5.EUの新しい実験 ①二つの大戦の原因となった資源の共同管理
- 6.EUの新しい実験 ②関税同盟・市場統合・通貨統合
- 7.EUの新しい実験 ③ユーロ登場の意味とギリシャ金融危機
- 8.EUの新しい実験 ④ヨーロッパの環境政策と「脱原発」
- 9.EUの新しい実験 ⑤多文化主義・多言語主義
- 10.アメリカ経済と戦争——ベトナム戦争とその後
- 11.冷戦終結後のアメリカ経済——ニューエコノミーとその破綻
- 12.9.11後のアメリカの政治・経済システム
- 13.モダンイスラムトルコの挑戦と苦悩① イスラム政権下での高成長
- 14.モダンイスラムトルコの挑戦と苦悩② なぜEU加盟が実現しないのか
- 15.おわりに——東アジア共同体の可能性と中国のニューシルクロード

授業の予習・復習

授業は、毎回つながりがあります。ですから、授業の前後に必ず合計で4時間前後の復習・予習を行ってください。

具体的な内容については、毎回授業時にその都度指示しますが、欧米諸国の経済はもちろん、政治・文化・思想等、関心をもってニュース・新聞・雑誌に目を通すようにしてください。

使用教材

教科書 朝日吉太郎編『欧州グローバル化の新ステージ』(文理閣)2,800円(税抜)

評価方法

平常点30点、発表点30点、レポート40点。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- 1.資本主義経済の基本的仕組みを理解していることが前提となります。
- 2.参考文献として拙著『グローバリゼーションと現代の恐慌』(文理閣、2000年)を読んでおくことより理解が容易になります。
- 3.質問・意見については、メールアドレス(seiji-n@eco.iuk.ac.jp)およびLineで対応します。

前年度の授業評価

昨年度は、少人数(6人:日本人1名、中国人留学生5名)であったため、全体としてのシラバスの構成はまもりつつ、院生の要望・質問にこたえ、時間配分も柔軟に対応し、インタラクティブなアクティブラーニング(授業)となりました。言語も日本語をベースに英語・中国語も使い、相互に理解が深まるよう努めましたが、次年度もよりわかりやすい授業を目指して工夫しようと思っています。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
環境経済	八木 正	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO515190

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

環境と経済をめぐる現状とSDGs

概要

大量生産、大量消費、大量廃棄によって、「豊かな社会」を実現してきた20世紀の世界。しかし、それは公害や環境破壊を引き起こしてきた。現在は、一方では地球温暖化などの地球環境問題が叫ばれながら、また原子力発電による放射能汚染に苦しんでいる人たちもいる。

これらの現状を認識するとともに、その原因を探っていく。国連は、SDGsを掲げ、これらの問題の解決のための行動を求めているが、21世紀に生きる私たちがそのために何ができるかを考える。

テーマごとに、映像資料も活用しつつ、適当なテキストを選択し、報告を踏まえて、議論を行う。

課題として、授業後に受講者はレスポンスシートに記入し、教員に提出する。教員は、それにコメントをつけて返却することで、フィードバックを行う。

キーワード

公害 遺伝子組み換え 生態系 世界遺産 地球温暖化 パリ協定 化石燃料 原子力発電 再生可能エネルギー 3R SDGs アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

環境と経済をめぐる現状と課題を理解できる

授業計画

- 第1回 ガイダンス、SDGsとは
- 第2回 公害問題をめぐる歴史と現状
- 第3回 公害問題の展開とその解決策
- 第4回 化学物質汚染をめぐる歴史と現状
- 第5回 化学物質汚染の展開とその解決策
- 第6回 地域開発・自然破壊をめぐる歴史と現状
- 第7回 地域開発・自然破壊の展開とその解決策
- 第8回 原子力発電をめぐる歴史と現状
- 第9回 原子力発電の展開とその解決策
- 第10回 地球環境問題をめぐる歴史と現状
- 第11回 地球環境問題の展開とその解決策
- 第12回 再生可能エネルギーをめぐる歴史と現状
- 第13回 再生可能エネルギーの展開とその解決策
- 第14回 3Rをめぐる歴史と現状
- 第15回 3Rの展開とその解決策、まとめ

授業の予習・復習

環境と経済をめぐる現状、課題、理論などについて関心を持ち、新聞・書籍・インターネットなどで最低限の知識を得ておくこと。

授業後、レスポンスシートに記入し提出すること。

授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

テキスト、参考文献については、授業で指定する。

テキストについては、各回のテーマにふさわしいものを選び、授業でとりあげ、報告・議論の対象とする。

評価方法

平常点30%、発表30%、レポート40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問等については、授業の前後で受け付ける。

それ以外の時間では、メール(yagi@eco.iuk.ac.jp)でも質問等を受け付ける。

また、メールで連絡した上で、研究室に直接訪ねてきてもよい。

前年度の授業評価

遠隔授業のやり方を工夫していきたい。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
保険経済	日野 一成	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513391

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・対論型授業)

テーマ

保険・リスクマネジメント関連の優れた論文を読んだり、モラルリスク事例に関する判例検討をおこなったり、調査手法の観点から理解を深める。

概要

個人や企業を取り巻くリスクは強大化、多様化、複雑化しています。本講義では、リスク、リスクマネジメント、保険に関連分野について優れた先行研究成果を読み込んでいく。具体的には、毎回の授業では、報告者を決めておき、報告内容に対し、参加者間において議論を行い、理解を深めていく。また、保険金不正請求というべき、モラルリスクについて取り上げ、その対応策について法的観点や調査手法について学ぶ。報告者の報告に対しては、担当教員より良かった点、改善すべき点などについてフィードバックする。

キーワード

リスク、リスクマネジメント、保険、モラルリスク、アクティブラーニング、「実務経験のある教員による授業科目：損害保険会社勤務歴28年、損害保険調査会社勤務歴9年」

授業の到達目標

リスク、リスクマネジメント、保険及びモラルリスクに関する議論が高い次元で行うことができる

授業計画

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 リスク(個人リスクと企業リスク)
- 第3回 リスクマネジメント
- 第4回 リスクマネジメントとしての保険(1)
- 第5回 リスクマネジメントとしての保険(2)
- 第6回 個人リスクマネジメント
- 第7回 企業リスクマネジメント(1)
- 第8回 企業リスクマネジメント(2)
- 第9回 モラルリスク
- 第10回 事故の偶然性の立証責任(傷害保険)
- 第11回 事故の偶然性の立証責任(火災保険)
- 第12回 事故の偶然性の立証責任(車両盗難)
- 第13回 モラルリスク調査の手法(1)
- 第14回 モラルリスク調査の手法(2)
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

授業の前後に、各テーマについて教科書・参考図書・論文等を中心にして、合計で4時間程度の予習・復習を行ってください。

使用教材

テーマに沿った論文や判例・評釈を使用する。

評価方法

平常点30点、報告点40点、議論での発言30点

履修上の留意事項・授業時間外の対応

大学での保険論、リスクマネジメント論や民法を履修していることが望ましい。質問・要望は授業中や授業後に受け付ける。また、メール(k-hinp@eco.iuk.jp)による事前予約をとり。研究室に尋ねてください。また、月曜日の4限は、研究室で待機しています。

前年度の授業評価

評価なし(本年度新担当)

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
財政	池田 亮一	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513410

使用言語

日本語で行なう授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

現代財政・税制の理解。

概要

財政を、「社会・政治・経済の3サブシステムを統合するミッシング・リンク」と理解するテキストを輪読します。担当教員自体はミクロ経済学・マクロ経済学をベースとした財政学(使用テキストでは「公共経済学」とされています)が専門ですが、本学においては、院生のバックグラウンドが多様(他学部出身も多い)ということを考慮して、あえてミクロ・マクロ経済学の習得を前提とせず、制度論的、あるいは財政社会学的なテキストを用います。本講義の受講者は、税理士試験受験者が多いと思いますので、税制に重点を置いた演習形式の授業を考えています。なお、留学生や社会人大学院生もおられるので、進度については事情に合わせて考慮します。

キーワード

租税 財政 財政民主主義 ドイツ正統派財政学、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

現代財政および税制の現状と課題が理解できる。同時に社会に出てからも必要とされるプレゼンテーション・コミュニケーションができる。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 財政学への旅立ち
- 第3回 財政学の生成
- 第4回 財政学の展開
- 第5回 現代財政学の諸潮流
- 第6回 租税原則
- 第7回 租税の分類と体系
- 第8回 人税のしくみと実態
- 第9回 生産物市場税のしくみと実態
- 第10回 要素市場税のしくみと実態
- 第11回 オプションとしての公債と公債原則
- 第12回 地方財政と中央財政
- 第13回 地方財政の理論と実際
- 第14回 政府としての社会保障基金
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

日本の財政に関して新聞や書籍などで最低限の知識を得ておくこと。

授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

なお、院生のバックグラウンドが多様なので、異なるバックグラウンドの院生ともコミュニケーションを取るように発表・討論しましょう。

使用教材

教科書 神野直彦(2007)『財政学 改訂版』有斐閣

参考文献 『図説 日本の財政』『図説 日本の税制』最新年度版

評価方法

発表(30%)とレポート(50%)、平常点(20%)によります。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

本講義ではミクロ経済学入門・マクロ経済学の知識は前提としていないが、それでも価格弾力性、IS-LM曲線などがテキストに出てきます。それらの導出までは要求しませんが、せめてグラフを理解することだけはお願いします。

ミクロ経済学・マクロ経済学をもちいて修士論文を執筆したい人にとっても、この講義は無駄ではないと思います。ただし、ミクロ経済学・マクロ経済学・計量経済学には本講義では深入りしませんので、これらの授業は必ず履修して下さい。

授業後に質問・相談等を受け付けます。それ以外は、事前連絡の上、研究室にて質問・相談等を受けます。

前年度の授業評価

授業評価は実施していない。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経済史	加藤 一弘	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513320

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

アメリカ経済の歴史

概要

イギリスが工業力において絶頂を迎えていた19世紀中ごろから現代に至るまで、アメリカ経済の歴史を、いくつかの時期に区分して理解することに努める。それぞれの時期について、比較的良好に知られている事実から分け入り、最近提出され始められている論点も参考にしながら、1つの時期を、1つの全体構造として、イメージを鮮明にしていきたい。最後に、これらのイメージを総合して、現代のアメリカを、1つの歴史過程にあるものとして捉えることができると考えている。

なお、当然のことながら、アメリカ社会の歴史は、世界の他の地域——常識的にいえば、特にヨーロッパ——との関係を抜きにしてはありえない。したがって、研究の主たる対象はアメリカ社会としつつも、必要に応じて、他地域や、そことアメリカとの関係についても取り上げ、アメリカ自体における話と結びつけて、研究を進めていく予定である。

したがって、この研究の成果は、アメリカ経済史の理解を深めるだけに終わるものではない。この研究の成果が、現代世界につながる世界の経済史に向かって無限に開かれたものになっていくことを目指したいと思う(このことは、アメリカ以外の地域をとりあげることだけの結果なのではない。さしあたってアメリカ社会に限られた知見であっても、それはここに述べる成果につながっていくはずである)。

授業の進め方は、前回の授業に担当者が配布した資料について、参加者の誰かがレジュメを作り、これの発表にもとづいて討論を行うというものにする。

課題についてのフィードバックは、授業での討論と、担当者によるレジュメの講評によって行う。

キーワード

南北戦争、1873年世界恐慌、大不況期、第一次世界大戦、20年代の繁栄、自動車工業、1929年世界恐慌、ニューディール、第二次世界大戦、ケインズ主義、ブレトンウッズ体制、パックス・アメリカナ、ニクソン・ショック・レーガノミクス、プラザ合意、金融自由化、住宅バブル、アクティヴラーニング

授業の到達目標

本科目での到達目標は、以下の3点である。

- ①アメリカ経済の歴史について、正確な知識をもてる
- ②アメリカ経済の、複数の歴史的事実について、それぞれの相互関係をはっきりと説明できる
- ③アメリカに限らず、経済の歴史について、資料探索・収集を行うことができる

授業計画

第1回 1873年、世界恐慌

第2回 18世紀最後の四半世紀——高度成長の始まり

第3回 互換性部品とフォードシステム

第4回 アメリカとヨーロッパ——第一次世界大戦が生み出したもの

- 第 5回 1929年からの世界恐慌
- 第 6回 ニューディール政策
- 第 7回 パクス・アメリカナ——第二次世界大戦の諸結果
- 第 8回 ブレトンウッズ体制
- 第 9回 アメリカ経済とケインズ主義
- 第10回 ニクソン・ショックとオイル・ショック
- 第11回 レーガノミクス
- 第12回 金融自由化と金融経済の肥大
- 第13回 住宅バブルとサブプライムローン
- 第14回 リーマンショックとその後
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

毎回の授業ごとに4時間の予習・復習を行うこと。

各回の授業で用いるテキストを、前の週に担当者が配布するので、指定された箇所についてレジュメを作成して授業に臨むこと。レジュメは毎回の授業終了後に担当者に提出すること。

毎回の授業で重要だと考えたことを、各自自分用のまとめを作って蓄積していくこと。

使用教材

使用教材は、担当者がプリントを用意し、各回の授業の、前の回の授業で配布する。

参考文献としては、さしあたり、谷口丈・須藤功編『現代アメリカ経済史』2017年有斐閣、をあげておく。

評価方法

平常点(発表と討論)50%、毎回提出されるレジュメ50%で、成績評価を行う。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

遅刻・欠席する場合は、事前に理由を付してメールなどで連絡すること。

合理的な理由のない欠席が5回以上になる場合は、履修を無効にする。

メール・アドレス:k-kato@eco.iuk.ac.jp

日曜を除いてはほぼ毎日大学に出てきていますが、研究室にいる時間はそれほど長くありません。図書館2階の参考図書コーナーにいたことが比較的多いです。

オフィス・アワーについては、毎年木曜日の3限目としていますが、正式には新年度が始まってからお伝えすることになります。

前年度の授業評価

特に問題が指摘されたということはない。まずまず満足してもらえる授業であったようである。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
税法 I	鳥飼 貴司	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513451

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

租税に関する法的諸問題の解決するための税法学基礎理論の理解をテーマとする。

概要

本授業は、文献講読により税法の解釈・適用方法を修得します。テキストを読み進めながら解説を加えるとともに、受講者への質問及び回答、受講者からの質問及び回答等、双方向・多方向的授業を展開する予定です。

なお、毎回レポート(授業内容をまとめたもの)を課します。メールを利用して翌週火曜日までに提出すること。レポートに対するフィードバックは、授業時間内に実施します。

キーワード

租税法律主義
税法の解釈・適用
アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

学生が、税法における基礎理論を理解し、法的思考に基づいた税法の諸課題に関する基礎的解決能力を修得できる。

授業計画

- 第1回 ガイダンス, 現代国家と租税, 租税の意義と種類
- 第2回 租税の根拠, 税法の意義と範囲, 税法の特色
- 第3回 税法学の学問的位置, 戦前の租税制度
- 第4回 戦後の租税制度
- 第5回 租税法律主義, 租税公平主義
- 第6回 自主財政主義, 税法の法源と適用範囲
- 第7回 税法の解釈と適用
- 第8回 租税実体法序説, 納税義務者
- 第9回 税理士, 課税物件, 課税物件の帰属, 課税標準, 税率
- 第10回 課税要件各論総説, 所得税総説, 所得税制度の基本的仕組, 利子所得, 配当所得, 不動産所得
- 第11回 事業所得, 給与所得, 退職所得, 山林所得, 譲渡所得, 一時所得, 雑所得, 収入金額, 必要経費, 税額の計算
- 第12回 法人税総説, 法人所得の意義
- 第13回 収益および費用の年度帰属, 費用収益対応の原則, 益金の額の計算, 損金の額の計算その1
- 第14回 損金の額の計算その2, 法人税額の計算
- 第15回 同族会社と所得課税, 国際取引と所得課税

授業の予習・復習

毎授業後、テキストなどを使用して、他者に講義内容を話せること(他者に伝達しなければ、知識は定着しない)。そのためには、授業前後に必ず合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

<テキスト>

金子宏『租税法』弘文堂(2021年4月における最新版を使う。今現在は、23版)、中里・増井編『租税法判例六法〔第3版〕』有斐閣・2017年、水野忠恒他編著『別冊ジュリスト租税判例百選(第6版)』有斐閣・2015年

評価方法

3分の2以上の出席を単位認定の要件とします。

授業中の質問・回答等双方向的授業への参加度・・・100%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

鹿児島大学のメール

torikai@leh.kagoshima-u.ac.jp

前年度の授業評価

・シラバスに記載された到達目標や授業計画を達成できた。

・効果的な授業展開や受講生の興味・関心に応えるような授業が実施でき、受講生の満足度も高かったように思う。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
税法Ⅱ	鳥飼 貴司	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513451

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

納税者と課税庁との間で発生する具体的な問題の解決に当たっては、租税実体法(所得税法・法人税法・相続税法・消費税法)の理解と具体的な裁判例の検討が必要であることから、租税実体法の理解と裁判例の分析をテーマとする。

概要

本授業は、文献講読により税法の解釈・適用方法を修得します。テキストを読み進めながら解説を加えるとともに、受講者への質問及び回答、受講者からの質問及び回答等、双方向・多方向的授業を展開する予定です。

なお、毎回レポート(授業内容をまとめたもの)を課します。メールを利用して翌週火曜日までに提出すること。レポートに対するフィードバックは、授業時間内に実施します。

キーワード

租税法律主義
アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

学生が、租税実体法の内容の理解及び判決文の読解能力を修得できる。

授業計画

- 第1回 相続税および贈与税
- 第2回 財産の評価, 固定資産税
- 第3回 消費税, 酒税
- 第4回 関税, 登録免許税, 印紙税
- 第5回 不動産取得税, 納税義務の成立, 納税義務の承継, 納税義務の消滅
- 第6回 延滞税, 利子税, 加算税, 納税者の債権, 租税手続法の意義
- 第7回 租税行政組織, 租税確定の方式, 納税申告, 青色申告, 更正の請求
- 第8回 更正・決定, 推計課税, 賦課課税方式, 確定権の除籍期間, 税務調査
- 第9回 租税の納付, 源泉徴収, 租税の徴収, 徴収の繰上と納税猶予
- 第10回 担保および債権者代位権・取消権, 滞納処分, 租税債権の優先劣後
- 第11回 財産の差押, 交付要求・参加差押
- 第12回 差押財産の換価, 配当, 滞納処分の緩和, 強制執行・破産手続等との関係
- 第13回 租税争訟法総説, 総額主義と争点主義, 租税不服申立の種類と対象, 再調査の請求
- 第14回 審査請求, 租税訴訟
- 第15回 租税罰則法と租税犯則調査・通告処分

授業の予習・復習

毎授業後、テキストなどを使用して、他者に講義内容を話せること(他者に伝達しなければ、知識は定着しない)

い)。そのためには、授業前後に必ず合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

<テキスト>

金子宏『租税法』弘文堂(2021年4月における最新版を使う。今現在は23版)、中里・増井編『租税法判例六法〔第3版〕』有斐閣・2017年、水野忠恒他編著『別冊ジュリスト租税判例百選(第6版)』有斐閣・2016年

評価方法

3分の2以上の出席を単位認定の要件とします。授業中の質問・回答等双方向的授業への参加度・・・100%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

鹿児島大学のメール

torikai@leh.kagoshima-u.ac.jp

前年度の授業評価

- ・シラバスに記載された到達目標や授業計画を達成できた。
- ・効果的な授業展開や受講生の興味・関心に応えるような授業が実施でき、受講生の満足度も高かったように思う。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
民法	中島 昇	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513240

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

民法を素材にして、修士論文の作成方法を知る。

概要

「民法」では、民法の概要を知るとともに、そのより深い学びを実践することにより、「法的ものの考え方」も含め、修士論文作成に役立つ素養やテクニックを身に付けることを目標とする。

授業の方法としては、下記の授業計画にある各テーマに関連したことが記載されている資料を探し、その内容をまとめて報告し、全員による討論を行う方式による。特に法律問題については受講生同士が自由闊達な議論をして理解を深めて欲しい。その発表内容の理解を通じ、法律の文章の書き方や論理展開の仕方などを、各自で学び取ってもらいたい。修士論文作成に直結する事柄ばかりなので特に力を入れてほしい。

発表においては、脚注もつけた少し長めのレジュメを作成することで、資料の集め方、論点を整理する力や、文章力・要約力及び文章の構成力が磨かれることを期待している。レジュメはその場で教員が訂正などの指導を行う。なお、授業と並行して、市販されている論文作成のための指導書も最低1冊は読み進めておいて欲しい。

なお、発表課題については、教員にその出来上がったファイルを事前にメールし、その都度、教員がチェックし返信メールで送り返すこととする。

キーワード

民法、脚注のつけ方、文章力、要約力、構成力、「実務経験のある教員による授業科目(司法書士の実務経験を有する)」、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- ・必要な法令や資料を探し出し、その解釈を自らが行える力がつく。
- ・民法がある程度理解できると同時に、法律論文を書く技術を身に付けることができる。

授業計画

- 第1回ガイダンス(レジュメの作成要領など)
- 第2回民法の体系・とくに物権と債権の峻別
- 第3回民法の基本原則と家族法
- 第4回法律行為の解釈・条文の解釈適用と様々な解釈方法
- 第5回民法債権法改正・相続法改正
- 第6回司法制度に関する知識の確認
- 第7回有名な最高裁判決の解釈
- 第8回判例や立法資料の読み方
- 第9回事例判決や基本通達の読み方
- 第10回判例評釈や論文の読み方
- 第11回法的三段論法
- 第12回論証の進め方

第13回文献の集め方・データベースの活用法
第14回文献の引用の仕方やどういふ場合に脚注を付けるか
第15回問題意識の深め方

授業の予習・復習

授業の前後2時間ずつの予習復習が必要である。発表にあたっては図書館での資料調査にかなりの時間が費やされることとなろう。他の受講生が発表した事柄は、復習として、紹介された資料内容を実際に確認することが望ましい。

使用教材

教科書:適宜、指示する。

参考文献:潮見佳男『民法(全)』(有斐閣、2017)

道垣内弘人『リーガルベシス民法入門』(日本経済新聞出版社、第2版、2017)

木山泰嗣『法学ライティング』(弘文堂、2015)

木山泰嗣『新・センスのよい法律文書の書き方』(中央経済社、改訂改題版。2018)

山本守之『事例から考える租税法解釈のあり方』(中央経済社、2018)

『「税法学」執筆要領』をプリントで配布予定。

そのほかに、図書館の参考図書コーナーにある『法律用語辞典』や『税法用語辞典』なども参照すること。

評価方法

授業中の積極的な発言、発表内容、レジュメの内容の深さなどを総合的に勘案して評価する。

具体的には、積極的な発言30%、発表内容30%、レジュメの内容40%である。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

・法学の素養があることが望まれる。そのためには薄めの「法学入門」を読んでおいて欲しい。単に各分野を紹介したものではなく、法とは何か、権利とは何かなど基礎部分が理解できる書物がよい(たとえば田中成明『法学入門』有斐閣、2006)。

・質問や要望については授業中や授業後に受け付ける。また、メール(nnakajima@eco.iuk.ac.jp)で事前予約の上、研究室にたずねてくるのもよい。

前年度の授業評価

民法の説明に多くの時間がとられてしまった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
ワークショップ I (経済のグローバル化)	加藤 一弘	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613310

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

ブレグジット、イギリス、スコットランド

概要

イギリスのEU離脱については、さまざまな議論があり、今後が注目されている。イギリスのEU離脱は、あるいは連合王国としてのイギリスに大きな解体作用をもたらし、それがひいてはヨーロッパのさらなる再編につながるかもしれない、という問題意識から、このワークショップを進めていきたい。

関心の中心に座っているのは、まずはイギリスのEU離脱の経緯および離脱が与えるであろうインパクトについて、できるだけ詳しい情報を整理し、その理解に努めることである。第2に、スコットランドである。この小国は長い間南方イングランドからの圧迫に耐えて、独立を維持していたが、ついにそれがかなわなくなり、1707年イングランドとの合邦によってグレートブリテンに参加する。18世紀の後半より繁栄する大英帝国の利益に与ったことが、イングランドとの合体を正当化してきたが、帝国としてのイギリスが衰退するにつれて、合体の合理性は薄れてきている。加えてスコットランドには、フランスをはじめとして、大陸ヨーロッパとの連携の歴史がある。ブレグジットを引き金として、このような要因が、どのような結果につながっていくのか、という関心である。

ワークショップの進め方であるが、資料収集50%、演習形式での発表と討論50%というエネルギーの配分で行っていききたい。演習形式で行う場合は、あらかじめ担当者が資料を配布・指定し、参加者は分担してこれのレジュメを作成し、それぞれの担当部分について発表を行い、これに基づいて討論することを基本とする。以上の課題についてのフィードバックは、討論を通じて、担当者のコメント、または必要に応じての加筆修正などによって行う。

キーワード

ブレグジット、イングランド、スコットランド、フランス、バルト地域、移民、外資、アクティヴラーニング

授業の到達目標

本ワークショップでの到達目標は、以下の3点である。

- ①ブレグジットについての基本的事実について、多くの情報をさまざまなテキストから収集し、蓄積できる。
- ②ブレグジットの背景に位置しているイングランドとスコットランドとの歴史について、基本的な事実を知ることができる。
- ③今後のブレグジットの進展について、資料探索・収集を行うことができる。

授業計画

第1回 ワークショップの計画および各人の課題の確認

第2回 ブレグジットについて収集した情報についての報告——国民投票前——

第3回 同——国民投票結果をめぐって(ブレグジットが多数派だった地方)——

第4回 同——国民投票結果をめぐって(ブレグジットが少数派だった地方)——

第5回 同——イギリス下院議会選挙——

第6回 同——離脱交渉をめぐって——

- 第 7回 スコットランドとイングランド——緊張の歴史と1707年合邦——
第 8回 スコットランドと大陸ヨーロッパ
第 9回 同——大英帝国の尖兵としてのスコットランド——
第10回 同——大英帝国の衰退とスコットランド——
第11回 同——スコットランド独立の選択肢とブレグジット——
第12回 同——アンビヴァレンス——
第13回 再びブレグジットについての収集情報の発表——現状——
第14回 同
第15回 まとめ

授業の予習・復習

毎回のワークショップごとに4時間の予習・復習を行うこと。

予習・復習は、予習(情報収集と収集した情報の整理)に重点をおくこと。

収集した情報の発表(第2回から第6回、第13回と第14回)では、前回のワークショップで、各参加者の課題を指定するので、これに基づいて情報収集と収集した情報についてのレジュメを作成してワークショップに臨むこと。第 7回から第12回のワークショップでは、前回のワークショップで担当者が資料を配布するので、指定された箇所についてレジュメを作成してワークショップに臨むこと。英文の資料の場合は、指定された範囲を日本語訳すること。レジュメと日本語訳は毎回のワークショップ終了後、担当者に提出すること。レジュメと日本語訳は、担当者がコメントを付して返却する。

毎回のワークショップで重要だと思ったことについて、各自自分用のまとめを作り、蓄積すること。

使用教材

資料収集については、新聞、サイト、その他、各自のイニシアティブで資料を探索すること。

第 7回から第12回については、担当者が各回のワークショップの前の回で資料を配布する。

その際使用する文献としては、Andrew Marr, *The battle for Scotland*, Penguin Books, 2013, T. M. Devine, *Scotland's empire: The origins of the global diaspora*, Penguin Books, 2003 をさしあたって予定している。

評価方法

発表と討論50%、提出されたレジュメまたは英文和訳50%で成績評価を行う。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

遅刻・欠席する場合は、事前に理由を付してメールなどで連絡すること。

合理的な理由のない欠席が5回以上になる場合は、履修を無効にする。

メール・アドレス:k-kato@eco.iuk.ac.jp

日曜を除いてほぼ毎日大学に出てきておりますが、研究室にいる時間はそれほど長くありません。図書館2階参考図書コーナーにすることが多いです。見かけたらお気軽に声をかけてください。

オフィース・アワーは、毎年度木曜3限としていますが、正式には新年度が始まってからお伝えすることになります。

前年度の授業評価

前年度は受講者がおらず、授業を行わなかった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
人事管理	朝日 吉太郎	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513364

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

我国の労使慣行における「日本的なるもの」を捉え、グローバル化とデジタル化の下でのその発展方向を考察します。

概要

1955年からはじまる高度経済成長を支え、世界から注目された要因の一つに、日本の労使慣行があります。日本の労使慣行というと、日本という場所にある労使慣行というだけの無規定な用語という印象が持たれがちです。一方、当該する日本の経営者や労働者も、日本の労使慣行が世界で非常に特殊だという認識をしていません。では、この「日本的なるもの」は如何なるものでしょうか。そして、その中からどうしてブラックな企業社会が生まれてくるのでしょうか。講義では、資本主義的企業の運動と労使関係一般の法則的認識を下に、また外国との比較の中から、「日本的経営」論を検討し、日本の労使関係を捉え直します。また、「日本的経営」が今日のグローバル化とデジタル化の中でどのように変化し、どのような問題をはらんでいるかについて検討します。

授業は、講義を中心としておこない、必要に応じて文献検討をおこないます。

キーワード

年功賃金制度、日本的経営、新日本的経営、成果主義賃金、インダストリー4.0、ブラック企業、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

第二次世界大戦後の日本における人事管理を特徴づけるいわゆる『日本的労使慣行』とは何か、なぜそれがつくられ、また長期にわたって継続してきた理由とは何か、また、それが今日のグローバル化とデジタル化の中でどのように変化しつつあるかについて、学生が法則的認識を深めることができること。

授業計画

第1回	オリエンテーション	労働について
第2回	資本主義的企業における労使関係(1)	労使関係の基礎認識
第3回	資本主義的企業における労使関係(2)	資本主義的企業利益の追求と労働者への影響
第3回	労働市場と労使関係の一般理論(1)	イノベーションと労働市場の階層化
第4回	労働市場と労使関係の一般理論(2)	パワーエリートと人事管理の展開
第5回	戦後日本の労使関係	日本の労使慣行の軸点としての年功賃金制度
第6回	年功賃金制度と企業社会	年功賃金が生み出す職場環境
第7回	戦後ドイツにおける労使関係	ドイツ型労使関係と日本との差異
第8回	グローバル化と労使関係の変化	グローバル化の中での戦後レジームの改変
第9回	ドイツ財界のグローバル戦略とハartz改革	モデル・ドイツの改変に向けた財界・国家戦略
第10回	日本財界の「新日本的経営」戦略	日本的労使関係のグローバル化戦略
第11回	成果主義賃金の失敗とブラック企業	年功賃金制度の見直し、雇用破壊
第12回	インダストリー 4.0	グローバル化に対する独のイノベーション戦略
第13回	インダストリー 4.0と労使関係の影響	すすむドイツ、おくれる日本

第14回 インダストリー 4.0と労働の未来
第15回 まとめ

インダストリー 4.0の光と影

授業の予習・復習

講義は、体系的な内容となっており、前回の講義が次回の講義の前提となり、次回のより具体的な講義を通じて、前回の抽象的な認識の真理性を確認していくという方法で組み立てられています。そのため講義の復習を重視し、講義を通じて得た知識や方法を確実に取得し、それを積み重ねることを重視します。また、講義は個々の研究のきっかけにすぎないので、単なる復習だけではなく、予習もかねて自由な自主学習を奨めます。そこで、得た知識や疑問、授業全体にかかわる論点などに応じて、受講者全員で検討します。

使用教材

・朝日吉太郎著『現代資本主義と資本・賃労働関係』文理閣、2021年
その他の参考文献等は授業で示します。

評価方法

レポート提出(100%) : 学期末にレポートを課します。課題テーマ・内容については授業中に通知します。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

本講義では、人事管理のハウ・ツールの修得を目標にするのではなく、人事管理にかかわる日本の企業社会構造とその動態を分析します。したがって、日本の企業社会に対する通説についても批判的に検討することで、科学をすすめるという立場での講義になります。関連する事柄や文献など等については紹介しますが、その他にも独学で深めることを勧めます。理解を深めるためには、現実社会に対する関心や問題意識を深め、社会科学に関するベーシックな理解を高めることが鍵となります。

学外教員なので、常設的な相談時間を設定しませんが、相談や質問がある場合には、メール等の連絡をいただけると対応したいと思います。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
中小企業経営	中西 孝平	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513353

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール, 専門演習, 論文・研究指導, ワークショップ, 対話・討論型授業)

テーマ

地場産業の姿から日本のモノづくりを理解する

概要

この講義は、全国の地場産業の姿から、日本のモノづくりを理解することを目的としています。第1～3回の講義で地場産業の基礎的な知識を身に着けた後、毎回、全国の産地を事例として取り上げ、研究を進めていく予定です。大学院の講義ですので、教員から一方的に知識を提供するというカタチは採らずに、教員と受講生のとの会話を通して、互いの知識を深めていく方法を探りたいと考えています。なお、受講に際しては、この講義で学ぶ内容が自身の研究にどのように活用できるかをつねに念頭に置いてください。

※ レポート等の提出物の返却を希望される方は、担当教員の研究室へお越しください。その際、レポートに対するコメント等をお伝えします。

キーワード

中小企業, 鹿児島県の地場産業, 環境変化, アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- (1) 鹿児島県経済の課題について理解し、議論することができる。
- (2) 日本の中小企業を取り巻く状況について理解し、鹿児島県経済との関係において理解することができる。
- (3) 授業を通して得た知識を、自身の研究に活用することができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 地場産業の発展経緯と類型
- 第3回 地場産業に影響を与えた要因
- 第4回 めがねフレーム(福井県鯖江市)
- 第5回 金属洋食器(新潟県燕市)
- 第6回 杞柳製品(兵庫県豊岡市)
- 第7回 京都の伝統と革新(京都市)
- 第8回 ピアノ(静岡県浜松市)
- 第9回 壺酢(霧島市福山町)
- 第10回 焼酎(九州地方)
- 第11回 家庭用仏壇(南九州市川辺町)
- 第12回 旭川ラーメン(北海道旭川市)
- 第13回 鹿児島県の伝統産品
- 第14回 大島紬(奄美大島&鹿児島県本土)
- 第15回 福井大学との連携によるワークショップ

※ 受講者の状況によって、授業の進度や内容を調整することがあります。

授業の予習・復習

- (1) 第1回目の授業時に連絡します。
- (2) 授業前後に必ず全4時間程度の予習・復習をしてください。
- (3) 授業後に必ず自身の研究を再検討してください。

使用教材

- ・特に指定しません。

評価方法

- ・中間レポート 30%
- ・期末レポート 70%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- (1) 質問等は、授業終了後かメールで対応します。
- (2) 欠席される場合、事前に授業時かメールで連絡してください。
- (3) 担当教員のメールアドレス:k-nakanishi@eco.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

・受講生のはみな社会人の方なので、知識が豊富です。そのような方に対してどのような授業を行うべきなのかを検討のうえ、授業内容に反映させたいと思います。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営情報	大久保 幸夫	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513361

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

統計ソフトSPSSによる統計分析

概要

経済・経営の実証研究には、統計分析の手法とコンピュータ統計ソフトが欠かせない。この授業の目的は、経済・経営に関する統計分析の理論と方法を修得することである。課題については次の時間に解説する。授業はコンピュータと統計ソフトSPSSを使い例題と問題を解く形で進める。統計学やコンピュータに関する予備知識がなくても理解できるようにする。

キーワード

統計分析、コンピュータ、SPSS、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

統計ソフトSPSSを使って統計分析ができる。

授業計画

- 第1回 統計分析とSPSS
- 第2回 データの取り扱い
- 第3回 記述統計
- 第4回 平均値の区間推定
- 第5回 母平均の検定
- 第6回 平均値の差の検定
- 第7回 独立性の検定
- 第8回 回帰分析
- 第9回 時系列分析
- 第10回 判別分析
- 第11回 分散分析
- 第12回 多重比較
- 第13回 主成分分析
- 第14回 因子分析
- 第15回 応用

授業の予習・復習

授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。
課題がある場合は、自主室等で次の時間までにやっておくこと。

使用教材

プリントを配布する。

評価方法

平常点(70%)、レポート(30%)により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問等はメール(ohkubo@eco.iuk.ac.jp)を利用してください。

前年度の授業評価

前年度の授業評価なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経営	康上 賢淑	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513350

使用言語

日本語(主)英語・中国語・韓国語(兼)

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

各国における産業経営研究

概要

授業の目的は、産業理論と経営理論を踏まえながら、日本をはじめ、東アジア各国と欧米の産業における競争優位を分析し、その特徴を知ることである。授業方法は各自にテキストと関連研究を読み、順番を決めて報告し、討論を行う。講義の最終回の合宿で課題検討とフィードバックを行う。

キーワード

産業経営の概念、産業経営の特徴、国際経営、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

受講生が産業経営論を通じて、産業の概念と産業経営、特に新しい技術によるAI産業の誕生と発展、各国のAI産業特徴などを学び、具体的な事例分析を通して関連知識を身につけることで、各国の産業経営の研究分析の能力を備える。

授業計画

- 1 何故産業経営を学ぶのか？
- 2 産業と職業の分類
- 3 ドラッカーの予測
- 4 サービス化社会
- 5 21世紀の社会・産業・企業
- 6 サービス・マーケティング
- 7 サービス・マネジメント
- 8 NPOマネジメント
- 9 自治体の経営
- 10 IT産業
- 11 AI産業
- 12 環境とサービス
- 13 AI産業経営
- 14 旅行産業
- 15 纏め

授業の予習・復習

毎回のレポートの準備のために、授業前後に合計で4時間以上の予習・復習を行うこと。

使用教材

- 1 羽田昇史・白井義男『サービス産業経営論: 21 世紀の産業・経営』税務経理協会、2002年。
- 2 塩地洋編『東アジア優位産業の競争力—その要因と競争・分業構造 (MINERVA現代経済学叢書)』ミネラル書房、2008。

評価方法

講義での積極的な発表、討論、質問、コメントを70点にし、出席点を30点とする。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

事前の予習を行うのが受講の前提であり、授業中の積極的な議論と質問は大歓迎。オフィスアワーは月曜日から金曜日の12時20分から13時に研究室で行う。

前年度の授業評価

社会経験を持つ学生との議論がとても良かった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営史	加藤 一弘	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513352

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

産業・企業の発展と現代社会

概要

目的:現代社会の成立や特徴は、現状や理論だけでは理解できない。そのため、歴史的視点が必要になる。本科目では、現代社会を構成する産業・企業の歴史的展開について、基礎的な知識を得ることを目的とする。
授業の流れ:テキストを定め、輪読を行う。必要に応じて、解説を入れる。フィードバックは議論の中で行う。

キーワード

経営史 商業史 経済史 アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

現代社会を構成する産業・企業の歴史的展開について、説明できる。

授業計画

第一回 導入、本科目・講義形式等の説明
 第二回 経営史・グローバル経営史
 第三回 米欧アジアにみる製紙業の展開
 第四回 スイスにおける時計産業
 第五回 日本におけるファストファッション
 第六回 第一部 まとめ
 第七回 新興国の自動車メーカー
 第八回 世界における自動車産業
 第九回 タービン
 第十回 電子部品
 第十一回 産業ガス
 第十二回 化学産業
 第十三回 第二部 まとめ
 第十四回 出版業
 第十五回 まとめ

授業の予習・復習

予習復習には授業の前後に4時間程度必要である。

各回の授業で読み進めるテキストを前の週に担当者が指定するので、指定された箇所について各自メモを作って授業に臨むこと。レジュメの作成を指示することがあるので、その場合はレジュメを作成して授業に臨むこと。レジュメは授業の際に担当者に提出すること。
 毎回の授業で重要だと考えたことを、各自自分用のまとめを作って蓄積していくこと。

使用教材

橘川武郎・黒沢隆文・西村成弘(編)(2016年)「グローバル経営史 国境を越える産業ダイナミズム」名古屋大学出版会

評価方法

平常点50%、輪読発表50%。

まとめる方法、発表の仕方については、最初の講義で指定する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

遅刻・欠席する場合は、事前に理由を付してメールなどで連絡すること。

合理的な理由のない欠席が5回以上になる場合は、履修を無効にする。

メール・アドレスk-kato@[eco.iuk.ac.jp]

日曜を除いては、ほぼ毎日大学に出てきていますが、研究室にいる時間はそれほど長くありません。図書館2階の参考図書コーナーにいたことが、比較的多いです。

オフィス・アワーについては、毎年木曜の3限目としていますが、正式には新年度が始まってからお伝えすることになります。

前年度の授業評価

特に不満や要望が出されたことはない。まずまず満足してもらえる授業であったかと思う。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
マーケティング	西 宏樹	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513367

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

マーケティングの考え方や知識を学ぶ

概要

マーケティングの究極的な考え方は、「どうしたらヒトを喜ばせることができるか」にあります。その考え方や知識は、営利組織だけでなく非営利組織でも必要とされています。本授業では、伝統的マーケティングについての理解を深めた上で、近年注目されている価値共創マーケティングについて考察します。尚、課題に対するフィードバックについては、授業終了時に解答例を提示します。

キーワード

顧客、価値所与、価値共創、文脈価値、アクティブ・ラーニング、課題解決型授業

授業の到達目標

価値所与マーケティングと価値共創マーケティングの違いを理解することができる。

授業計画

- 第1回 マーケティングの考え方
- 第2回 マーケティングの構図
- 第3回 マーケティング環境の捉え方
- 第4回 消費者行動(1):購買行動
- 第5回 消費者行動(2):消費行動
- 第6回 セグメンテーション
- 第7回 ターゲティング
- 第8回 ポジショニング
- 第9回 マーケティング・ミックス(1):製品
- 第10回 マーケティング・ミックス(2):価格
- 第11回 マーケティング・ミックス(3):流通経路
- 第12回 マーケティング・ミックス(4):販売促進
- 第13回 サービス・マーケティング
- 第14回 価値共創マーケティング
- 第15回 総括

授業の予習・復習

授業の前後に合計4時間の予習・復習を行ってください。予習では、次回の授業内容について、参考書やインターネット等を用いて自主的に調べて学習し、その活動成果をノートにまとめてください。復習では、授業内容を振り返り、疑問に思う点や関心がある点を自主的に調べて学習し、その活動成果をノートにまとめてください。

使用教材

適宜プリントを配布します。

評価方法

レスポンスシート40%、学習意欲30%、受講態度30%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・授業中は、最低限のルールを守り、誠実な態度で臨んでください。
- ・授業計画は、あくまでも暫定的なものです。受講者の要望等に応じて変更することもあります。
- ・授業時間外の対応については、授業後やEメール(h-nishi@eco.iuk.ac.jp)で対応します。

前年度の授業評価

概ね良好な評価を得た。今後も学生の学習意欲が高まる授業を展開する。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
会計監査	青木 康一	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

我が国の監査制度と財務諸表監査の枠組み

概要

今日、企業不祥事や粉飾決算についての報道が喧しくなされる。そして、必ず監査の意義が問われることになる。そして、企業情報としての財務諸表とその監査の関係が、企業不祥事や粉飾決算が生じるたびに再検討されることになる。

本講義では、財務諸表監査のあり方を考える基礎として、我が国の法定監査としての財務諸表監査制度と財務諸表監査の基本的な枠組みを検討していく。

法的な制度としての金融商品取引法監査と会社法監査を取り上げ、社会的制度としての財務諸表監査のあり方をみていく。ここでは、適正な財務諸表の開示という企業の会計責任と財務諸表監査との関わり、および監査主体としての公認会計士の役割をみていく。

そして、上記の制度的な枠組みを理解した上で、我が国の監査基準に基づき、監査人の適格性、リスク・アプローチによる監査の実施、および監査意見の表明という財務諸表監査の全体像を描いていく。

課題(レポート、小テスト等)を課した場合は、解説や模範解答などを配布する。

講義では、授業計画に示した各回のテーマを履修者に分担してもらい、レジメを作成し報告してもらう。その後、報告内容に基づいて議論していく。

キーワード

財務諸表監査、公認会計士、リスク・アプローチ、監査報告書、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

財務諸表監査の意義を理解できる。

監査人(ex.公認会計士)の役割を理解できる。

リスク・アプローチの考え方を理解できる。

監査意見の意味を理解できる。

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 企業不祥事・粉飾決算

第3回 財務諸表と監査

第4回 金融商品取引法監査 その1 公認会計士の創設

第5回 金融商品取引法監査 その2 現行制度

第6回 会社法監査 その1 商法監査の変遷

第7回 会社法監査 その2 現行制度

第8回 監査の主体

第9回 監査の実施 その1 監査の基本的プロセス

第10回 監査の実施 その2 リスク・アプローチ
第11回 監査の実施 その3 監査計画・監査手続
第12回 監査の報告 その1 監査報告書の基本構造
第13回 監査の報告 その2 除外事項と監査意見
第14回 監査の報告 その3 追記情報
第15回 総括

※課題については、解説や模範解答等を提示します。

授業の予習・復習

予習として、毎回のテーマに沿って、各自で下調べをしておくこと。また、報告担当者は必ずレジメを準備しておくこと。講義終了後には、復習として、当日の報告内容や議論に基づいて要点を整理し、ファイルしておくこと。

日々、「会社」についての報道を注視すること。その要点を整理し、ファイルすることが望ましい。

授業の前後に合計で4時間程度の予習・復習をすること。

使用教材

テキスト・参考文献は、必要な場合適宜紹介する。

評価方法

レポートその他平常の学習を総合して評価する。

平常点50%、報告内容50%。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

1. 簿記・会計について、学部の講義レベルの知識があることが望ましい。
2. 授業計画は暫定的なものであり、受講者の興味や人数等によっては、変更する可能性がある。
3. 質問・要望については、原則として授業中および授業終了後に受け付ける。別途、時間をもうけることも可能である。オフィス・アワーを利用してもよい。また、メール (kaoki@eco.iuk.ac.jp) でも受け付ける。

前年度の授業評価

ほぼシラバス通りに、講義を終了できたと思う。監査論の全体像を、伝えることができたと思う。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
管理会計	福田 正彦	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

管理会計のノウハウや考え方を学んで、実際に企業活動などで活用できるようにする。

概要

財務会計が企業の業績を対外的に公表することを目的とすることに対し、管理会計は企業業績を良くするための内部管理を目的とする。その管理会計のノウハウの基本を「管理会計」で学ぶ。学問に裏付けされたノウハウがいかに企業で実際に役立つのかを理解し、使用できることを目指す。たとえば、どう事業計画を作成すべきなのか、昨今上場企業の約7割が目標とするROE(自己資本利益率)はどう達成すべきなのか、またその課題は何か、企業の戦略を実行するツールとしてのバランスト・スコア・カード(BSC)はどう使えるのかなどである。

より深く理解するため、発表を行ってもらいます。テーマは、事業計画の作成、ROE、BSCの3つです。

キーワード

事業計画、ROE(自己資本利益率)、バランスト・スコア・カード、予算、コストコントロール、アクティブラーニング、実務経験(日産自動車における管理会計と海外部門の実務経験を有する)を有する教員による科目

授業の到達目標

管理会計の基本となるノウハウを理解し、使用することができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、原価の性格:変動費と固定費
- 第2回 事業計画作成 <発表課題1>
- 第3回 損益分岐点分析
- 第4回 短期的意思決定
- 第5回 財務目標:ROA(総資産利益率) <発表課題2>
- 第6回 ROEを考える
- 第7回 事業部の収益管理
- 第8回 長期的意思決定(キャッシュフロー、NPV)
- 第9回 長期的意思決定(IRR、回収期間)
- 第10回 バランスト・スコア・カードの仕組み <発表課題3>
- 第11回 予算管理
- 第12回 予算と実績との差異
- 第13回 コストコントロール ABC
- 第14回 コストコントロール 原価企画から予算へ
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

1つの発表に6時間以上の準備が必要であろう。

さらに授業の準備としての資料の読書に1時間程度。

使用教材

教員が用意する。

評価方法

発表およびそのレポート 75%

授業中の発言 25%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・大学 学部での原価計算と管理会計の授業を修了していることが望ましい。修了していない場合は、授業の前後に、授業の準備に加え、基礎的なことを学習する時間が必要となる。
- ・参加者はこの授業に積極的に参加することが期待されている。
- ・授業時間外の質問などには、e-mailや控え室で対応します。

前年度の授業評価

前回は、発表が2回であった。学生の理解度などを考慮し、発表の回数を決めていきたい。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
税務会計	今村 明代	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO513369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

法人税法における課税所得及び税額の計算の仕組み

概要

この授業では会計と税務の差異に着目し、法人税法における課税所得及び税額の計算の仕組みについて、我が国の制度会計の観点から考察する。

授業は板書・ICTの活用を中心とするが、必要に応じて問題演習や、各自選択したテーマについての発表報告(パワーポイントを利用)も行い、議論して進めていく。課題に対しては、授業の中で模範解答を配布したり、疑問や誤解についてコメントを行う。

キーワード

制度会計、法人税法、アクティブ・ラーニング

実務経験のある教員による授業科目(外資系銀行東京支店での実務経験を有する)

授業の到達目標

我が国の制度会計の観点から、企業会計上の利益計算と法人税法上の課税所得計算との異同を説明できる。

授業計画

第1回 総論

第2回 会計制度論

第3回 租税法の基礎理論

第4回 課税ベースと現行法の所得概念

第5回 法人税法の基本的仕組みと課税要件

第6回 課税所得金額の計算の仕組み

第7回 益金の額・損金の額と計上時期

第8回 資本等取引及び資産の属性

第9回 益金の計算

第10回 損金の計算(1):減価償却資産と繰延資産の償却,リース取引

第11回 損金の計算(2):給与等,準備金,圧縮記帳

第12回 税額計算の仕組み

第13回 グループ法人税制及び企業組織再編税制

第14回 金融取引課税及び国際課税

第15回 まとめ

授業の予習・復習

1. 授業前には、教科書や参考書等で次回授業の該当箇所を読み、わからない用語があるときには調べておくこと。

2. 各自選択したテーマについての発表報告については、パワーポイントを利用した資料を作成すること。
3. 授業の前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

テキスト：未定

参考文献：福浦幾巳編著『租税法入門 上巻 法人税法・消費税法編〔第2版〕』中央経済社

伊藤邦雄著『新・現代会計入門』日本経済新聞出版社

桜井久勝著『財務会計講義<第16版>』中央経済社 その他、授業中に、随時、紹介する。

評価方法

平常点40%、発表30%、レポート30%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

1. 予備知識として、簿記や会計学に関する学部の講義レベルの知識があることが望ましい。
2. 受講生の人数および興味関心等を考慮して、開講後に授業内容や授業運営方法を変更することがある。
3. 質問・要望については、授業中および授業終了後に受け付ける。

前年度の授業評価

最新のホットな問題について、下記の文献を受講生全員で分担・報告し、議論を行い、理解を深めた。

森信茂樹著『デジタル経済と税－AI時代の富をめぐる攻防－』日本経済新聞出版社。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
観光ビジネス	丸山 政行	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO516893

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

人口減少時代の日本にとっては、観光による経済的成長が大きな政策のひとつである。
その観光とはどういうものかを理解を深めるようにします。観光は世界平和への礎ということが深く理解をできるようになることが大きな目標です。

概要

観光マーケティングは供給者、提供者と消費者から成り立っており、成熟市場である現在の日本では特に供給者主導から消費者主導へ視点転換が強く求められている。

本授業では身近な製品のマーケティング戦略の理解から始め、その後、観光に係わるマーケティング活動において、この視点転換をどのようにとらえるのかを、旅行業、航空運輸業、その他の運輸業、ホテル宿泊業などの企業戦略を中心に観光ビジネス全体について学修します。授業の方法としては、担当教員が具体的な事例を提議して、グループディスカッションを経て、プレゼンテーションを行う。また一部講義形式で担当教員が提議するキーワードや具体例を基準としてビジネスモデルの提案を行い、レポートを提出する。それらのレポートやプレゼンテーションを教員、学生で討論へて書面にてフィードバックを行う。

キーワード

観光マーケティング, インバウンド, アウトバウンド

授業の到達目標

幅広い教養と、新しい時代に必要とされる専門的かつ体系的な知識、また、それに裏打ちされた技能を修得し、さらに地球的視野をもって考え、語り合うとともに、他者との協働を追求し、問題解決に向けて実践できるようになることで、観光ビジネスの重要性を理解することが目標です。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション 観光ビジネスとは何か。
- 第2回 観光ビジネスの特性の理解
- 第3回 観光ビジネスのサイクル
- 第4回 ニーズ・ウォンツ・需要
- 第5回 製造業とサービス業の比較
- 第6回 価値・満足・品質
- 第7回 交換・取引・関係・市場と小テスト
- 第8回 ディスティネーションマーケティング
- 第9回 観光ビジネスの実践(航空会社)
- 第10回 観光ビジネスの実践(宿泊産業)
- 第11回 観光ビジネスの実践(インバウンド)
- 第12回 プロモーション(コミュニケーション、パブリックリレーションズと販売促進)
- 第13回 ブランディング戦略と観光ビジネス
- 第14回 地方創生と観光ビジネス

第15回 授業総括

授業の予習・復習

授業の前後に必ず合計4時間程度の予習、復習を行うこと。

1回目に次回のテーマを与えるので予習を文献、ネット等で調べてくること。

毎回の授業ノートを作成すること。

使用教材

パソコン持参のこと

評価方法

総括試験(論文形式の論述試験)100%

規定を超える欠席は評価対象外とする。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

SNSやメールでも随時、質問など受け付けます。積極的な学修をサポートします。

前年度の授業評価

おおむね、好評である。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営管理特講	康上 賢淑	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO513350

使用言語

日本語(主)英語・中国語・韓国語(兼)

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

企業組織とマネジメント

概要

バーナードの経営者の役割によるリーダーシップとその影響力による企業組織のマネジメントとの関係性を検討し、その後急激に変化している市場による企業組織や経営者の気質、企業組織のマネジメント変化を分析する。授業方法は各自にテキストと関連研究を読み、順番を決めて報告し、討論をする。講義の最終回の合宿で課題検討とフィードバックを行う。

キーワード

人間論、協働論、組織論、管理論、リーダーシップ、オープン・システム、実行の科学、アクティブラーニング

授業の到達目標

企業における経営管理の意義を学び、その基本的な要素とキーワードを徹底的に議論し、マスターすることができる。

授業計画

- 1 企業における経営管理の意義を討論
- 2 人間論
- 3 協働論
- 4 組織論
- 5 管理論
- 6 リーダーシップとは？
- 7 経営者のリーダーシップ
- 8 オープン・システム
- 9 実行の科学
- 10 経営管理の基本要素①
- 11 経営管理の基本要素②
- 12 企業管理の基本用語①
- 13 企業管理の基本用語②
- 14 経営管理の特質を討論
- 15 合宿(まとめる作業)

授業の予習・復習

事前の特講内容と関連する資料を調べたり、前回の内容を復習したりすること。
授業の前後4時間程度、予習・復習を行うこと。

使用教材

飯野春樹監訳・日本バーナード協会訳『組織と管理』文真堂、1990年。

評価方法

発表内容25%、議論の態度25%、質疑25%、コメント25%によって評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

事前準備は不可欠である。授業の時間外の質問はラインやメールで対応する。
オフィスアワーの時間帯は12時20分から13時までの間で行う。

前年度の授業評価

社会経験を持つ学生との議論がとても良かった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経済理論演習 I	平出 宜勝	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613310

使用言語

日本語と英語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

ミクロ経済理論を学ぶ。

概要

ミクロ経済学分析で用いられる基本モデルを理解する。ミクロ経済理論や応用ミクロ経済学に関する論文やテキストの報告を受講者に行ってもらい、議論しながら理解を深める。報告に用いる資料は添削し返却する。

キーワード

ミクロ経済学、市場均衡、市場の失敗、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

ミクロ経済学理論を理解およびそれらを応用し、経済事象を理解・分析できるようになること。

授業計画

- 第1回 はじめに・数学の復習
- 第2回 消費者行動の理論(効用と無差別曲線、予算制約線)
- 第3回 消費者行動の理論(消費者の効用最大化、所得効果と代替効果)
- 第4回 企業行動の理論(生産関数、費用関数)
- 第5回 企業行動の理論(企業の利潤最大化、利潤と所得分配)
- 第6回 市場均衡(部分均衡分析)
- 第7回 市場需要と市場供給
- 第8回 消費者余剰
- 第9回 市場均衡(一般均衡分析)
- 第10回 厚生経済学の第1基本定理
- 第11回 厚生経済学の第2基本定理
- 第12回 市場の失敗(外部不経済下の市場均衡)
- 第13回 市場の失敗(外部不経済に対する経済政策)
- 第14回 公共財の最適供給
- 第15回 終りに

授業の進捗や受講者の理解度などを考慮して、上記の計画は変更することもある。

授業の予習・復習

授業の前後に必ず4時間程度の予習・復習を行うこと。報告に用いる論文やテキストの内容をまとめた資料を提出してもらう。

使用教材

授業のなかでテキスト、参考文献を紹介する。

評価方法

平常点40%、発表30%、レポート30%の割合で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

ミクロ経済学の内容を復習しておいてください。簡単な代数学ならびに解析学を分析用具とする科目なので、
論述内容にあわせてモデルの数理的理解ができるようにするためにも、数学関連の教科書を紐解いておくとい
いでしょう。オフィスアワーは講義時にお伝えします。

前年度の授業評価

今年度より担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経済理論演習Ⅱ	平出 宜勝	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613310

使用言語

日本語と英語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

ミクロ経済理論を学ぶ。

概要

ミクロ経済分析で用いられる基本モデルを理解する。ミクロ経済理論や応用ミクロ経済学に関する論文やテキストの報告を受講者に行ってもらい、議論しながら理解を深める。報告に用いる資料は添削し返却する。

キーワード

ミクロ経済学、独占、ゲーム理論、不確実性、情報の非対称性、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

ミクロ経済学理論を理解およびそれらを応用し、経済事象を理解・分析できるようになること。

授業計画

- 第1回 完全競争市場の復習
- 第2回 独占(独占企業の行動)
- 第3回 独占の弊害
- 第4回 自然独占と価格規制
- 第5回 ゲーム理論と情報の経済学
- 第6回 ナッシュ均衡
- 第7回 寡占への応用(数量競争、クールノー・モデル)
- 第8回 寡占への応用(価格競争、ベルトラン・モデル)
- 第9回 部分ゲーム完全均衡
- 第10回 寡占への応用(シュタッルベルク・モデル)
- 第11回 保険とモラル・ハザード
- 第12回 モラル・ハザードとその対策
- 第13回 逆淘汰とシグナリング
- 第14回 労働市場のシグナリング均衡
- 第15回 終りに

授業の進捗や受講者の理解度などを考慮して、上記の計画は変更することもある。

授業の予習・復習

授業の前後に必ず4時間程度の予習・復習を行うこと。報告に用いる論文やテキストの内容をまとめた資料を提出してもらう。

使用教材

授業のなかでテキスト、参考文献を紹介する。

評価方法

平常点40%、発表30%、レポート30%の割合で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

ミクロ経済学の内容を復習しておいてください。オフィスアワーは講義時にお伝えします。

前年度の授業評価

今年度より担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経済政策演習 I	槇 満信	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613331

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

経済政策の理論と応用

概要

この演習では、経済政策の大学院水準のテキスト・ブックについて輪読することで、経済政策の見方を身につけることをめざす。あわせて、修士論文の支度にも取り掛かる。修士とは、インターナショナルズ(国際級の学会誌の論文)を読んで理解できる人のことである。

松原隆一郎『経済政策』のそれぞれの章の中身について、前もって決めておいた参加者に報告してもらう。その際、単に中身を纏めるだけでなく、分からなかった点についてさらに調べものをするなどして報告してもらう。また参加者間での議論を重視する。

課題に対するフィード・バック方法:授業中に綿密な論評を行う。

キーワード

経済政策 アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

経済政策の理論に基づいて現実の問題を考えることができる。

授業計画

第1回 「効率－公正」モデルから「不確実性－社会的規制」モデルへ

第2回 市場と共有資本:社会・自然・文化

第3回 市場と競争

第4回 市場と参加

第5回 社会保障

第6回 公共財

第7回 外部性

第8回 企業と倫理

第9回 財政政策

第10回 金融政策

第11回 危機における財政政策と金融政策

第12回 国際経済政策

第13回 市場と経済構造

第14回 農業のゆくえ

第15回 地方経済政策

授業の予習・復習

2単位の修得に必要な学習時間は90時間(講義の場合は受講30時間と予習・復習に60時間)となっているの

で、毎回、その時間数に見合ったおさらいをしっかりとしておくこと。

演習参加者全員に、毎回自分が報告する積もりで原稿をこしらえてくることを求める。

使用教材

松原隆一郎『経済政策：不確実性に取り組む』（放送大学教育振興会、2017年）をテキスト・ブックとする。

評価方法

報告の中身、議論での発言、参加態度にそれぞれ、34パーセント、33パーセント、33パーセントの重みをつける。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

大学院の科目であるので、学部で経済学を学んでいることが望ましい。

質問等があるときは、個別に連絡をもらえれば、対応する時間を設ける。

前年度の授業評価

受講者がいなかった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経済政策演習Ⅱ	榎 満信	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613331

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

経済政策の修士論文に向けて

概要

この演習では、経済政策の大学院水準のテキスト・ブックについて輪読することで、経済政策の見方を身につけることをめざす。あわせて、修士論文の支度にも取り掛かる。修士とは、インターナショナルズ(国際級の学会誌の論文)を読んで理解できる人のことである。

坂井素思『社会的協力論』のそれぞれの章の中身について、前もって決めておいた参加者に報告してもらう。その際、単に中身を纏めるだけでなく、分からなかった点についてさらに調べものをするなどして報告してもらう。また参加者間での議論を重視する。

課題に対するフィードバック方法:授業中に綿密に論評を加える。

キーワード

経済政策 アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

目標:経済政策の分野における論文主題を定めることができる。

授業計画

- 第1回 社会的協力はなぜ必要とされるのか
- 第2回 協力にはどのような類型があるのだろうか
- 第3回 協力関係のフォーマル化とインフォーマル化
- 第4回 近代的な協力と支配モデル
- 第5回 協力の交換モデルと「囚人のジレンマ」問題
- 第6回 影響力と協力の互酬モデル
- 第7回 近代的協力モデルと大規模化組織の発展
- 第8回 近代的協力組織の限界とジレンマ
- 第9回 エージェンシー化と協力活動
- 第10回 協力の多様性問題と「組織立った複雑性」
- 第11回 ダウンサイジングと近代的協力の変容
- 第12回 リーダーシップの協力関係と「信頼」
- 第13回 社会関係資本とインフォーマルな協力関係
- 第14回 支援とケアでの協力活動
- 第15回 協力のネットワーク形成とミンツバーグ問題

授業の予習・復習

2単位の修得に必要な学習時間は90時間(講義の場合は受講30時間と予習・復習に60時間)となっているの

で、毎回、その時間数に見合ったおさらいをしっかりとしておくこと。
演習参加者全員に、毎回自分が報告する積もりで原稿をこしらえてくることを求める。

使用教材

坂井素思『社会的協力論：いかに近代的協力の限界を超えるか』(放送大学教育振興会、2020年)をテキスト・ブックとする。

評価方法

報告の中身、議論での発言、参加態度にそれぞれ、34パーセント、33パーセント、33パーセントの重みをつける。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

大学院の科目であるので、学部で経済学を学んでいることが望ましい。
質問等があるときは、個別に連絡をもらえれば、対応する時間を設ける。

前年度の授業評価

受講者がいなかった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
国際経済演習 I	カムチャイ ライサミ	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613336

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

貿易の理論と政策

概要

貿易保護主義の傾向が出始めている今日この頃、国際貿易とは何かを原理と実証から学ぶ必要がある。グローバル経済化しつつある現在、果たして保護主義貿易が機能できるのか今一度吟味する時期が来ている。国際経済の仕組みや働きに対する理解が要求される。

本演習は、国際経済の基礎理論と政策を学習することを目的とする。

研究課題を設定し、それに対する研究方法を指導する。毎回の授業は前回の学習内容をフィードバックして、より一層高いレベルへ進めていく。

キーワード

比較優位論、貿易の利益、自由貿易、保護貿易、生産と貿易、輸出と輸入、要素価格の決定、国際要素移動、貿易体制、貿易政策、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. 貿易の基礎理論と貿易政策が説明できる。
2. 国際経済と貿易について意見を示すことができる。
3. 国際経済の時事問題を調べることができる。

授業計画

- 第1回 世界経済の動態
- 第2回 世界貿易の捉え方
- 第3回 リカードの比較優位論
- 第4回 相対価格と相対賃金
- 第5回 2要素経済モデル
- 第6回 ヘクシャー＝オリーン・モデル
- 第7回 貿易の標準モデル
- 第8回 所得移転と交易条件
- 第9回 不完全競争と貿易
- 第10回 外部経済と貿易
- 第11回 生産要素の国際移動
- 第12回 貿易政策の手段
- 第13回 貿易政策の政治経済
- 第14回 発展途上国の貿易政策
- 第15回 貿易の交渉と協調

研究計画や修士論文の準備など指導する場合がある。

授業の予習・復習

授業前後に必ず合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

教科書： P.R.クルーグマン／M.オブストフェルド／M.J.メリッツ著 [2017]『クルーグマン国際経済学～理論と政策～ 上・貿易編』(原書第10版)、丸善出版、定価(本体4,000円＋税) ISBN: 978-4-621-30057-2

教科書の使用法： 毎回の授業に持参し、時間外でも熟読する。

評価方法

平常点30%、発言30%、レジュメ30%、発表10%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ① 主体的研究姿勢を重視する。
- ② 演習に対する熱意等の評価は、減算により評価する。(最大30%)

オフィス・アワー： 木 17:00～17:30

e-mail: kamchai@eco.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

履修者なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
国際経済演習Ⅱ	カムチャイ ライサミ	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613336

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

グローバル金融危機とアジア

概要

1990年代はアジア経済が飛躍な経済発展を遂げた。金融自由化の下で各国経済はグローバル金融に組み込まれていく。1997年のアジア通貨危機が発端で不安定な金融経済を運営していかなければならなくなる。

本演習では、各国の取り組んでいる課題を題材にし、通貨・金融危機の発生メカニズムと処方箋について研究する。

前期に引き続き、設定された研究課題を点検し、目的整合性を再確認する。毎回の授業は前回の学習内容をフィードバックして、より一層高いレベルへ進めていく。

キーワード

アジア通貨危機、金融自由化、国際資本市場、アジアの経済成長、グローバル金融危機、金融ガバナンス、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. アジア通貨危機の発生要因が説明できる。
2. 東アジア各国の通貨・金融危機の対応について意見を示すことができる。
3. アジア通貨危機とグローバル金融危機について調べることができる

授業計画

- 第1回 アジア金融の問題所在
- 第2回 アジア通貨危機と日本
- 第3回 ワシントン合意とIMF
- 第4回 タイ:金融自由化の帰結
- 第5回 韓国:中進国の優等生
- 第6回 マレーシア:マイウェイを行く
- 第7回 インドネシア:経済危機から政治危機へ
- 第8回 香港:非常時の非常行動
- 第9回 中国:飛翔するドラゴン
- 第10回 危機から統合へ
- 第11回 金融工学の新世界
- 第12回 金融規制の過ち
- 第13回 グローバル金融の崩壊
- 第14回 危機のガバナンス
- 第15回 グローバル金融危機は繰り返す

研究計画や修士論文の準備など指導する場合がある。

授業の予習・復習

授業前後に必ず合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

教科書: Sheng, Andrew [2009]. From Asian to Global Financial Crisis. New York: Cambridge University Press. ISBN: 978-0-521-11864-4.

教科書の使用法: 毎回の授業で英語の原書を読む。時間外でも熟読する。

評価方法

平常点30%、発言30%、レジュメ25%、発表15%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ① 先行履修科目: 「国際経済」の同時履修が望ましい。
- ② 主体的研究姿勢を重視する。
- ③ 演習に対する熱意等の評価は、減算により評価する。(最大30%)

オフィス・アワー: 木 17:00～17:30

e-mail: kamchai@eco.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

履修者なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
金融経済演習 I	磯山 啓明	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613380

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

ファイナンスの実証分析

概要

本演習は、資本市場の実証分析を取り扱う。ファイナンス理論を現実の資本市場に適用した場合、いくつかの問題が提起されることがある。その諸問題について考察を深め、研究することを目的とする。
学生各自がそれぞれの問題意識に沿って研究テーマを見つけ、資料収集を行い、分析できるように指導する。

キーワード

資産評価モデル, 株式市場, 計量分析, アクティブラーニング

授業の到達目標

ファイナンスの理論に基づいた実証分析の方法を習得すること。
修士論文のテーマを設定できること。

授業計画

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 Discount Factor ModelとGMM推計の枠組み
- 第3回 GMM推計のモーメント条件
- 第4回 GMM推計の検定統計量、モデル間比較
- 第5回 GMM推計のWeighting Matrix
- 第6回 Spectral Density Matrixの推計
- 第7回 Time-Series Regression
- 第8回 OLS, GLS Cross-Sectional Regression
- 第9回 GMM Cross-Sectional Regression
- 第10回 Discount FactorとGMM推計
- 第11回 Excess ReturnとGMM推計
- 第12回 修士論文テーマ構想(1)
- 第13回 修士論文テーマ構想(2)
- 第14回 修士論文のテーマの検討
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

授業の前後で合計4時間程度の予習・復習をすること。

使用教材

Cochrane, J.H.(2005) Asset Pricing Model, Princeton University Press.

評価方法

平常点30%, 発表30%, レポート40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- 1.授業は出席を重視する。
- 2.オフィスアワーは最初の授業で明示する。
- 3.計量分析の知識が求められるので、その知識の習得に意欲的であること。

前年度の授業評価

今年度より担当

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
金融経済演習Ⅱ	磯山 啓明	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613380

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

ファイナンスの実証分析

概要

本演習は、資本市場の実証分析を取り扱う。ファイナンス理論を現実の資本市場に適用した場合、いくつかの問題が提起されることがある。その諸問題について研究する。

学生が設定したテーマに沿って、文献調査、修士論文の作成に向けて指導する。

キーワード

資産評価モデル, 株式市場, 計量分析, アクティブラーニング

授業の到達目標

各自が設定した修士論文のテーマに沿って、文献調査や基礎研究ができること。

授業計画

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 修士論文の作成方法
- 第3回 先行研究の分析:基本文献の読み込み(1)
- 第4回 先行研究の分析:基本文献の読み込み(2)
- 第5回 先行研究の分析:基本文献のまとめ
- 第6回 先行研究の分析:基本文献の検討
- 第7回 修士論文の構想:テーマの検討(1)
- 第8回 修士論文の構想:テーマの検討(2)
- 第9回 修士論文の内容の発表
- 第10回 修士論文の内容の検討
- 第11回 修士論文の章別編成の発表
- 第12回 修士論文の章別編成の検討
- 第13回 修士論文の資料の報告
- 第14回 修士論文の資料の検討(1)
- 第15回 修士論文の資料の検討(2)

授業の予習・復習

授業の前後で合計4時間程度の予習・復習をすること。

使用教材

Cochrane, J.H.(2005) Asset Pricing Model, Princeton University Press.

評価方法

平常点30%, 発表30%, レポート40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーは最初の授業で明示する。

前年度の授業評価

今年度より担当

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経済演習 I	松本 俊哉	前期	2

ナンバリングコード

M_ECO616020

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

資本主義経済の構造変化について考える

概要

経済の「サービス化」や「デジタル化」に象徴されるように、ものづくりを基盤に発展してきた資本主義が様変わりをしつつある。経済成長を牽引する要素が「有形資産」から「無形資産」へと移行しつつあるともいわれる。こうした資本主義経済の構造変化について理解を深め、日本企業の競争力や求められる経済政策、社会的公正の確保等について考える。

授業はテキスト輪読の形式で行う。各章の報告と討論を行った次の週には参考文献をもとに補足的な議論を行う。終盤には、履修生の研究課題と本授業を通して得られたインプリケーションについて発表してもらう。

キーワード

ポスト資本主義、脱工業化、無形資産、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

資本主義経済に生じている構造変化について理解し、自分の見解を述べることができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 第1章「変貌しつつある資本主義」報告と討論
- 第3回 第1章の補足議論
- 第4回 第2章「資本主義の進化としての『非物質主義的転回』」報告と討論
- 第5回 第2章の補足議論
- 第6回 第3章「製造業のサービス産業化と日本の将来」報告と討論
- 第7回 第3章の補足議論
- 第8回 第4章「資本主義・不平等・経済成長」報告と討論
- 第9回 第4章の補足議論
- 第10回 終章「社会的投資国家への転換をどのように進めるべきか」報告と討論
- 第11回 終章の補足議論
- 第12回 研究テーマ・課題の発表(1)
- 第13回 研究テーマ・課題の発表(2)
- 第14回 研究テーマ・課題の発表(3)
- 第15回 全体のまとめ

※テキスト輪読の進捗度合いや履修生の数によって授業計画を変更する場合がある。

授業の予習・復習

各回のテキストの範囲を熟読し、議論に参加できるよう準備しておくこと。
授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

諸富徹『資本主義の新しい形』岩波書店、2020年
参考文献は適宜紹介する。

評価方法

報告内容60%、議論への参加姿勢40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問には授業後に対応する。メール等で連絡があれば個別に対応する。
詳細は初回の授業で案内する。

前年度の授業評価

今年度より担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経済演習Ⅱ	松本 俊哉	後期	2

ナンバリングコード

M_ECO616020

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

資本主義経済の構造変化について考える

概要

経済の「サービス化」や「デジタル化」等に象徴される資本主義経済の構造変化について理解を深め、修士論文の作成に向けた理論的課題の検討を行う。

授業の前半は、履修生の研究テーマや理論的な関心をもとに選定した文献の報告と討論を行う。授業の後半は、修士論文の構想を発表してもらい、研究課題に関する議論を通して論文作成の指導を行う。

キーワード

資本主義経済の構造変化、アカデミック・ライティング、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

修士論文の作成に向けて、先行研究の検討を通じた研究課題の整理をできるようになる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 修士論文の問題意識
- 第3回 先行研究の検討(1) 文献収集と概要把握
- 第4回 先行研究の検討(2) 研究背景の理解
- 第5回 先行研究の検討(3) 周辺領域の理解
- 第6回 資料調査(1) 文献・データへのアクセス
- 第7回 資料調査(2) 資料批判
- 第8回 資料調査(3) データの引用と加工
- 第9回 修士論文の構想(1): テーマ設定
- 第10回 修士論文の構想(2): 理論的関心
- 第11回 修士論文の構想(3): 分析・調査の対象
- 第12回 修士論文の構想(4): 分析・調査の方法
- 第13回 修士論文の構成(1): 章立て・アウトライン
- 第14回 修士論文の構成(2): 章・節の要旨
- 第15回 修士論文の構成(3): 参考文献の引用と注釈

※履修生の数に応じて授業計画を変更する場合がある。

授業の予習・復習

授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

修士論文の作成に向けて、文献資料の収集や読み込み等に可能なかぎり時間を割くこと。

使用教材

参考文献を適宜紹介する。

評価方法

報告内容80%、授業参加姿勢20%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問には授業後に対応する。メール等で連絡があれば個別に対応する。
詳細は初回の授業で案内する。

前年度の授業評価

今年度より担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
欧米経済演習 I	西原 誠司	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613336

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

20世紀の資本主義と二つの世界大戦の関係について考える。第一次世界大戦でなくなった人の数は1千万人、第二次世界大戦では、6千万人、ホロコーストで殺されたユダヤ人は、600万人といわれている。この二つの大戦は、当時、最も先進的といわれていたヨーロッパで火ぶたを切られている。

では、なぜこのような悲劇が繰り返されたのか。また、このような悲劇を繰り返さないためには、なにが必要なのか、戦争と経済システムとの関係について考えていく。

概要

「戦争と革命の世紀」と言われた20世紀の政治・経済システムについて考察する。

19世紀の資本主義では、10年周期の経済恐慌が繰り返された。ところが、19世紀の終わりから20世紀に入るとこれまで10年周期で起こっていた経済恐慌が起こらなくなるが、そのかわり、周期的な戦争が起こるようになる。欧米をおって、資本主義システムをとりいれた日本がその典型である。

日清戦争(1894年)、日露戦争(1904年)、第一次世界大戦(1914年ー18年)と10年の周期が刻まれている。ところが、経済恐慌がなくなったかといえばそうではなく、第一次世界大戦後のベルサイユ講和会議(1919年)の10年後には、世界第恐慌(1929年)が起こっている。しかし、その10年後は、もう一度戦争の周期が復活する。第二次世界の勃発である。

このようにみえてくると、経済循環と戦争の勃発との間には、何らかの関係があると予想される。この演習では19世紀との対比で、なぜ、20世紀の前半期に戦争が繰り返し起こるようになったのかということを経済システムに起こった構造的変化をベースに解明する。ただ、戦争というのは、国家間の紛争であるから、それが起こるためには国家による政治の介入を必要とする。それゆえ、この現象は、経済学のみによっては、解明されず、資本主義政治・経済システム全体から生じた現象として把握されなければならないということである。これらの作業を通じて、逆にどうすれば戦争の発生を食い止めることができるかも明らかになってくると思われる。

なお、授業方法としては、毎回、そのテーマにふさわしい映像資料および文献資料を提示し、それをもとに対話・討論する形式で進行していく。そこで出された疑問点、さらに深めるべき討論点については、できるだけその授業で解決するよう心がけるが、時間的に制約があるので、Lineおよびメールを使い、次回の授業が始まるまでに相互に応答するという形で対応し、フィードバック型の授業になるよう工夫したい。

キーワード

LOVE&PEACEの経済学、経済循環と二つの世界大戦、「人種」・民族差別と大量虐殺、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- 1.20世紀の経済システムが理解できる。
- 2.政治システムと経済システムとのつながり——経済循環と戦争との関係が理解できる。
- 3.ナチズム誕生の経済的背景(軍事的ケインズ主義)が理解できる。
- 4.エスノセントリズム(自民族中心主義)のもつ問題性が理解できる。
- 5.学んだことを行動に生かす方法がわかる。

授業計画

- 1.はじめに
- 2.アンネ・フランク悲劇とヒトラーの経済政策
- 3.20世紀の資本主義 ① 自由競争から独占へ
- 4.20世紀の資本主義 ② 金融資本——巨大企業と巨大銀行の結合(ネットワークの形成)
- 5.20世紀の資本主義 ③ 金融寡頭制——巨大銀行・巨大企業(財界団体)による政治支配
- 6.20世紀の資本主義 ④ 帝国主義的対外進出1——世界の経済的分割
- 7.20世紀の資本主義 ⑤ 帝国主義的対外進出2——世界の領土的分割
- 8.20世紀の資本主義 ⑥ 帝国主義的対外進出3——帝国主義列強による領土再分割闘争
- 9.第二次世界と第一次世界大戦 ケインズ「平和の経済的帰結」
- 10.ケインズ経済学の二つの側面1——ニューディールの「失敗」
- 11.ケインズ経済学の二つの側面2——ナチズム経済の「成功」
- 12.ケインズ経済学の二つの側面3——日本の軍国主義
- 13.戦争の経済学1——軍事経済による景気浮揚
- 14.戦争の経済学2——戦争継続による国民的生産力の破壊
- 15.おわりに

授業の予習・復習

- 1.演習形式の授業ですので、参加者には、順番で発表をお願いします。
- 2.発表準備も含め、授業の前後に必ず4時間前後の予習・復習を行ってください。
- 3.具体的な内容については、毎回授業時にその都度指示します。
- 4.授業にかかわることだけでなく、欧米諸国の経済はもちろん、政治・文化・思想等、に広く関心をもってニュース・新聞・雑誌に目を通すようにしてください。

使用教材

拙著『グローバリゼーションと現代の恐慌』(文理閣、2000年)税抜2,900円および朝日吉太郎編著『欧州グローバル化の新段階』(文理閣、2015年)

評価方法

平常点30点、発表点30点、レポート40点。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問・意見については、メールアドレス(seii-n@eco.iuk.ac.jp)およびLineで対応します。

前年度の授業評価

受講者なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
欧米経済演習Ⅱ	西原 誠司	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613336

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

19世紀の資本主義と20世紀の資本主義とを比較することによって、欧米経済演習Ⅰのテーマ(20世紀の資本主義と二つの世界大戦について考える)をより深く追及していく。ここでは、20世紀の資本主義に戦争と恐慌のサイクルがあり、その基礎に19世紀の資本主義の経済循環・産業循環のサイクルがあることを見る。そして、なぜ、19世紀では、経済恐慌を不可欠の一環とする経済循環・産業循環が存在するのかを、資本の本質との関わりで明らかにする。演習生は、欧米経済演習ⅠおよびⅡにおけるテキストの輪読・討論を通じて、欧米経済の題材の中から、興味や関心を醸成し、修士論文の研究テーマが見つけられるよう努力する。

概要

欧米経済を典型とする資本主義は、20世紀に入ると19世紀の資本主義にはなかった特徴をあらわすようになる。だが、全く違った資本主義になったかといえばそうではなく、恐慌あるいは戦争という違いはあるが、ほぼ10年周期の変動を繰り返すという側面では、同一の特徴を持っている。したがって、より深く20世紀の資本主義を理解しようと思えば、19世紀の資本主義が経済恐慌を不可欠の一環とする10年周期の経済循環・産業循環を繰り返すメカニズムを解明しておく必要がある。

そこで、この演習では、1825年にイギリスで始まった周期的経済恐慌を素材に分析を加えることによって、それを引き起こすメカニズムを解明すると同時に、他の資本主義国で起こった恐慌についても、比較検討してみる。そのことによって、経済恐慌という現象が単にイギリスにのみ留まる現象ではなく、国を越え、時代を越え、産業革命を経て、自らの足で立った資本主義であれば、必ず潜り抜けなければならない普遍的な経済法則の発現形態であることが明らかになる。

なお、授業方法としては、毎回、そのテーマにふさわしい映像資料および文献資料を提示し、それをもとに対話・討論する形式で進行していく。そこで出された疑問点、さらに深めるべき討論点については、できるだけその授業で解決するよう心がけるが、時間的に制約があるので、Lineおよびメールを使い、次の授業が始まるまでに相互に応答するという形で対応し、フィードバック型の授業になるよう工夫したい。

キーワード

LOVE&PEACEの経済学、19世紀の資本主義と20世紀の資本主義、周期的恐慌、資本主義の本質、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- 1.19世紀資本主義経済システムの構造＝基本的メカニズムが理解できる。
- 2.経済恐慌を不可欠の一環とする経済循環・産業循環のメカニズムが理解できる。
- 3.資本主義理解の基礎的カテゴリーと経済・産業循環理解のための基礎的カテゴリーの違いがわかる。
- 4.一国レベルの経済恐慌が、やがて世界市場を巻き込む世界恐慌として波及するメカニズムが理解できる。
- 5.自由競争の資本主義における政府の経済政策と恐慌の関係が理解できる。
- 6.イギリス資本主義と他の資本主義の同一性と区別が理解できる。

授業計画

- 1.はじめに
- 2.イギリス恐慌史の背景を探る
——イギリスにおける労働者階級の状態と経済恐慌
- 3.イギリス恐慌史と他の国の恐慌史から共通性と違いを見つけ出す
- 4.19世紀の資本主義のメカニズムを探る ① 資本とは何か＝剰余価値の秘密
- 5.19世紀の資本主義のメカニズムを探る ② 資本の蓄積＝剰余価値の資本への転化
- 6.19世紀の資本主義のメカニズムを探る ③ 社会的総資本の再生産と流通＝再生産表式の秘密
- 7.19世紀の資本主義のメカニズムを探る ④ 資本主義的生産の総過程(1)産業資本
- 8.19世紀の資本主義のメカニズムを探る ⑤ 資本主義的生産の総過程(2)商業資本
- 9.19世紀の資本主義のメカニズムを探る ⑥ 資本主義的生産の総過程(3)利子生み資本／銀行資本
- 10.19世紀の資本主義のメカニズムを探る ⑦ 資本主義的生産の総過程(4)資本主義的地代 絶対地代と差額地代
- 11.19世紀の資本主義における経済循環・産業循環のメカニズムを探る① 10年周期の恐慌
- 12.19世紀の資本主義における経済循環・産業循環のメカニズムを探る② 経済恐慌と政府の経済政策
- 13.資本主義解明の系譜——アダムスミス／リカード／ケネー
- 14.資本主義的経済恐慌の解明の系譜——「恐慌の必然性」論争
- 15.おわりに

授業の予習・復習

- 1.演習形式の授業ですので、参加者には、順番で発表をお願いします。
- 2.発表準備を含め、授業の前後に必ず4時間前後の予習・復習を行ってください。
- 3.具体的な内容については、毎回の授業時にその都度指示します。
- 4.授業に係ることだけでなく、欧米諸国の経済はもちろん、政治・文化・思想等、幅広く関心をもってニュース・新聞・雑誌に目を通すようにしてください。

使用教材

拙著『グローバリゼーションと現代の恐慌』(文理閣、2000年)税抜2,900円および朝日吉太郎編著『欧州グローバル化の新ステージ』(文理閣、2015年)税抜き2,700円。

評価方法

平常点30点、発表点30点、レポート40点

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問・意見については、メールアドレス(seiji-n@eco.iuk.ac.jp)およびLineで対応します。

前年度の授業評価

受講者なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
環境経済演習 I	八木 正	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO615190

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

環境と経済をめぐる現状とSDGs

概要

本演習では、環境と経済をめぐる諸問題に理解を深め、修士論文のテーマの決定に向けて準備し、最終的に修士論文を完成できるように指導する。

受講者は、各自の興味・関心のあるテーマを研究し、その成果を発表する。受講者同士が相互に議論を積み重ねながら、論点・問題点を明確に把握し、さらに前進できるように進めていく。

課題として、受講者は報告においてレポート等を作成する。教員がそれにコメントをつけることで、フィードバックを行う。

キーワード

公害 遺伝子組み換え 生態系 世界遺産 地球温暖化 パリ協定 化石燃料 原子力発電 再生可能エネルギー 3R SDGs アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

環境と経済をめぐる現状と課題を理解できる

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 環境と経済をめぐる基本理解(公害)
- 第3回 環境と経済をめぐる基本理解(化学物質汚染)
- 第4回 環境と経済をめぐる基本理解(地域開発)
- 第5回 環境と経済をめぐる基本理解(自然破壊)
- 第6回 環境と経済をめぐる基本理解(エネルギー)
- 第7回 環境と経済をめぐる基本理解(化石燃料)
- 第8回 環境と経済をめぐる基本理解(原子力発電)
- 第9回 環境と経済をめぐる基本理解(再生可能エネルギー)
- 第10回 環境と経済をめぐる基本理解(地球温暖化)
- 第11回 環境と経済をめぐる基本理解(3R)
- 第12回 テーマ別研究報告と討論(公害・化学物質汚染・自然破壊等を中心に)
- 第13回 テーマ別研究報告と討論(エネルギー・地球環境を中心に)
- 第14回 テーマ別研究報告と討論(3Rを中心に)
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

環境と経済をめぐる現状、課題、理論などについて関心を持ち、新聞・書籍・インターネットなどで最低限の知識を得ておくこと。

授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

受講者の研究・報告テーマにしたがって、随時紹介する。

評価方法

平常点30%、発表30%、レポート40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問等については、授業の前後で受け付ける。

それ以外の時間では、メール(yagi@eco.iuk.ac.jp)でも質問等を受け付ける。

また、メールで連絡した上で、研究室に直接訪ねてきてよい。

前年度の授業評価

遠隔授業のやり方を工夫していきたい。全体としては適切な授業だった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
環境経済演習Ⅱ	八木 正	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO615190

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

環境と経済をめぐる現状とSDGs

概要

本演習では、環境と経済に関わる諸問題に理解を深め、修士論文のテーマを決定し、最終的に修士論文を完成できるように指導する。

受講者は、各自の興味・関心のあるテーマを研究し、その成果を発表する。受講者同士が相互に議論を積み重ねながら、論点・問題点を明確に把握し、さらに前進できるように進めていく。

課題として、受講者は報告においてレポート等を作成する。教員がそれにコメントをつけることで、フィードバックを行う。

キーワード

環境 経済 修士論文 テーマ 問題意識 参考文献 アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

修士論文のテーマを決定することができる

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 環境と経済・修士論文に向けて(現状把握の提示)

第3回 環境と経済・修士論文に向けて(現状把握の明確化)

第4回 環境と経済・修士論文に向けて(現状把握の展開)

第5回 環境と経済・修士論文に向けて(問題意識の提示)

第6回 環境と経済・修士論文に向けて(問題意識の明確化)

第7回 環境と経済・修士論文に向けて(仮説の提示)

第8回 環境と経済・修士論文に向けて(仮説の明確化)

第9回 環境と経済・修士論文に向けて(先行研究の探求)

第10回 環境と経済・修士論文に向けて(先行研究の提示)

第11回 環境と経済・修士論文に向けて(先行研究の詳細の把握)

第12回 環境と経済・修士論文に向けて(先行研究の批判的理解)

第13回 環境と経済・修士論文に向けて(独自の見解の提示)

第14回 環境と経済・修士論文に向けて(今後の方向性)

第15回 まとめ

授業の予習・復習

環境と経済に関わる現状、課題、理論などについて関心を持ち、新聞・書籍・インターネットなどで最低限の知識を得ておくこと。

授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

受講者の研究・報告テーマにしたがって、随時紹介する。

評価方法

平常点30%、発表30%、レポート40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問等については、授業の前後で受け付ける。

それ以外の時間では、メール(yagi@eco.iuk.ac.jp)でも質問等を受け付ける。

また、メールで連絡した上で、研究室に直接訪ねてきてよい。

前年度の授業評価

遠隔授業のやり方を工夫していきたい。全体としては適切な授業だった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
環境経済演習Ⅳ	八木 正	2年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO615190

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

環境と経済をめぐる現状と課題

概要

本演習では、環境と経済に関わる諸問題に理解を深め、修士論文の執筆を進め、最終的に修士論文を完成する。

受講者は、各自の興味・関心のあるテーマを研究し、その成果を発表する。また、受講者同士が相互に議論を積み重ねながら、論点・問題点を明確に把握し、修士論文の完成、さらにはその内容の説明ができるように進めていく。

キーワード

環境 経済 修士論文 テーマ 問題意識 参考文献 アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

修士論文を完成させ、その問題意識、内容、結論、意義などを説明することができる

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 環境と経済・修士論文に向けて（執筆状況の確認）

第3回 環境と経済・修士論文に向けて（課題の確認）

第4回 環境と経済・修士論文に向けて（問題点の修正）

第5回 環境と経済・修士論文に向けて（専門用語等の確認）

第6回 環境と経済・修士論文に向けて（第一次原稿提出）

第7回 環境と経済・修士論文に向けて（第一次原稿の確認）

第8回 環境と経済・修士論文に向けて（第一次原稿の修正）

第9回 環境と経済・修士論文に向けて（第二次原稿提出）

第10回 環境と経済・修士論文に向けて（第二次原稿の確認）

第11回 環境と経済・修士論文に向けて（第二次原稿の修正）

第12回 環境と経済・修士論文に向けて（第二次原稿の最終チェック）

第13回 環境と経済・修士論文に向けて（最終原稿の提出）

第14回 環境と経済・修士論文に向けて（最終原稿の確認）

第15回 まとめ（最終確認と今後の方向性の検討）

授業の予習・復習

環境と経済に関わる現状、課題、理論などについて関心を持ち、新聞・書籍・インターネットなどで最低限の知識を得ておくこと。

授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

最終的に修士論文を書き上げることができるよう、十分に時間をかけること。

使用教材

受講者の研究・報告テーマにしたがって、随時紹介する。

評価方法

修士論文の問題意識、構成、内容、結論などについて、総合的に評価する。
また、書き上げるまでの経過、そして修士論文の審査なども、評価に加える。
さらに、平常点、発表、課題提出なども、適宜評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問等については、授業の前後で受け付ける。
それ以外の時間では、メール(yagi@eco.iuk.ac.jp)でも質問等を受け付ける。
また、メールで連絡した上で、研究室に直接訪ねてきてよい。

前年度の授業評価

今年度から担当

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
保険経済演習 I	日野 一成	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613391

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・対論型授業)

テーマ

リスク、リスクマネジメント、保険論、モラルリスクに関連する研究成果等を読む

概要

本演習では、1年時に決定の修士論文のテーマにより、論文作成のためのサポートを行う。論文の作成にあたり、テーマに関連する判例や論文を読み込む。各人の課題については、その進捗状況を定期的にチェックし、フィードバックを行っていく。

キーワード

リスク、リスクマネジメント、保険、モラルリスク、アクティブラーニング、「実務経験のある教員による授業科目:損害保険会社勤務歴28年、損害保険調査会社勤務歴9年」

授業の到達目標

修士論文に関連する資料収集を行い、それらを読み込んでいき、当該分野の先行研究を把握できている。

授業計画

第1回 イントロダクション

第2回 文献の収集方法・読み込み方法について

第3回 各自が問題認識するテーマについて

第4回 各自が問題認識するテーマの選定に向けた議論(受講者)①

第5回 各自が問題認識するテーマの選定に向けた議論(教員)②

第6回 各自が問題認識するテーマの選定

第7回 各自の選定したテーマに関連する文献収集(受講者)①

第8回 各自の選定したテーマに関連する文献収集(教員)②

第9回 収集した文献の読み込みと議論(受講者)①

第10回 収集した文献の読み込みと議論(受講者間)②

第11回 収集した文献の読み込みと議論(受講者・教員)③

第12回 収集した文献の読み込みと議論(予備)④

第13回 これまでのレポート報告と議論(受講者)①

第14回 これまでのレポート報告と議論(受講者間)②

第15回 まとめ

授業の予習・復習

授業前後2時間ずつの予習復習が必要。定期的に主要課題のレポートを課す。

使用教材

適宜指示する。

評価方法

平常点50点、レポート50点

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問・要望は授業中や授業後に受けつける。また、メール(k-hino@eco.iuk.ac.jp)による事前予約をとり、研究室に尋ねてください。また、月曜日4限は、研究室で待機しています。

前年度の授業評価

評価なし(本年度新担当)

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
保険経済演習Ⅱ	日野 一成	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613391

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・対論型授業)

テーマ

リスク、リスクマネジメント、保険論、モラルリスクに関連する研究成果等を読む

概要

本演習では、1年時に決定の修士論文のテーマにより、論文作成のためのサポートを行う。論文の作成にあたり、テーマに関連する判例や論文を読み込む。定期的に内容のチェックを行い、フィードバックする。

キーワード

リスク、リスクマネジメント、保険、モラルリスク、アクティブラーニング、「実務経験のある教員による授業科目:損害保険会社勤務歴28年、損害保険調査会社勤務歴9年」

授業の到達目標

修士論文に関連する資料の収集とそれらを読み込んでいき、先行研究が把握できている。

授業計画

- 第1回 選定したテーマに関連する資料の読み込み(受講者)
- 第2回 選定したテーマに関連する資料の読み込み(受講者間)
- 第3回 選定したテーマに関連する資料の読み込み(受講者・教員)
- 第4回 選定したテーマに対するアウトラインの提示
- 第5回 選定したテーマに対するアウトラインの提示とフォロー
- 第6回 選定したテーマに対するアウトラインの最終提示
- 第7回 選定したテーマに関連する資料の活用方法
- 第8回 収集した文献の読み込みと議論(受講者)
- 第9回 収集した文献の読み込みと議論(受講者間)
- 第10回 収集した文献の読み込みと議論(受講者・教員)
- 第11回 選定したテーマに対する簡単なレポートの作成
- 第12回 選定したテーマに対する簡単なレポートの作成とフォロー
- 第13回 これまでのレポート報告
- 第14回 これまでのレポート報告と議論
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

授業の前後2時間、4時間程度の予習復習が必要である。定期的にレポートの提出を求める。

使用教材

適宜指示する。

評価方法

平常点50点、レポート50点

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問・要望は授業中や授業後に受けつける。また、メール(k-hino@eco.iuk.ac.jp)による事前予約をとり、研究室に尋ねてください。また、月曜日4限は、研究室で待機しています。

前年度の授業評価

本年度新担当

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
財政演習 I	池田 亮一	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613410

使用言語

日本語で行なう授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

現代財政・税制の現状と課題:修士論文への足がかり

概要

財政に関する修士論文執筆に向けた演習です。各自の興味のあるテーマを、教科書の輪読・発表という形で学習します。その際、制度論、近代経済学、学説史、どの分野にも対応した下記使用教材を用います。なお、この財政演習 I では、現代財政および税制の基本構造を理解することを目的とします。

キーワード

財政、税制、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

現代財政および税制の基本構造が理解できる。異なるバックグラウンドの院生ともコミュニケーションが取れる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 現代財政の基本構造(財政の現状)
- 第3回 現代財政の基本構造(財政と財政学)
- 第4回 現代財政の基本構造(予算)
- 第5回 現代財政の基本構造(経費)
- 第6回 現代財政の基本構造(財政と金融)
- 第7回 現代財政の基本構造(地方財政)
- 第8回 現代財政の基本構造(租税論の基礎)
- 第9回 現代財政の基本構造(個人と家計の税金)
- 第10回 現代財政の基本構造(会社と企業の税金)
- 第11回 現代財政の基本構造(一般消費税と個別消費税)
- 第12回 学生による研究報告および討論(予算・経費を中心に)
- 第13回 学生による研究報告および討論(税制を中心に(1))
- 第14回 学生による研究報告および討論(税制を中心に(2))
- 第15回 まとめ

これらはあくまでも計画であり、大幅な変更もありえます。また本計画は、受講生がすべて修士課程1年次であることを想定したのですが、修士課程2年次の学生がいる場合には、それに基づく変更もありえます。

授業の予習・復習

日本の財政や税制に関して新聞や書籍などで最低限の知識を得ておくこと。
授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

教科書(必ず購入すること):

佐藤進・関口浩(2019)『〔新版〕財政学入門』同文館出版

参考文献(各リーディングリストが有用。必ずしも購入の必要は無い):

神野直彦(2007)『財政学 改訂版』有斐閣

林宏昭(2019)『日本の税制と財政』中央経済社

馬場義久・横山彰・堀場勇夫・牛丸聡『日本の財政を考える』有斐閣

土居丈朗編(2012)『日本の財政をどう立て直すか』日本経済新聞出版社

土居丈朗編(2010)『日本の税をどう見直すか』日本経済新聞出版社

評価方法

出席(20%)、発表(30%)、レポート提出状況(50%)などを勘案します。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業後に質問・相談等を受け付けます。それ以外は、事前連絡の後研究室を訪問してください。

前年度の授業評価

前年度は、指導大学院生がいなかったため、開講しなかった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
財政演習Ⅱ	池田 亮一	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613410

使用言語

日本語で行なう授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

現代の税制における現状と課題:修士論文のテーマ決定

概要

本演習では、財政に関する諸問題について理解を深め、修士論文テーマを決定し、最終的に修士論文を完成できる足がかりを築くことをめざします。本講義は修士課程1年次対象科目であることを鑑み、問題意識の具体化、仮説の設定、文献収集を行うこととします。

キーワード

修士論文 テーマ 構成 先行研究の検討 アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

財政・税制に関する修士論文のテーマを決定できる。

授業計画

- 第1回 問題意識の開陳・明確化(1)
- 第2回 問題意識の開陳・明確化(2)
- 第3回 問題意識の開陳・明確化(3)
- 第4回 問題意識の開陳・明確化(4)
- 第5回 問題意識をペーパーにまとめ発表
- 第6回 仮説の探求・開陳・明確化(1)
- 第7回 仮説の探求・開陳・明確化(2)
- 第8回 仮説の探求・開陳・明確化(3)
- 第9回 仮説の探求・開陳・明確化(4)
- 第10回 仮説をペーパーにまとめ発表
- 第11回 文献の収集・研究・比較・新たな仮説(1)
- 第12回 文献の収集・研究・比較・新たな仮説(2)
- 第13回 文献の収集・研究・比較・新たな仮説(3)
- 第14回 文献の収集・研究・比較・新たな仮説(4)
- 第15回 1年次のまとめを発表

この計画は、受講生はすべて修士課程1年次としたばあいのものです。修士課程2年次の受講生がもしあれば、10月末までに一応の脱稿、11月末までの完成をめざすべく、計画の修正が行われるでしょう。

授業の予習・復習

日本の財政や税制に関して新聞や書籍などで最低限の知識を得ておくこと。また、興味のある論文には普段から目を通しておくこと。

使用教材

参考文献:

佐藤進・関口浩(2009)『〔新版〕財政学入門』同文館出版

財政演習Ⅰ、財政での参考文献

井手英策・諸富徹・小西砂千夫(企画編集)(2014)『日本財政の現代史Ⅰ～Ⅲ』有斐閣

また、

Google Scholar: <https://scholar.google.co.jp/schhp?hl=ja>

Cinii: <https://ci.nii.ac.jp>

も参考になるでしょう。

評価方法

レポート提出状況(50%)、出席状況(20%)、発表(30%)などを勘案して総合的に決定する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業後に質問・相談等を受け付ける。それ以外は、事前連絡の後研究室を訪問されたい。

前年度の授業評価

前年度は、指導大学院生がいなかったため、開講しなかった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経済史演習 I	加藤 一弘	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613320

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

経済史を対象領域とする修士論文を作成するための基礎知識・技能を身につける

概要

この演習では、修士論文作成に必要な基礎知識・技能を身につけることを目標とする。

授業では、参加者のそれぞれが、各自のテーマを、さしあたって地域・時代・経済分野の次元で決定し、これに沿って資料を入手し内容を報告する。報告する資料は、当面、テーマとする領域を同じくする研究論文が主体になる。この報告を受けての討論で課題を明確にし、次の研究作業へと進む。以上が参加者が行うべき作業の基本である。

もっともこの作業を進めようとする、ある程度の基礎的知識が必要である。この知識を身につけるために、参加者のテーマを確認した時点より、標準的教科書と考えることのできるテキストを読むところから授業をスタートする。テキストの読み進め方は、経済史という領域で共通了解とされている事柄と、内容のうちでテーマに関連の深い部分とを、基礎知識として確認することが中心である。ここでも参加者が内容を報告し、これを踏まえて討論を行うことは、各自のテーマに即した研究の場合と同じである。テキストを読み進めながら、資料の読み方、資料批判の仕方、新しい課題の見つけ方、レジュメの書き方などについても、力を磨いてもらうことを目標とする。

上に記しているように、授業の内容は、参加者の報告とそれにもとづく討論を中心とする。参加者はできるだけ詳しいレジュメを、できるだけ簡潔に作成して授業に臨んでもらいたい。この、参加者に与えられた課題は、授業での討論を通じ、担当者のコメント、また必要な場合にはレジュメへの加筆修正などによってフィードバックがされることになる。

キーワード

経済史、資料批判、一次資料、二次資料、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

本演習での到達目標は、以下の3点である。

- ①経済史研究で共通了解とされている事柄について正確な知識をもっている。
- ②自分が関心を持っている対象について詳しい知識をもち、自分の問題意識に沿ってこれを要素に分析し、かつ全体に再構成することができる。
- ③自分が関心を持っている対象について資料探索・収集を行うことができる。

授業計画

第1回 授業計画の確認

第2回 研究テーマの確認

第3回 経済史教科書の検討(長岡新吉他『世界経済史入門』ミネルヴァ書房、序章「世界経済史とアジア」)

第4回 経済史教科書の検討(同上書、第2章「資本主義経済の成立」)

経済史教科書の検討(同上書、第3章「資本主義世界体制とアジア」第1節「資本主義世界体制の成立」)

- 第5回 経済史教科書の検討(同上書、同章、第2節「近代アジアの経済社会」)
- 第6回 経済史教科書の検討(同上書、第6章「戦後世界経済とアジア」第1節「パクス・アメリカナの盛衰と日本経済」、第2節「戦後アジア経済の展開」)
- 第7回 テーマとする領域での基本文献の検討
- 第8回 テーマに最も近い先行研究の検討
- 第9回 研究論文の書き方―担当者の論文を材料として―
- 第10回 先行研究の内容整理
- 第11回 資料と先行研究成果の収集方法
- 第12回 独自の解釈と課題
- 第13回 独自の論点
- 第14回 修士論文の構想
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

毎回の演習ごとに4時間の予習・復習を行うこと。

各回の演習で用いる資料は、教科書を読む場合は、前回の演習で担当者が範囲を指定するので、指定された箇所についてレジュメを作成して授業に臨むこと。参加者のテーマに沿った報告・討論の場合は、担当者の指定にしたがって、必要な資料を収集し、これにもとづいてレジュメを作成して授業に臨むこと。

時間の許すかぎり資料の検索を行い、参加者独自の文献目録の作成を行うこと。検索して確認した資料については、速やかな入手に努めること。本学図書館にある資料は早いうちに全て現物を手にし、手許におかない場合でも、所在が明確であるようにすること。

使用教材

経済史教科書として、長岡新吉・太田和宏・宮本謙介編著『世界経済史入門―欧米とアジア―』ミネルヴァ書房1992年を取り上げる。

参考文献は適宜紹介する。

評価方法

提出されたレジュメ50%、発表と討論での発言50%で成績評価を行う。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

遅刻・欠席する場合は、事前に理由を付してメールなどで連絡すること。

合理的な理由のない欠席が5回以上になる場合は、履修を無効にする。

メール・アドレス:k-kato@eco.iuk.ac.jp

日曜を除いてほぼ毎日大学に出てきておりますが、研究室にいる時間はそれほど長くはありません。図書館2階参考図書コーナーにすることが多いです。見かけたらお気軽に声をかけてください。

オフィース・アワーは、毎年度木曜3限としていますが、正式には新年度が始まってからお伝えすることになります。

前年度の授業評価

本演習は、これまで開講がないため、前年度の授業評価については記載するべきものがない。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経済史演習Ⅱ	加藤 一弘	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613320

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

経済史研究の豊富化と修士論文テーマの最終決定

概要

この演習では、「経済史演習Ⅰ」でスタートした参加者各人のテーマに即した研究を、さらに深めるとともに、「経済史演習Ⅰ」で確認したテーマをさらに掘り下げ、修士論文のテーマを最終的に決定することを目標とする。

したがって授業の進め方は、「経済史演習Ⅰ」の第7回目以降と、基本的には同じものとなる。すなわち参加者各人によるレジュメの作成と報告、およびこれにもとづく討論である。参加者には、「経済史演習Ⅰ」での学習・研究を踏まえ、資料の検索・収集、研究の対象についての事実理解、先行研究についての理解、独自の新しいアイデアなどについて、いっそうの前進を目指してもらいたい。

授業は、参加者のレジュメにもとづく報告とそれについての討論を中心とする。レジュメはできるだけ詳しいものを、できるだけ簡潔に作成して授業に臨むこと。以上の課題についてのフィードバックは、授業での討論を通じ、担当者のコメント、また必要な場合にはレジュメの加筆修正などによっておこなう。

キーワード

経済史、資料批判、一次史料、二次資料、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

本演習での到達目標は、以下の4点である。

- ①経済史研究で共通理解とされている事柄について正確な知識をもっている。
- ②自分が関心を持っている対象について詳しい知識をもち、自分の問題意識に沿ってこれを要素に分析し、かつ全体に再構成することができる。
- ③自分が関心を持っている対象について資料探索・収集を行うことができる。
- ④修士論文のテーマを確定し、これに沿って論文の構成を行うことができる。

授業計画

第1回 演習の計画の確認

第2回 テーマとする領域での基本文献の検討―演習Ⅰで行ったものへの追加―

第3回 テーマに最も近い先行研究の検討―演習Ⅰで行ったものへの追加―

第4回 先行研究の内容整理―第2回、第3回を踏まえて―

第5回 独自論点の発展―第4回を踏まえて―

第6回 分析の視点

第7回 夏季休業までに入手した資料の分析

第8回 新たに入手した資料の紹介と分析

第9回 論点・アイデアの練り上げ

第10回 論文の構成についての考え方

第11回 注のつけ方

第12回 新たに入手した資料の紹介と分析(2回目)

第13回 論点・アイデアの練り上げ(2回目)

第14回 修士論文の構想

第15回 まとめ(修士論文作成プランの作成)

授業の予習・復習

毎回の演習ごとに4時間の予習・復習を行うこと。

各回の演習で用いる資料を、担当者の指定にしたがって、必要な資料を収集し、これにもとづいてレジュメを作成して授業に臨むこと。

時間の許す限り資料の検索と検討を行い、文献目録と各文献についてのメモを作成すること。検索して確認した資料については、速やかな入手に努めること。本学図書館にある資料は、現物がどこにあるかを明確にしておくこと。

使用教材

経済史演習 I で取り上げた長岡新吉他『世界経済史入門』ミネルヴァ書房は、本演習でも重要な参考文献として使用する。

その他の参考文献については、授業中に適宜指示する。

評価方法

提出されたレジュメ50%、発表と討論での発言50%で成績評価を行う。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

遅刻・欠席する場合は、事前に理由を付してメールなどで連絡すること。

合理的な理由のない欠席が5回以上になる場合は、履修を無効にする。

メール・アドレス:k-kato@eco.iuk.ac.jp

日曜を除いてほぼ毎日大学に出てきておりますが、研究室にいる時間はそれほど長くありません。図書館2階参考図書コーナーにいたることが多いです。見かけたらお気軽に声をかけてください。

オフィス・アワーは、毎年度木曜3限としていますが、正式には新年度が始まってからお伝えすることになります。

前年度の授業評価

本演習は、これまで開講がないため、前年度の授業評価については記載するべきものがない。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
民法演習 I	中島 昇	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613240

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

税法や税理士法と近接する民法分野の論点研究

概要

税法には民法の概念を用いている場合が多くあり(借用概念)、まさに民法の知識が前提となっているといってもよい。そこでこの授業では、民法の中でもとくに深く租税実務に関わる部分を探究し、その問題点や争点を議論する。自由な議論をとおして民法のより深い学びを实践する。これにより税務における紛争に当たっても、活用可能な民法の知識を備えた上での有機的な処理が可能になろう。

授業の進め方は、授業計画の各回のテーマをそれぞれ受講生に割り当て、調べた結果を発表してもらう形で行うことを予定している。発表の際には、税法と民法の両方の理解を要求することになるので負担が倍になるが、頑張っって欲しい。なお、レジュメはその場で教員が訂正などの指導を行う。授業では合同授業として2年生の修論の発表を行うことがある。その際には実務的な議論を期待している。上級生がどういうテーマを選び、どういう形で論文にしていこうとしているかを知ることは自己の論文作成に大いに参考になろう。

発表にあたってはテーマに関係する様々な論文にあたり、その「論文の型」を見い出しておくことが望まれる。その論文の論理展開やテクニックを自分のものにすることを目指すべきである。民法に関連する分野の税法論文などを参考にしながら、民法の理解と税法の理解を同時に行うことで、より深い考察を行うことができるようになる。

また、フィールドワークなどとは無縁な、多くの文献にあたって論文を書くという分野であるので、片っ端から論文を読み、有用な論文を見つけ出すという姿勢が必要である。多くの論文を読み込むことで、より興味が深まっていき、さらに論文作成についてのエネルギーが湧いてくる。問題を見つけ、それについて自分なりの答えを出せるのも、このような作業からである。

なお、発表課題については、教員にその出来上がったファイルを事前にメールし、その都度、教員がチェックし返信メールで送り返すこととする。

キーワード

論文の型、修士論文のテーマの見つけ方、「実務経験のある教員による授業科目(司法書士の実務経験を有する)」、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- ・租税実務に関わる民法の部分が深く理解できる。
- ・専門用語の定義を意識できるようになる。
- ・修士論文のテーマを決めることができる。

授業計画

一応、中村芳昭・三木義一『典型契約の税法務』の目次の順序で進めるが、希望により各自の関心がある分野でもよい。

割り当てられた部分は、質問されても答えられないところがないように完璧に調べておくこと。

第1回贈与

第2回売買
第3回売買と税法
第4回交換
第5回消費貸借
第6回使用貸借
第7回賃貸借
第8回雇用
第9回請負
第10回委任
第11回寄託
第12回組合
第13回終身定期金
第14回和解
第15回まとめ

授業の予習・復習

授業の前後2時間ずつの予習復習が必要である。さらに図書館での資料調査にかなりの時間が費やされることとなろう。発表にあたっては一つ一つの専門用語の意味をはっきりさせておくこと。

使用教材

教科書:適宜、指示する。

参考文献:中村芳昭・三木義一『典型契約の税法務』(日本加除出版、2018)

松尾弘・益子良一『新訂 民法と税法の接点』(ぎょうせい、2010)

潮見佳男『民法(全)』(有斐閣、2017)

三木義一ほか『新 実務家のための税務相談(民法編)』(有斐閣、2017)

太田 隆良(監)『民法・商法と税務の接点』(税務研究会出版局、2005)

そのほかに、図書館の参考図書コーナーにある『法律用語辞典』や『税法用語辞典』なども参照すること。

評価方法

授業中の積極的な発言、発表内容、レジュメの内容の深さなどを総合的に勘案して評価する。

具体的には、積極的な発言30%、発表内容30%、レジュメの内容40%である。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

・法学や民法の素養があることが望まれる。そのためには薄めの「法学入門」「民法入門」を読んでおいて欲しい。特に法学入門に関しては、単に各分野を紹介したものではなく、法とは何か、権利とは何かなど基礎部分が理解できる書物がよい(たとえば田中成明『法学入門』有斐閣、2006)。

・質問や要望については授業中や授業後に受け付ける。また、メール(nnakajima@eco.iuk.ac.jp)で事前予約の上、研究室にたずねてくるのもよい。

前年度の授業評価

修論のテーマが決まっていなかったようで、学生の発表に対し深く議論するところまでいかなかった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
民法演習Ⅱ	中島 昇	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613240

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

民法・税法判例の分析

概要

民法演習Ⅱでは、数多くの判例を各自が報告することで、徹底した判例分析能力を身に付けてもらう。各自の選んだ修士論文のテーマに関係して問題となっている判例の報告でもよい。もしそれがなければ、民法と税法の錯綜する判例等の分析をお願いする。判例を扱うことで法律問題を身近に感じようになり、問題意識がより深まろう。面白そうなのがあれば、その周辺を修士論文のテーマとするのもよいだろう。

漠然とでも興味を持った部分や論点をさらに鮮明にするため、それを全員の前で公表し、全員にそれについての意見を出し合ってもらおう。それにより自分が気が付かなかった他者の観点が見えてこよう。話し合いを通じ、各自の問題意識やアイデアを深化させ、新たな提言ができるところまで持っていきたい。なお、修論のテーマの微調整をこの時期に行うようにする。

これらの作業を通して、修士論文のアウトラインや、序論と判例検討部分が出来上がるのではないかと考えている。

なお、発表課題については、教員にその出来上がったファイルを事前にメールして欲しい。できればその都度、教員がチェックし返信メールで送り返す予定である。

キーワード

民法・税法の判例分析、問題意識、「実務経験のある教員による授業科目(司法書士の実務経験を有する)」、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- ・判例の分析ができる。
- ・法的なものの考え方ができる。特に法実務的思考が可能になる。
- ・修士論文の判例検討の章が書ける。

授業計画

毎回、各自が修士論文で用いる判例について発表してもらう。

発表時には、判例の読み方ができているかを特にチェックする。

また下記の点についても解説を加えていく予定である。

第1回オリエンテーション(データベースの扱い方、著作権問題など)

第2回判例の分析(民法総則物権)

第3回判例の分析(民法債権)

第4回判例の分析(民法親族相続)

第5回判例の分析(とくに税務関連)

第6回裁決例の分析

第7回基本通達の分析

第8回最高裁判所の法的な価値判断について

第9回判例法の変遷と時代背景について
第10回判例を扱う章の構成方法(どういうものを集めるか)
第11回判例を扱う章の構成方法(どういう切り口か)
第12回各自の問題意識とそれについての討論
第13回各自のアイデアとそれについての討論
第14回どのような論文の型にするかを検討
第15回論文作成プランの報告と検討

授業の予習・復習

授業の前後2時間ずつの予習復習が必要である。さらに図書館での判例調査にかなりの時間が費やされることとなろう。

使用教材

教科書:適宜、指示する。

参考文献:福本知行『法令・判例学習のツボとコツ』(法律文化社、2016)
伊藤義一『税法の読み方 判例の見方』(TKC出版、2011)
朝倉洋子ほか『税務判決・裁決例の読み方』(中央経済社、2014)
中野次雄編『判例とその読み方』(有斐閣、3訂版、2009)
大村敦志『民法研究ハンドブック』(有斐閣、2000)

評価方法

授業中の積極的な発言、発表内容、レジュメの内容の深さなどを総合的に勘案して評価する。
具体的には、積極的な発言30%、発表内容30%、レジュメの内容40%である。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・民法全体を解説した、薄めの本を1冊を読んでおいて欲しい。旧法のものでもかまわない。
- ・質問や要望については授業中や授業後に受け付ける。また、メール(nnakajima@eco.iuk.ac.jp)で事前予約の上、研究室にたずねてくるのもよい。

前年度の授業評価

より深い報告をしてくれた学生がいる中、表面的な報告で終わってしまった学生もいた。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
民法演習Ⅱ	中島 昇	2年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613240

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

民法・税法判例の分析

概要

民法演習Ⅱでは、数多くの判例を各自が報告することで、徹底した判例分析能力を身に付けてもらう。各自の選んだ修士論文のテーマにおいて、問題となっている判例の報告でもよい。もしそれがなければ、民法と税法の錯綜する判例等の分析をお願いする。判例を扱うことで法律問題を身近に感じようになり、問題意識がより深まろう。面白そうなのがあれば、その周辺を修士論文のテーマとするのもよいだろう。

漠然とでも興味を持った部分や論点をさらに鮮明にするため、それを全員前で公表し、全員でそれについての意見を出し合ってもらおう。それにより自分が気が付かなかった他者の観点が覚えてこよう、話し合いを通じ、各自の問題意識やアイデアを深化させ、新たな提言ができるところまで持っていきたい。なお、修論のテーマの微調整をこの時期に行うようにする。

これらの作業を通して、修士論文のアウトラインや、序論と判例検討部分が出来上がるのではないかと考えている。

なお、発表課題については、教員にその出来上がったファイルを事前にメールして欲しい。できればその都度、教員がチェックし返信メールで送り返す予定である。

キーワード

民法・税法の判例分析、問題意識、「実務経験のある教員による授業科目(司法書士の実務経験を有する)」、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- ・判例の分析ができる。
- ・法的なものの考え方ができる。特に法実務的思考が可能になる。
- ・修士論文の判例検討の章が書ける。

授業計画

毎回、各自が修士論文で用いる判例について発表してもらう。

発表時には、判例の読み方ができているかを特にチェックする。

また下記の点についても解説を加えていく予定である。

第1回オリエンテーション(データベースの使い方、著作権問題など)

第2回判例の分析(民法総則物権)

第3回判例の分析(民法債権)

第4回判例の分析(民法親族相続)

第5回判例の分析(とくに税務関連)

第6回裁決例の分析

第7回基本通達の分析

第8回最高裁判所の法的な価値判断について

第9回判例法の変遷と時代背景について
第10回判例を扱う章の構成方法(どういうものを集めるか)
第11回判例を扱う章の構成方法(どういう切り口か)
第12回各自の問題意識とそれについての討論
第13回各自のアイデアとそれについての討論
第14回どのような論文の型にするかを検討
第15回論文作成プランの報告と検討

授業の予習・復習

授業の前後2時間ずつの予習復習が必要である。さらに図書館での判例調査にかなりの時間が費やされることとなろう。

使用教材

教科書:適宜、指示する。

参考文献:福本知行『法令・判例学習のツボとコツ』(法律文化社、2016)
伊藤義一『税法の読み方 判例の見方』(TKC出版、2011)
朝倉洋子ほか『税務判決・裁決例の読み方』(中央経済社、2014)
中野次雄編『判例とその読み方』(有斐閣、3訂版、2009)
大村敦志『民法研究ハンドブック』(有斐閣、2000)

評価方法

授業中の積極的な発言、発表内容、レジュメの内容の深さなどを総合的に勘案して評価する。
具体的には、積極的な発言30%、発表内容30%、レジュメの内容40%である。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・民法全体を解説した、薄めの本を1冊を読んでおいて欲しい。旧法のものでもかまわない。
- ・質問や要望については授業中や授業後に受け付ける。また、メール(nnakajima@eco.iuk.ac.jp)で事前予約の上、研究室にたずねてくるのもよい。

前年度の授業評価

より深い報告をしてくれた学生がいる中、表面的な報告で終わってしまった学生もいた。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
民法演習Ⅲ	中島 昇	2年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613240

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

民法と税法が接する部分の理解と、修士論文を完成の状態に近づけること。

概要

本演習では、1年時に作成した修士論文(半分)に、付け加えることでもって、論文の完成を目指す。資料を読み込むにつれ出来上がってきた自分自身の考えをもとに、本論を展開していったほしい。その際、民法論文に見られる緻密な論理展開をぜひ参考にしてほしい。

授業の方法としては、今まで作成してきた部分や新しく付け加える部分を、新1年生も加わった中で発表してもらい形を予定している。大勢の前で緊張感をもって発表することで、自然と正しい法的推論や法的なものの考え方ができよう。授業中の議論を通して、民法や税法の理解の仕方に誤りがなかったかの確認ができるのである。その際、何気ない相手の発言に論文のヒントが隠されていたりもする。熱くなるほどの大いなる議論を期待している。

教員としては、表現力に注意して指導していきたい。とくに発表と検討会を通して、表現力は向上していく。なぜなら口頭で相手を納得させられないなら、同じ主張の文章も、説得力はないと言ってもいいであろうし、もしかして独り合点であった部分かもしれない。ともあれ試行錯誤することが肝要なのである。修論を早めに完成させて、後はどんどん修正していくという方針がよいであろう。

なお、論文課題については、教員に各章あるいは各節ごと、出来上がったファイルをメールし、できればその都度、教員がチェックし返信メールで送り返す予定である。

キーワード

法的議論、表現力、説得力、「実務経験のある教員による授業科目(司法書士の実務経験を有する)」、アクティブラーニング

授業の到達目標

- ・文献調査がもれなくできる。
- ・自分の問題意識を深化させることができる。
- ・難解な論文を読み、その論点や問題点を指摘することができ、それに対する自分なりの意見が言える。
- ・自分の論文が一応の完成状態にまで達することができる。

授業計画

第1回オリエンテーション

第2回文献の収集方法・読み込み方法・文献ノートについての確認

第3回各自の問題意識の紹介とその検討

第4回各自の論文で用いる用語や概念の紹介とチェック

第5回前期修了者による中間報告会のリハーサル

第6回各自の論文内容にかかわる実務の状況を報告

第7回各自の論文内容にかかわる判例・裁決例の報告と検討

第8回各自の論文内容に係る立法過程における議論の紹介

第9回各自の論文内容の歴史的経緯の報告
第10回各自の論文に用いる先行研究(学説)の紹介
第11回各自の論文に用いる先行研究(学説)の検討
第12回各自の論文で用いる論理構成の紹介とその検討
第13回論文を一応完成させその報告をする
第14回脚注のチェック
第15回論点の再度の見直し

授業の予習・復習

授業の前後2時間ずつの予習復習が必要である。さらに図書館での資料収集にかなりの時間が費やされることとなろう。

使用教材

使用教材:適宜、指示する。

参考文献:近江幸治『学術論文の作法』(成文堂、2011)

中田 信正『財務会計・法人税法論文の書き方・考え方(改訂版)』(同文館出版、2013)

『「税法学」執筆要領』をプリントで配布予定。

評価方法

授業中の積極的な発言、発表内容、レジュメの内容の深さなどを総合的に勘案して評価する。

具体的には、積極的な発言30%、発表内容30%、レジュメの内容40%である。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問や要望については授業中や授業後に受け付ける。また、メール(nnakajima@eco.iuk.ac.jp)で事前予約の上、研究室にたずねてくるのもよい。

前年度の授業評価

実務をされている方が何人かいて学生同士の議論が盛り上がった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
民法演習Ⅲ	中島 昇	2年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613240

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

民法と税法が接する部分の理解と、修士論文を完成の状態に近づけること。

概要

本演習では、これまでに作成した修士論文（半分以上）に、付け加えることでもって、論文の完成を目指す。資料を読み込むにつれ出来上がってきた自分自身の考えをもとに、本論を展開していったほしい。その際、民法論文に見られる緻密な論理展開をぜひ参考にしてほしい。

授業の方法としては、今まで作成してきた部分や新しく付け加える部分を、新1年生も加わった中で発表してもらい形を予定している。大勢の前で緊張感をもって発表することで、自然と正しい法的推論や法的なものの考え方ができよう。授業中の議論を通して、民法や税法の理解の仕方に誤りがなかったかの確認ができるのである。その際、何気ない相手の発言に論文のヒントが隠されていたりもする。熱くなるほどの大いなる議論を期待している。

教員としては、表現力に注意して指導していきたい。とくに発表と検討会を通して、表現力は向上していくものである。なぜなら口頭で相手を納得させられないなら、同じ主張をする文章も、説得力はないと言っていいであろうし、もしかして独り合点であった部分かもしれないからである。ともあれ試行錯誤することが肝要なのである。そして早めに完成させて、後はどんどん修正していくという方針がよいであろう。

なお、論文課題については、教員に各章あるいは各節ごと、出来上がったファイルをメールし、できればその都度、教員がチェックし返信メールで送り返す予定である。

キーワード

法的議論、表現力、説得力、「実務経験のある教員による授業科目（司法書士の実務経験を有する）」、アクティブラーニング

授業の到達目標

- ・文献調査がもれなくできる。
- ・自分の問題意識を深化させることができる。
- ・難解な論文を読み、その論点や問題点を指摘することができ、それに対する自分なりの意見が言える。
- ・自分の論文が一応の完成状態にまで達することができる。

授業計画

第1回オリエンテーション

第2回文献の収集方法・読み込み方法・文献ノートについての確認

第3回各自の問題意識の紹介とその検討

第4回各自の論文で用いる用語や概念の紹介とチェック

第5回前期修了者による中間報告会のリハーサル

第6回各自の論文内容にかかわる実務の状況を報告

第7回各自の論文内容にかかわる判例・裁決例の報告と検討

第8回各自の論文内容に係る立法過程における議論の紹介

第9回各自の論文内容の歴史的経緯の報告
第10回各自の論文に用いる先行研究(学説)の紹介
第11回各自の論文に用いる先行研究(学説)の検討
第12回各自の論文で用いる論理構成の紹介とその検討
第13回論文を一応完成させその報告をする
第14回脚注のチェック
第15回論点の再度の見直し

授業の予習・復習

授業の前後2時間ずつの予習復習が必要である。さらに図書館での資料収集にかなりの時間が費やされることとなろう。

使用教材

使用教材:適宜、指示する。

参考文献:近江幸治『学术论文の作法』(成文堂、2011)

中田 信正『財務会計・法人税法論文の書き方・考え方(改訂版)』(同文館出版、2013)

『「税法学」執筆要領』をプリントで配布予定。

評価方法

授業中の積極的な発言、発表内容、レジュメの内容の深さなどを総合的に勘案して評価する。

具体的には、積極的な発言30%、発表内容30%、レジュメの内容40%である。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問や要望については授業中や授業後に受け付ける。また、メール(nnakajima@eco.iuk.ac.jp)で事前予約の上、研究室にたずねてくるのもよい。

前年度の授業評価

実務をされている方が何人かいて学生同士の議論が盛り上がった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
民法演習Ⅳ	中島 昇	2年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613240

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

民法の論理展開方法の習得と修士論文の修正

概要

本演習は、修士論文の仕上げを目標にする。授業の方法は、主に授業計画の各回であげたチェック項目に従って行う、修論の個別指導である。

本論部分の論理展開が上手くいっているか、解決策はこれでいいのか、一定レベルの者を説得できる文章になっているか、正しい法的推論を用いているかを中心に指導していく。細かい字句の使い方まで注文を付けることがあるかもしれない。その際、納得できない部分があったら大いに反論してもらいたい。類語辞典や用字辞典も活用することを勧める。1年次のときに配った、論文作成マニュアルをもう一度読み直すこと。

なお、論文課題については、教員に各章あるいは各節ごと、出来上がったファイルをメールし、できればその都度、教員がチェックし返信メールで送り返す予定である。

キーワード

個別指導、論理展開、「実務経験のある教員による授業科目(司法書士の実務経験を有する)」、アクティブラーニング

授業の到達目標

修士論文を完成させることができる。正しい法的推論ができる。

授業計画

第1回論文の本論部分で用いる素材の紹介と検討

第2回本論部分の素材の配置について検討

第3回結論の導出方法の検討

第4回中間報告会の準備

第5回論文要旨の完成

第6回本論部分の発表と検討

第7回本論部分の修正

第8回結論部分の理由付けの確認

第9回結論部分の発表と検討

第10回結論部分の修正

第11回修論審査会の想定問答

第12回修士論文の序論の再検討

第13回結論部分の再検討

第14回全体の校正

第15回後期の総括

授業の予習・復習

授業の前後2時間ずつの予習復習が必要である。さらに自己の論文内容の確認として、図書館の資料精査にかなりの時間が費やされることとなろう。

使用教材

使用教材:適宜、指示する。

参考文献:近江幸治『学術論文の作法』(成文堂、2011)

中田 信正『財務会計・法人税法論文の書き方・考え方(改訂版)』(同文館出版、2013)

評価方法

授業中の積極的な発言、発表内容、レジュメの内容の深さなどを総合的に勘案して評価する。

具体的には、積極的な発言30%、発表内容30%、レジュメの内容40%である。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問や要望については授業中や授業後に受け付ける。また、メール(nnakajima@eco.iuk.ac.jp)で事前予約の上、研究室にたずねてくるのもよい。

前年度の授業評価

研究室に個々に来室というかたちで行ったので、きめ細かい指導もできた。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営管理演習 I	大野 陽子	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613360

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

研究の方法論とその理論背景について理解する

概要

定性的方法論研究では、社会科学における定性的研究の方法論を構成する主要なパースペクティブ、データや資料の取り扱い方、そして研究デザインの基本枠組みを学びます。このコースの目的は、特定の二つか二つの方法論を深く掘り下げるというよりも、むしろ経営学に適用できる方法がいかにより多様であるか、そのメニューを示すことにあります。

キーワード

方法論、パースペクティブ、研究デザイン

授業の到達目標

社会科学研究において、多様な方法があることを理解する。修士論文に向けて、自らの論文テーマに適合した方法論を探索するための基礎知識を習得する。

授業計画

1. イントロダクション・社会研究方法の基礎
2. 実証主義的パースペクティブ
3. 解釈主義的パースペクティブ
4. 構造主義的パースペクティブ
5. 歴史的方法論1
6. 歴史的方法論2
7. エスノグラフィー
8. アクションリサーチ
9. 事例研究方法論1
10. 事例研究方法論2
11. グラウンデッドセオリー・アプローチ
12. 実証主義的研究と研究論文
13. 定性的研究と研究論文 1.
14. 定性的研究と研究論文 2.
15. まとめ

授業の予習・復習

授業の前後に必ず4時間程度の予習・復習を行うこと

使用教材

授業資料は配布します。参考資料と教材については、授業にて提示します。

評価方法

レポート50%、発表50%で評価します。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問はメールにて受け付けます。メールアドレスは授業内で共有します。メールには、必ず件名に講義名と名前を記載してください。

前年度の授業評価

今年度より担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営管理演習Ⅱ	大野 陽子	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613360

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会科学分野の研究における方法論

概要

経営学の研究は、因果を推論することである。そのために使用されている多様な研究方法を学ぶことにより、注目する現象を引き起こす因果を推論にあたり、最も適合する方法論を論文で使用するための基礎的知識の獲得を目的とする。

キーワード

社会科学分野の研究、因果、方法論

授業の到達目標

修士論文を作成するための、社会科学分野における研究方法についての基礎的な知識の理解と修得を目標とする。方法だけではなく、その背後にある理論を理解することを目標とする。

授業計画

1. 因果推論
2. 因果推論の理想形
3. 差の差分析
4. 操作変数法
5. 回帰不連続デザイン
6. マッチング法
7. 回帰分析と重回帰分析
8. 事例研究とは
9. 事例研究の価値
10. 反復実験
11. 2つの判断プロセス
12. 一致法と差異法
13. 学術調査と実務調査の差異
14. 事例研究1.
15. 事例研究2,

授業の予習・復習

授業の前後に必ず4時間程度の予習・復習を行うこと

使用教材

中室牧子、津川友介（2017）『「原因と結果」の経済学』ダイヤモンド社

井上達彦（2014）『ブラックスワンの経営学』日経BP社

評価方法

レポート50%、発表50%で評価します。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問はメールにて受け付けます。メールアドレスは授業内で共有します。メールには、必ず件名に講義名と名前を記載してください。

前年度の授業評価

今年度より担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
マーケティング演習 I	西 宏樹	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613367

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

マーケティング研究(1)

概要

修士論文のテーマを明確に設定し、文献収集や先行研究のレビューを行う。授業の方法としては、院生のプレゼンテーションを基に、議論や執筆を進める。尚、課題に対するフィードバックについては、授業終了時に記述例を提示する。

キーワード

マーケティング、消費者行動、アクティブ・ラーニング、課題解決型授業

授業の到達目標

マーケティングの基礎的な知識を理解することができる。自主的に文献を収集し、先行研究のレビューを行うことができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 問題の所在を深く考える
- 第3回 問題の所在をより明確にする
- 第4回 マーケティングに関する文献を収集する
- 第5回 複数の文献を読む
- 第6回 先行研究のレビュー(1):発見事項の抽出
- 第7回 先行研究のレビュー(2):発見事項の整理
- 第8回 先行研究のレビュー(3):議論と再考
- 第9回 先行研究のレビュー(4):発見事項の抽出と整理
- 第10回 先行研究のレビュー(5):先行研究の限界点
- 第11回 RQを再検討する
- 第12回 RQを再設定する
- 第13回 研究目的をより明確にする
- 第14回 進捗状況を報告する
- 第15回 総括と今後の計画

授業の予習・復習

授業の前後に合計4時間の予習・復習を行うこと。予習では、次回の授業内容について、参考書やインターネット等を用いて自主的に調べて学習し、その活動成果をノートにまとめてもらう。復習では、授業内容を振り返り、疑問に思う点や関心がある点を自主的に調べて学習し、その活動成果をノートにまとめてもらう。

使用教材

各人のテーマに合わせて紹介する。適宜プリントを配布する。

評価方法

レポート40%、研究に取り組む姿勢30%、受講態度30%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・授業中は、最低限のルールを守り、誠実な態度で臨むこと。facebookを利用する。
- ・授業計画は、あくまでも暫定的なものである。受講者の要望等に応じて変更することもある。
- ・授業時間外の対応については、授業後やEメール(h-nishi@eco.iuk.ac.jp)、研究室で行う。
- ・やむをえない理由で遅刻・早退・欠席をする場合は、必ず事前に担当教員へ連絡すること。

前年度の授業評価

概ね良好な評価を得た。今後も学生の学習意欲が高まる授業を展開する。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
マーケティング演習Ⅱ	西 宏樹	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613367

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

マーケティング研究(2)

概要

各人の研究テーマに基づいて、調査計画書や調査票を作成し、マーケティング・リサーチを行う。授業の方法としては、院生のプレゼンテーションを基に、議論や執筆を進める。尚、課題に対するフィードバックについては、授業終了時に記述例を提示する。

キーワード

消費者、マーケティング・リサーチ、アクティブ・ラーニング、課題解決型授業

授業の到達目標

マーケティングの専門的な知識を理解することができる。調査計画書や調査票を作成し、自主的にマーケティング・リサーチを行うことができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 調査計画書を作成する
- 第3回 調査計画書を提出し指導を受ける
- 第4回 調査計画書を加筆修正する
- 第5回 調査計画書を再提出し指導を受ける
- 第6回 調査票を作成する
- 第7回 調査票を提出し指導を受ける
- 第8回 調査票を加筆修正する
- 第9回 調査票を再提出し指導を受ける
- 第10回 マーケティング・リサーチ(1):実査
- 第11回 マーケティング・リサーチ(2):変換
- 第12回 マーケティング・リサーチ(3):分析
- 第13回 マーケティング・リサーチ(4):再検討
- 第14回 進捗状況を報告する
- 第15回 総括と今後の計画

授業の予習・復習

授業の前後に合計4時間の予習・復習を行うこと。予習では、次回の授業内容について、参考書やインターネット等を用いて参考書やインターネット等を用いて自主的に調べて学習し、その活動成果をノートにまとめてもらう。復習では、授業内容を振り返り、疑問に思う点や関心がある点を自主的に調べて学習し、その活動成果をノートにまとめてもらう。

使用教材

各人の研究テーマに合わせて紹介する。適宜プリントを配布する。

評価方法

レポート40%、研究に取り組む姿勢30%、受講態度30%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・授業中は、最低限のルールを守り、誠実な態度で臨むこと。facebookを利用する。
- ・授業計画は、あくまでも暫定的なものである。受講者の要望等に応じて変更することもある。
- ・授業時間外の対応については、授業後やEメール(h-nishi@eco.iuk.ac.jp)、研究室で行う。
- ・やむをえない理由で遅刻・早退・欠席をする場合は、必ず事前に担当教員へ連絡すること。

前年度の授業評価

概ね良好な評価を得た。今後も学生の学習意欲が高まる授業を展開する。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
会計演習 I	櫛部 幸子	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

財務会計における基礎知識、会計の基礎概念となる会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計、会計処理を理解する。

概要

会計のなかでも、財務会計に焦点を当て、会計の意義、基礎概念、会計制度と会計基準、資産会計等を学ぶ。さらに、具体的な会計処理を学び、理解することで、なぜこのような処理が必要であるのかを考え、会計的な思考を身に着ける。会計学、財務会計がどうあるべきか、何が必要であるのかを考え研究を行う。授業は各論点内容の発表を行う形式で講義を進める。定期試験(レポート)・授業評価に対するフィードバックに関しては、要望があればオフィスアワーに個別に返却いたします。

キーワード

財務会計における基礎知識、会計の基礎概念となる会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計、会計処理、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

授業の到達目標:財務会計における基礎知識や、会計の基礎概念となる会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計についてだけでなく、具体的な会計処理を理解でき、会計的な思考を身に着けることができる。

授業計画

- 第1回 会計の意義(会計の意義と分類、株式会社と外部利害関係者、財務会計の機能、会計公準)
- 第2回 財務会計の基礎概念(損益計算と利益概念、企業会計原則)
- 第3回 財務会計の基礎概念(概念フレームワーク)
- 第4回 会計制度と会計基準1(会社と企業会計制度の枠組み、会計基準)
- 第5回 会計制度と会計基準2(会計制度の国際的動向)
- 第6回 資産会計総論(資産の意義と資産の分類)
- 第7回 資産会計総論(資産の測定と評価方法、費用配分の原則)
- 第8回 金融資産(金融資産の評価[有価証券、デリバティブ・ヘッジ])
- 第9回 棚卸資産(棚卸資産の範囲と種類、棚卸資産の取得原価、棚卸資産の数量計算)
- 第10回 棚卸資産(数量計算の評価方法・棚卸資産の評価基準[期末評価])
- 第11回 有形固定資産(有形固定資産の意義・分類、有形固定資産の取得原価の決定)
- 第12回 有形固定資産(有形固定資産の減価償却の方法、個別法と総合償却、減耗償却と取替法・圧縮記帳)
- 第13回 無形固定資産(無形固定資産の意義と範囲、無形固定資産の取得原価と償却)
- 第14回 繰延資産(繰延資産の意義と種類、臨時巨額の損失)
- 第15回 総合演習・復習

授業の予習・復習

授業の前後4時間ずつの予習・復習を要する。更に、発表資料作成などの時間を要する。

使用教材

(テキスト)

授業における板書内容・配布プリント

(参考文献)

井上達男・山地範明著『エッセンシャル財務会計』中央経済社、2013年。

桜井久勝『テキスト国際会計基準 第6版』白桃書房、2013年。

武田隆二『最新 財務諸表論 第11版』中央経済社、2008年。

武田隆二『会計学一般教程 第7版』中央経済社、2008年。

平松 一夫、広瀬 義州『FASB財務会計の諸概念』中央経済社、2002年。

平松一夫『IFRS国際会計基準の基礎 第4版』中央経済社、2015年。

広瀬義州『財務会計 第12版』中央経済社、2014年。

評価方法

平素の努力を評価する。積極的な発言・議論・発表を評価する。

平常点(40%)、レポート(30%)、発表(30%)

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問や要望は各授業後にお聞きます。授業時間外は、研究室のパソコン・メールアドレスにメールしてください。日時を決めてお聞きます。定期試験・評価に対するフィードバックに関しては、要望があればオフィスアワーに個別に返却いたします。

前年度の授業評価

生徒全員が理解し、授業についてけるよう丁寧な対応を常に心掛けている。さらに、生徒一人一人の授業に対する理解を深めることができるよう、個別に質問に応じるなどの対応を行っている。

今回の授業評価においてその成果が表れており、おおむね満足している。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
会計演習Ⅱ	櫛部 幸子	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613369

使用言語

日本語で行う授業。

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

負債会計、純資産会計、収益と費用、研究開発費とソフトウェア、リース会計、減損会計等の個別論点を理解する。

概要

本講義では、会計のなかでも、財務会計に焦点を当て、負債、純資産、研究開発費とソフトウェア、リース会計、減損会計等、個別論点を学ぶ。さらに、具体的な会計処理を学び、理解することで、なぜこのような処理が必要であるのかを考え、会計的な思考を身に着ける。会計学、財務会計がどうあるべきか、何が必要であるのかを考え研究を行う。各論点内容の発表を行う形式で講義を進める。定期試験(レポート)・授業評価に対するフィードバックに関しては、要望があればオフィスアワーに個別に返却いたします。

キーワード

負債会計、純資産会計、収益と費用、研究開発費とソフトウェア、リース会計、減損会計等の個別論点、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

負債会計、純資産会計、収益と費用、研究開発費とソフトウェア、リース会計、減損会計等の個別論点について、具体的な会計処理を理解でき、会計的な思考を身に着けることができる。

授業計画

- 第1回 負債(負債の意義、負債の分類と評価)
- 第2回 負債(金融負債、社債引当金、偶発債務)
- 第3回 純資産(純資産の意義と分類)
- 第4回 収益と費用(収益と費用の意義と分類)
- 第5回 収益と費用(収益費用の認識測定)
- 第6回 研究開発費とソフトウェア(意義と会計処理)
- 第7回 リース会計(意義と分類、会計処理)
- 第8回 減損会計(意義と会計処理)
- 第9回 税効果会計(意義と会計処理)
- 第10回 退職給付会計(意義と会計処理)
- 第11回 外貨換算会計(意義と会計処理)
- 第12回 財務諸表体系
- 第13回 キャッシュ・フロー計算書(意義と作成方法)
- 第14回 連結財務諸表(基礎概念と会計処理)
- 第15回 総合演習・復習

授業の予習・復習

授業の前後4時間ずつの予習・復習を要する。更に、発表資料作成などの時間を要する。

使用教材

(テキスト)

授業における板書内容・配布プリント

(参考文献)

井上達男・山地範明著『エッセンシャル財務会計』中央経済社、2013年。

桜井久勝『テキスト国際会計基準 第6版』白桃書房、2013年。

武田隆二『最新 財務諸表論 第11版』中央経済社、2008年。

武田隆二『会計学一般教程 第7版』中央経済社、2008年。

平松 一夫、広瀬 義州『FASB財務会計の諸概念』中央経済社、2002年。

平松一夫『IFRS国際会計基準の基礎 第4版』中央経済社、2015年。

広瀬義州『財務会計 第12版』中央経済社、2014年。

評価方法

平素の努力を評価する。積極的な発言・議論・発表を評価する。

平常点(40%)、レポート(30%)、発表(30%)

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問や要望は各授業後にお聞きます。授業時間外は、研究室のパソコン・メールアドレスにメールしてください。日時を決めてお聞きます。定期試験・評価に対するフィードバックに関しては、要望があればオフィスアワーに個別に返却いたします。

前年度の授業評価

生徒全員が理解し、授業についてけるよう丁寧な対応を常に心掛けている。今回の授業評価においてその成果が表れており、おおむね満足している。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
会計監査演習 I	青木 康一	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

我が国の監査制度と財務諸表監査の枠組み

概要

修士論文の作成の準備として、我が国の監査制度および財務諸表監査の基本的枠組みを理解することを目的とする。

我が国の法定監査制度の歴史的な変遷を概観するとともに、現行制度の概要を理解する。そして、我が国の「一般に認められた監査の基準」に基づいた財務諸表監査の枠組みを把握し、その検討を通じて財務諸表監査のあるべき姿を考察していく。

課題(レポート、小テスト等)を課した場合は、模範解答を配布する。

演習では、授業計画に示した各回のテーマについて、レジメを作成し、報告してもらう。その後、報告内容に基づいた議論をする。

キーワード

財務諸表監査、金融商品取引法監査、会社法監査、公認会計士、リスク・アプローチ、監査報告書、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

財務諸表監査の意義を理解出来る。

我が国の法定監査制度を理解できる。

監査人の役割を理解できる。

財務諸表監査の全体像を理解できる。

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 金融商品取引法監査制度 その1 概要

第3回 〃 その2 金融証券取引所

第4回 〃 その3 有価証券届出書

第5回 〃 その4 有価証券報告書

第6回 〃 その5 内部統制報告書

第7回 〃 その6 四半期報告書

第8回 会社法監査制度 その1 概要

第9回 〃 その2 監査役

第10回 〃 その3 監査役会

第11回 〃 その4 会計監査人

第12回 〃 その5 指名委員会等設置会社

第13回 〃 その6 監査等委員会設置会社

第14回 〃 その7 会計参与

第15回 総括

授業の予習・復習

予習として、毎回、テーマに沿って下調べを十分にしておくこと。報告にあたっては、必ず、レジメを準備すること。終了後は、復習として、議論した内容の要点を整理しまとめておくこと。

日々、「会社」についての報道に注目すること。その要点をまとめて、ファイルすることが望ましい。

授業の前後に合計で4時間程度の予習・復習をすること。

使用教材

テキスト 未定

参考文献 適宜紹介する。

評価方法

レポートその他平常の学習を総合して評価する。

平常点50%、報告内容50%。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

1. 授業計画は、暫定的なものである。受講者の興味や要望により、変更することもある。
2. 質問・要望については、原則として授業中、授業終了後に受け付ける。別途、時間をもうけることも可能である。オフィス・アワーを利用してもよい。また、メール(kaoki@eco.iuk.ac.jp)でも受け付ける。

前年度の授業評価

開講せず。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
会計監査演習Ⅱ	青木 康一	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

我が国の法定監査と財務諸表監査の枠組み

概要

修士論文の作成の準備として、我が国の監査制度および財務諸表監査の基本的枠組みを理解することを目的とする。

我が国の法定監査制度の歴史的な変遷を概観するとともに、現行制度の概要を理解する。そして、我が国の「一般に認められた監査の基準」に基づいた財務諸表監査の枠組みを把握し、その検討を通じて財務諸表監査のあるべき姿を考察していく。

課題(レポート、小テスト等)を課した場合は、模範解答を配布する。

演習では、授業計画に示した各回のテーマについて、レジメを作成し報告してもらう。その後、議論を展開する。

キーワード

財務諸表監査、金融商品取引法監査、会社法監査、公認会計士、リスク・アプローチ、監査報告書、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

財務諸表監査の意義を理解出来る。

我が国の法定監査制度を理解できる。

監査人の役割を理解できる。

財務諸表監査の全体像を理解できる。

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 ディスクロージャー制度

第3回 法定監査制度 その1 金融商品取引法監査制度

第4回 法定監査制度 その2 会社法監査制度

第5回 監査の主体 その1 専門的能力

第6回 監査の主体 その2 独立性

第7回 監査の主体 その3 正当な注意

第8回 監査の実施 その1 監査のプロセス

第9回 監査の実施 その2 リスク・アプローチ

第10回 監査の実施 その3 監査計画

第11回 監査の実施 その4 監査手続

第12回 監査の報告 その1 短文式監査報告書

第13回 監査の報告 その2 除外事項と監査意見

第14回 監査の報告 その3 追記情報・継続企業監査

第15回 総括(修士論文テーマの選定)

授業の予習・復習

予習として、毎回、テーマに沿って下調べを十分にしておくこと。報告にあたっては、必ず、レジメを準備すること。終了後は、復習として、議論した内容の要点を整理しまとめておくこと。

日々、「会社」についての報道に注目すること。その要点を整理し、ファイルすることが望ましい。

授業の前後に合計で4時間程度の予習・復習をすること。

使用教材

適宜紹介する。

評価方法

報告内容、その他平常の学習を総合して評価する。

平常点50%、報告内容50%。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業計画は、暫定的なものである。受講者の興味や要望により、変更することもある。

質問・要望については、原則として授業中、授業終了後に受け付ける。別途、時間をもうけることも可能である。オフィス・アワーを利用してもよい。また、メール(kaoki@eco.iuk.ac.jp)でも受け付ける。

前年度の授業評価

開講せず。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
税務会計演習 I	今村 明代	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

我が国の制度会計

概要

法人税法の基本的かつ重要な内容を、会計学的観点から研究する。会計と税務の差異に着目し、法人税法における課税所得計算の仕組みを検討することによって、我が国の制度会計を理解する。

授業は板書・ICTの活用を中心とし、各自の研究テーマについての発表報告(パワーポイントを利用)を行い、議論する形式で進めていく。課題に対しては、授業の中で模範解答を配布したり、疑問や誤解についてコメントを行う。

キーワード

制度会計、法人税法、アクティブ・ラーニング

実務経験のある教員による授業科目(外資系銀行東京支店での実務経験を有する)

授業の到達目標

我が国の制度会計を理解し、企業会計上の利益計算と法人税法上の課税所得の計算との異同を考察できる。

授業計画

- 第1回 我が国の会計制度
- 第2回 税務会計と企業会計
- 第3回 商法, 会社法と税務会計
- 第4回 企業利益と課税所得
- 第5回 法人税法の基本的仕組みと課税要件
- 第6回 課税所得金額の計算の仕組み(1): 法人税法第22条
- 第7回 課税所得金額の計算の仕組み(2): 確定決算主義と税務調整
- 第8回 益金の額と計上時期
- 第9回 損金の額と計上時期
- 第10回 一般に公正妥当と認められる会計処理の基準
- 第11回 益金の計算
- 第12回 損金の計算(1): 引当金と準備金
- 第13回 損金の計算(2): 減価償却資産と繰延資産の償却, リース取引
- 第14回 損金の計算(3): 給与・寄附金・交際費等, 圧縮記帳
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

1. 授業前には、教科書や参考書等で次回授業の該当箇所を読み、わからない用語があるときには調べておくこと。

2. 各自の研究テーマについての発表報告については、パワーポイントを利用した資料を作成すること。
3. 毎授業後にレポートを作成し、次回の授業時に提出すること。
4. 授業の前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

テキスト： 未定

参考文献： 中央経済社編『新版 会計法規集』中央経済社

日本税理士会連合会/中央経済社編『法人税法規集』中央経済社

IFRS財団編、企業会計基準委員会訳『国際財務報告基準(IFRS)2014』中央経済社

平松一夫・広瀬義州訳『FASB財務会計の諸概念〔増補版〕』中央経済社

伊藤邦雄著『新・現代会計入門』日本経済新聞出版社

桜井久勝著『財務会計講義<第16版>』中央経済社

その他、授業中に、随時、紹介する。

評価方法

平常点40%、発表30%、レポート30%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問・要望については、各授業時間中または授業時間後に受け付ける。

前年度の授業評価

前年度、受講生がいなかったため開講せず。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
税務会計演習Ⅱ	今村 明代	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

我が国の制度会計

概要

法人税法の基本的かつ重要な内容を、会計学的観点から研究する。会計と税務の差異に着目し、法人税法における課税所得計算の仕組みを検討することによって、我が国の制度会計を理解する。

授業は板書・ICTの活用を中心とし、各自の研究テーマについての発表報告(パワーポイントを利用)を行い、議論する形式で進めていく。課題に対しては、授業の中で模範解答を配布したり、疑問や誤解についてコメントを行う。

キーワード

制度会計、法人税法、アクティブ・ラーニング

実務経験のある教員による授業科目(外資系銀行東京支店での実務経験を有する)

授業の到達目標

我が国の制度会計を理解し、企業会計上の利益計算と法人税法上の課税所得の計算との異同を考察できる。

授業計画

第1回 我が国の会計制度

第2回 資産の属性と評価(1):原価主義と時価主義

第3回 資産の属性と評価(2):実現主義と権利確定主義, 債務発生主義と債務確定主義

第4回 資産の属性と評価(3):産業構造の変化と資産の属性

第5回 資本等取引

第6回 積立金

第7回 税効果会計(1):永久差異と一時差異

第8回 税効果会計(2):繰延税金資産と繰延税金負債

第9回 グループ法人税制

第10回 連結財務諸表と連結納税制度

第11回 企業組織再編税制

第12回 金融取引課税(1):有価証券および短期売買商品

第13回 金融取引課税(2):デリバティブ取引等およびヘッジ処理

第14回 国際課税

第15回 まとめ

授業の予習・復習

1. 授業前には、教科書や参考書等で次回授業の該当箇所を読み、わからない用語があるときには調べておくこと。

2. 各自の研究テーマについての発表報告については、パワーポイントを利用した資料を作成すること。
3. 毎授業後にレポートを作成し、次回の授業時に提出すること。
4. 授業の前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

テキスト： 未定

参考文献： 中央経済社編『新版 会計法規集』中央経済社
日本税理士会連合会/中央経済社編『法人税法規集』中央経済社
IFRS財団編、企業会計基準委員会訳『国際財務報告基準(IFRS)2014』中央経済社
平松一夫・広瀬義州訳『FASB財務会計の諸概念〔増補版〕』中央経済社
伊藤邦雄著『新・現代会計入門』日本経済新聞出版社
桜井久勝著『財務会計講義<第16版>』中央経済社
その他、授業中に、随時、紹介する。

評価方法

出平常点40%、発表30%、レポート30%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問・要望については、各授業時間中または授業時間後に受け付ける。

前年度の授業評価

前年度、受講生がいなかったため開講せず。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
中小企業経営演習 I	中西 孝平	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613353

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール, 専門演習, 論文・研究指導, ワークショップ, 対話・討論型授業)

テーマ

文献輪読を通した中小企業研究の再検討 I

概要

この演習は, 未来の働き方と経済社会の姿について深く理解し, 自身の研究に活かすことを目的としています。具体的には, 1冊の本をテキストにした輪読会の形式を採り, 次の方法で進めていく予定です。

- (1) 第1回目の授業時に, 毎回の報告者を決める。
- (2) 報告者は授業日までに担当箇所の概要をまとめ, 問題提起を行う。
- (3) 報告後, 教員と受講生との会話を通して, 報告箇所と関連事項についての理解を深めていく。

なお, 輪読会に先立って, 受講生に自身の研究内容を報告していただく予定です。

また, 受講に際しては, この演習で学ぶ内容が自身の研究にどのように活用できるかをつねに念頭に置いてください。

※ レポート等の提出物の返却を希望される方は, 担当教員の研究室へお越しください。その際, レポートに対するコメント等をお伝えします。

キーワード

中小企業, キャリア形成, アクティヴ・ラーニング

授業の到達目標

- (1) 未来の働き方や経済社会について理解することができる。
- (2) 著者の議論を批判的に検討することができる。
- (3) 1冊の書物に関する議論を通して, 自身の研究を刷新することができる。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	各受講生の研究概要報告(1): 担当者A~C
第3回	各受講生の研究概要報告(2): 担当者D~F
第4回	各受講生の研究概要報告(3): 担当者G~I
第5回	序章 働き方の未来を予測する
第6回	第1章 未来を形づくる五つの要因
第7回	第2章 いつも時間に追われ続ける未来
第8回	第3章 孤独にさいなまされる未来
第9回	第4章 繁栄から締め出される未来

第10回	第5章	コ・クリエーションの未来
第11回	第6章	積極的に社会と関わる未来
第12回	第7章	ミニ起業家が活躍する未来
第13回	第8章	第一のシフト
第14回	第9章	第二のシフト
第15回	第10章	第三のシフト

※ 受講者の状況によって、授業の進度や内容を調整することがあります。

授業の予習・復習

- (1) 第1回目の授業時に連絡します。
- (2) 授業前後に必ず全4時間程度の予習・復習をしてください。
- (3) 授業後に必ず自身の研究計画の再検討を行ってください。

使用教材

リンダ・グラットン著, 池村千秋訳『ワーク・シフト』プレジデント社

評価方法

- ・中間レポート 30%
- ・期末レポート 70%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- (1) 質問等は, 授業終了後かメールで対応します。
- (2) 欠席される場合, 事前に授業時かメールで連絡してください。
- (3) 担当教員のメールアドレス:k-nakanishi@eco.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

- ・昨年度は受講者がいなかったため, 授業評価なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
中小企業経営演習Ⅱ	中西 孝平	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613353

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール, 専門演習, 論文・研究指導, ワークショップ, 対話・討論型授業)

テーマ

文献輪読を通した中小企業研究の再検討Ⅱ

概要

この演習は, キャリア形成について深く理解し, 自身の研究に活かすことを目的としています。具体的には, 1冊の本をテキストにした輪読会の形式を採り, 次の方法で進めていく予定です。

- (1) 第1回目の授業時に, 毎回の報告者を決める。
- (2) 報告者は授業日までに担当箇所の概要をまとめ, 問題提起を行う。
- (3) 報告後, 教員と受講生との会話を通して, 報告箇所と関連事項についての理解を深めていく。

受講に際しては, 中小企業経営演習Ⅰで学んだ内容を踏まえてください。また, この演習で学ぶ内容が自身の研究にどのように活用できるかをつねに念頭に置いてください。

※ レポート等の提出物の返却を希望される方は, 担当教員の研究室へお越しください。その際, レポートに対するコメント等をお伝えします。

キーワード

中小企業, キャリア形成, アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- (1) キャリア形成について理解することができる。
- (2) 著者の議論を批判的に検討することができる。
- (3) 1冊の書物に関する議論を通して, 自身の研究を刷新することができる。

授業計画

第1回		オリエンテーション
第2回	第1章	思考の枠とキャリアの形成
第3回	第2章	フィールドワークのエッセンス
第4回	第3章	地方を創生するソーシャル・イノベーションに向けたキャリアの考え方
第5回	第4章	クラウドファンディングの活用
第6回	第5章	知財とイノベーション
第7回	第6章	社会起業とキャリア
第8回	第7章	アントレプレナーシップとキャリア
第9回	第8章	ライフコースとキャリア
第10回	第9章	男女共同参画社会におけるキャリアデザイン
第11回	第10章	家計とキャリア

第12回 第11章 女性の視点が生み出す多様な製品
第13回 第12章 女子文化とビジネスの形
第14回 第13章 ゆるいコミュニケーションとマニアックな市民
第15回 第14章 ゲームがもたらす可能性

※ 受講者の状況によって、授業の進度や内容を調整することがあります。

授業の予習・復習

- (1) 第1回目の授業時に連絡します。
- (2) 授業前後に必ず全4時間程度の予習・復習をしてください。
- (3) 授業後に必ず自身の研究計画を再検討してください。

使用教材

松重和美監修、竹本拓治編著『キャリア・アントレプレナーシップ論』萌書房

※ 使用教材は上記のものを予定していますが、前期の『中小企業経営演習Ⅰ』の授業時に説明する予定ですので、購入はその後に行ってください。

評価方法

- ・中間レポート 30%
- ・期末レポート 70%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- (1) 質問等は、授業終了後かメールで対応します。
- (2) 欠席される場合、事前に授業時かメールで連絡してください。
- (3) 担当教員のメールアドレス:k-nakanishi@eco.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

- ・昨年度は受講者がいなかったため、授業評価なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経営演習 I	康上 賢淑	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613350

使用言語

日本語(主)英語・中国語・韓国語(兼)

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

国際経営における産業ビジネス

概要

日本の産業変遷と国際的地位の変化をはじめ、東アジアや世界の新技术によるAI産業にまで範囲を広げ、前期は主に歴史的経営の視点から考察し、ITとAI等による産業構造の実態を研究する。授業方法は各自にテキストと関連研究を読み、順番を決めて報告し、討論をする。講義の最終回の合宿で課題検討とフィードバックを行う。

キーワード

産業史、地域産業史、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

産業経営と地域ビジネスを関連しながら、国際環境の中での地域産業と地域ビジネスを考察できる。

授業計画

- 1 授業の内容と目標を説明し、発表者の内容を決める
- 2 日本型産業革命の展開
- 3 「産業国家」日本の社会と政治
- 4 産業集積の生成・展開・問題
- 5 地域産業集積論から地域イノベーションシステム論へ
- 6 日本のIT・AI企業を取り上げて分析
- 7 韓国のIT・AI企業を取り上げて分析
- 8 中国のIT・AI企業を取り上げて分析
- 9 鹿児島県のIT・AI企業を調べる
- 10 日本の興味のある産業を調査し発表する①
- 11 韓国の興味のある産業を調査し発表する②
- 12 台湾の興味のある産業を調査し発表する③
- 13 中国の興味のある産業を調査し発表する④
- 14 鹿児島県の興味のある産業を調査し発表する⑤
- 15 合宿で纏める

授業の予習・復習

必ず事前に関連する資料を調べたり、前回の内容を復習したりすること。
授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

- 1 石井寛治『資本主義日本の歴史構造』東京大学出版会、2015年。
- 2 渡辺幸男『日本と東アジアの産業集積研究』同友館、2007年。

評価方法

発表の内容25%、議論の態度25%、質疑25%、コメント25%によって、評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

地域産業を見学する課外研究も行うこと。

オフィスアワーは12時20から13時の間で行う。

前年度の授業評価

無

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経営演習Ⅱ	康上 賢淑	2年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613350

使用言語

日本語(主)英語・中国語・韓国語(兼)

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

国際経営における産業ビジネス

概要

日本の産業変遷と国際的地位の変化をはじめ、東アジアや世界の新技术によるAI産業にまで範囲を広げ、2年生の前期は主にオープン・サービス・イノベーションを考察し、そこから変わっていく産業構造の実態を研究する。授業方法は各自にテキストと関連研究を読み、順番を決めて報告し、討論をする。講義の最終回の合宿で課題検討とフィードバックを行う。

キーワード

産業史、地域産業史、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

産業経営と地域ビジネスを関連しながら、国際環境の中での地域産業と地域ビジネスを考察する。

授業計画

- 1 授業の内容と目標を説明し、発表者の内容を決める
- 2 オープン・サービスとイノベーション
- 3 オープン・サービスとイノベーションの必要性
- 4 ビジネスをサービスとして考える
- 5 顧客との共創
- 6 社外サービス・イノベーションを広げる
- 7 サービスでビジネスモデルを転換する
- 8 大企業のオープン・サービス・イノベーション
- 9 中小企業のオープン・サービス・イノベーション
- 10 サービス・ビジネスのオープン・サービス・イノベーション
- 11 新興経済国でのオープン・サービス・イノベーション
- 12 オープン・サービス・イノベーションの今後
- 13 オープン・イノベーションの意味と重要性
- 14 日本のオープン・サービス・イノベーションを考える
- 15 合宿で纏める

授業の予習・復習

必ず事前に関連する資料を調べたり、前回の内容を復習したりすること。
授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

ヘンリー・チェスブロー著『オープン・サービス・イノベーション』監修・監訳・出版(株)阪急コミュニケーションズ、2012年。

評価方法

発表の内容25%、議論の態度25%、質疑25%、コメント25%によって、評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

地域産業を見学する課外研究も行うこと。

オフィスアワーは12時20から13時までの間で行う。

前年度の授業評価

無

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経営演習Ⅱ	康上 賢淑	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613350

使用言語

日本語(主)英語・中国語・韓国語(兼)

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

国際経営における産業と企業経営

概要

日本の産業変遷と国際的地位の変化をはじめ、東アジアや世界のAI産業まで範囲を広げ、後期では主にアジアの経済発展と産業技術に視点をおいて産業経営を考察し、企業のイノベーションと産業構造の関連性を分析する。授業方法は各自にテキストと関連研究を読み、順番を決めて報告し、討論をする。講義の最終回の合宿で課題検討とフィードバックを行う。

キーワード

アジアの産業経営、アジアの産業集積、産業技術、企業のイノベーション、アクティブラーニング

授業の到達目標

受講生が産業経営を企業経営と関連しながら、国際環境の中でアジアの地域産業と企業のイノベーションを学び、その地域の産業と企業のイノベーションにおける研究と分析能力を高める。

授業計画

- 1 授業の内容と目標を説明し、発表者の内容を決める
- 2 東アジアの工業化とイノベーション
- 3 アジア工業化・経済発展の世界経済的フレームワークとその転換
- 4 技術論・学習論の視点によるアジアの発展とキャッチアップメカニズム
- 5 ハイテク産業からみたアジアの産業集積
- 6 アジアの発展と裾野産業の貢献
- 7 東南アジアにおける自動車産業経路と展望
- 8 先端技術と投資競争からみた電子産業
- 9 アジア諸国における鉄鋼業の発展と技術
- 10 NC工作機械産業の共進化メカニズム
- 11 韓国の金型産業発展
- 12 金型産業構造変革とイノベーション
- 13 中国の金型産業のイノベーション
- 14 鹿児島県の製造産業のイノベーション
- 15 合宿で纏める

授業の予習・復習

必ず事前に演習と関連する資料を調べたり、前回の内容を復習したりすること。

授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

馬場敏幸編『アジアの経済発展と産業技術』ナカニシヤ出版、2013年。

評価方法

発表の内容25%、積極的な態度25%、質疑25%、コメント25%によって評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

予習あるいは授業時間外、難題に遭遇した時、随時対面对応する。

オフィスアワーは12時20から13時までである。

前年度の授業評価

無

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経営演習Ⅲ	康上 賢淑	2年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613350

使用言語

日本語(主)英語・中国語・韓国語(兼)

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

産業経営と情報化

概要

演習の目的は、第一次産業、とりわけ農業と漁業を中心にその産業の変化と情報化との関係性を研究することによって、日本および東アジアの諸国を対象に同産業のイノベーション実態を知り、それに関して分析、提案できる能力を高める。授業方法は、各自にテキストと関連研究を読み、順番を決めて報告し、討論する。講義の最終回の合宿で課題検討とフィードバックを行う。

キーワード

第一次産業、六次産業、情報産業、アクティブラーニング

授業の到達目標

産業における経営管理の課題を研究し、地域の産業発展において、それが農業と漁業にもつ重要な意義を学ぶ。さらに、その課題研究を通して、アジア各国に同産業を情報産業と連結するプロセスやイノベーションの可能性を探ることができる。

授業計画

1. 発表者を決める
2. 鹿児島県の農業経営
3. 鹿児島県の漁業経営
4. 日本の農業経営
5. 日本の漁業経営
6. 韓国の農業経営
7. 韓国の漁業経営
8. 中国の農業経営
9. 中国の漁業経営
10. 序章(藤本隆宏の本)
11. 第1章 経営学と経済学の知見が導く「ものづくり理論」
12. 第2章「現場から見上げる」戦後産業史とは何か
13. 第3章「グローバル能力構築競争」と日本企業の勝機
14. 第4章 IoT、インダストリー4.0の本質を見極めよ
15. 終章 2020年、明るい日本経済を手にするために

授業の予習・復習

必ず事前に資料を調べたり、関連する本を読んだりして準備をすること。
授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

藤本隆宏『現場から見上げる企業戦略論』角川文庫、2017年。

評価方法

発表の内容25%、積極的な態度25%、質疑25%、コメント25%によって評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

予習あるいは授業時間外、難題にあった時、随時対面对応する。

前年度の授業評価

無

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経営演習Ⅲ	康上 賢淑	2年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613350

使用言語

日本語(主)英語・中国語・韓国語(兼)

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

産業経営と情報化

概要

演習の目的は、第一次産業、とりわけ農業と漁業を中心にその産業の変化と情報化との関係性を研究することによって、日本および東アジアの諸国を対象に同産業のイノベーション実態を知り、それに関して分析、提案できる能力を高める。授業方法は、各自にテキストと関連研究を読み、順番を決めて報告し、討論する。講義の最終回の合宿で課題検討とフィードバックを行う。

キーワード

第一次産業、六次産業、情報産業、アクティブラーニング

授業の到達目標

産業における経営管理の課題を研究し、地域の産業発展において、それが農業と漁業にもつ重要な意義を学ぶ。さらに、その課題研究を通して、アジア各国に同産業を情報産業と連結するプロセスやイノベーションの可能性を探ることができる。

授業計画

1. 発表者を決める
2. 鹿児島県の農業経営
3. 鹿児島県の漁業経営
4. 日本の農業経営
5. 日本の漁業経営
6. 韓国の農業経営
7. 韓国の漁業経営
8. 中国の農業経営
9. 中国の漁業経営
10. 序章(藤本隆宏の本)
11. 第1章 経営学と経済学の知見が導く「ものづくり理論」
12. 第2章「現場から見上げる」戦後産業史とは何か
13. 第3章「グローバル能力構築競争」と日本企業の勝機
14. 第4章 IoT、インダストリー4.0の本質を見極めよ
15. 終章 2020年、明るい日本経済を手にするために

授業の予習・復習

必ず事前に資料を調べたり、関連する本を読んだりして準備をすること。
授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

藤本隆宏『現場から見上げる企業戦略論』角川文庫、2017年。

評価方法

発表の内容25%、積極的な態度25%、質疑25%、コメント25%によって評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

予習あるいは授業時間外、難題にあった時、随時対面対応する。

前年度の授業評価

無

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経営演習Ⅳ	康上 賢淑	2年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613350

使用言語

日本語(主)英語・中国語・韓国語(兼)

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

産業経営とAI企業

概要

IT技術の進化やビックデータによるAI(人工知能)の深層学習の登場は、企業経営と産業経営に大きな変革をもたらしている。後期では、AIに関連するグローバル企業に焦点を当てて研究し、それが各産業に与えたインパクトを分析し、今後の産業経営の課題を解明する。

キーワード

産業経営、AIの深層学習、アクティブラーニング

授業の到達目標

AIの深層学習とグローバルAI企業が各産業に与えたインパクトの研究・分析を通じて、これからの産業経営・企業経営の変化にどうすれば柔軟に対応できる能力が備えるかを検討する。

授業計画

- 1 報告者と内容(興味・あるいは修士論文と関わる本と論文)を決める
- 2 産業経営に関する本を読んで報告する①
- 3 産業経営に関する本を読んで報告する②
- 4 産業経営に関する本を読んで報告する③
- 5 産業経営に関する本を読んで報告する④
- 6 産業経営に関する本を読んで報告する⑤
- 7 産業経営に関する本を読んで報告する⑥
- 8 産業経営に関する本を読んで報告する⑦
- 9 産業経営に関する本を読んで報告する⑧
- 10 産業経営に関する論文を読んで報告する①
- 11 産業経営に関する論文を読んで報告する②
- 12 産業経営に関する論文を読んで報告する③
- 13 産業経営に関する論文を読んで報告する④
- 14 各自修士論文の報告
- 15 纏め(合宿)

授業の予習・復習

必ず事前に資料を調べたり、関連資料や本を読んだりして準備すること。
授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

大前研一『デジタル・ディスラプション』プレジデント社、2018年。
劉成基監修・原口俊道など『東アジアの産業と企業』榊五絃舎、2012年。
菅井憲郎『稲盛経営』南日本新聞開発センター、2016年。

評価方法

発表の内容25%、積極的な態度25%、質疑25%、コメント25%によって評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

予習あるいは授業時間外、難題にあった時、随時に対面对応する。

前年度の授業評価

無

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経営演習Ⅳ	康上 賢淑	2年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613350

使用言語

日本語(主)英語・中国語・韓国語(兼)

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

産業経営とAI企業

概要

IT技術の進化やビックデータによるAI(人工知能)の深層学習の登場は、企業経営と産業経営に大きな変革をもたらしている。後期では、AIに関連するグローバル企業に焦点を当てて研究し、それが各産業に与えたインパクトを分析し、今後の産業経営の課題を解明する。

キーワード

産業経営、AIの深層学習、アクティブラーニング

授業の到達目標

AIの深層学習とグローバルAI企業が各産業に与えたインパクトの研究・分析を通じて、これからの産業経営・企業経営の変化にどうすれば柔軟に対応できる能力が備えるかを検討する。

授業計画

- 1 報告者と内容(興味・あるいは修士論文と関わる本と論文)を決める
- 2 産業経営に関する本を読んで報告する①
- 3 産業経営に関する本を読んで報告する②
- 4 産業経営に関する本を読んで報告する③
- 5 産業経営に関する本を読んで報告する④
- 6 産業経営に関する本を読んで報告する⑤
- 7 産業経営に関する本を読んで報告する⑥
- 8 産業経営に関する本を読んで報告する⑦
- 9 産業経営に関する本を読んで報告する⑧
- 10 産業経営に関する論文を読んで報告する①
- 11 産業経営に関する論文を読んで報告する②
- 12 産業経営に関する論文を読んで報告する③
- 13 産業経営に関する論文を読んで報告する④
- 14 各自修士論文の報告
- 15 纏め(合宿)

授業の予習・復習

必ず事前に資料を調べたり、関連資料や本を読んだりして準備すること。
授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

大前研一『デジタル・ディスラプション』プレジデント社、2018年。
劉成基監修・原口俊道など『東アジアの産業と企業』榊五絃舎、2012年。
菅井憲郎『稲盛経営』南日本新聞開発センター、2016年。

評価方法

発表の内容25%、積極的な態度25%、質疑25%、コメント25%によって評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

予習あるいは授業時間外、難題にあった時、随時に対面して対応する。

前年度の授業評価

無

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営情報演習 I	大久保 幸夫	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO613361

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

テーマ:経営情報に関する研究

概要

修士論文のテーマを決め、問題を探ることが本演習の目的です。
 具体的な研究テーマは、指導教員と相談のうえ、受講者が決めます。
 次に、各人のテーマに沿った文献(教科書的なもの)を読み、基礎的な知識を獲得します。
 基礎ができたところで、テーマに関連する先行研究(論文等)を調査、取り組むべき問題を探し出します。
 レポートは提出後添削して返却します。

キーワード

経営情報, 各自が考えた研究テーマ, アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標:経営情報に関連する文献を読み、修士論文のテーマを設定し、論文の構想を練ることができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 基礎理論の修得(1):各人のテーマの基礎になる文献を探す
- 第3回 基礎理論の修得(2):基礎になる文献を読む
- 第4回 基礎理論の修得(3):読んだ内容をゼミで発表する
- 第5回 基礎理論の修得(4):さらに基礎になる文献を読み進める
- 第6回 基礎理論の修得(5):読んだ内容の理解度をゼミで確認する
- 第7回 基礎理論の修得(6):別の文献がないか探す
- 第8回 基礎理論の修得(7):複数の文献を読む中で知識を増やす
- 第9回 基礎理論の修得(8):各人のテーマの基礎となる知識を確認する
- 第10回 先行研究の探索(1):先行研究(論文等)について探索する
- 第11回 先行研究の探索(2):先行研究の内容をゼミで紹介する
- 第12回 先行研究の探索(3):関連する先行研究を掘り起こす
- 第13回 先行研究の探索(4):複数の先行研究の関連を見る
- 第14回 修士論文テーマの検討
- 第15回 修士論文テーマの確認と今後の計画

授業の予習・復習

授業の前後に4時間以上の予習・復習をすること。毎時間予習してきたことを報告・発表する。

使用教材

研究テーマに合わせて随時紹介する。

評価方法

平常点30%、報告・発表30%、レポート40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問はオフィス・アワーを利用してください。

前年度の授業評価

前年度の授業なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営情報演習Ⅱ	大久保 幸夫	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO613361

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

経営情報に関する研究

概要

修士論文の骨格を作ることが本授業の目的です。
経営情報演習Ⅰで決めた修士論文のテーマに沿って解決すべき問題を明確化します。
必要なデータを集め、コンピュータを使い統計分析等を行います。
結果をレポートにまとめます。
レポートは提出後添削して返却します。

キーワード

経営情報、修士論文、データの収集と分析、アンケート調査、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標:各自が設定した修士論文のテーマに沿って問題を明確化できる。
データの収集・分析を行い、修士論文の骨格を作ることができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 データ分析の基礎(1):研究テーマにおけるデータについて考える
- 第3回 データ分析の基礎(2):研究テーマにおけるデータの種類
- 第4回 データ分析の基礎(3):研究テーマにおけるデータの収集法
- 第5回 データ分析の基礎(4):研究テーマにおけるアンケート内容の検討
- 第6回 データ分析の基礎(5):研究テーマにおけるアンケートの作成
- 第7回 データ分析の基礎(6):アンケートの配布法の検討
- 第8回 予備調査の実施
- 第9回 予備調査のデータ分析
- 第10回 予備調査のデータ分析の検討
- 第11回 予備調査のデータ分析結果の報告
- 第12回 本調査に向けたアンケート内容・回収法の検討
- 第13回 本調査アンケートの作成
- 第14回 本調査アンケートの実施
- 第15回 まとめと今後の予定

授業の予習・復習

授業の前後に4時間以上の予習・復習をすること。
毎時間予習してきたことを報告。発表する。

使用教材

論文のテーマに合わせて随時紹介する。

評価方法

平常点30%、報告・発表30%、レポート40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問はオフィス・アワーを利用してください。

前年度の授業評価

前年度の授業なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
観光ビジネス演習 I	丸山 政行	1年次前期	2

ナンバリングコード

M_ECO616893

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

観光ビジネスについてなど、修士論文構想ができるようになること。

概要

授業の目的

観光ビジネスについて、総合的に理解ができるようになる。

授業の流れ

論文の基礎的な考え方から、先行研究の調査方法、仮説の設定の方法

論証の方法と授業をすすめ、論文全体の概要を把握していく。

授業の方法

担当教員と学生の討論形式ですすめていく。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、前回の授業で行ったことについて、授業冒頭で発表をする。

キーワード

修士論文, ワードによる論文作成

授業の到達目標

修士論文の基礎テーマを考えることができるようになる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション 観光ビジネスとは何か。
- 第2回 論文の基礎構成とは
- 第3回 先行論文の調べ方
- 第4回 論文の形式, 仮説設定の重要性
- 第5回 学術系観光研究の調査とその先行研究の輪読
- 第6回 実務型観光研究の調査とその先行研究の輪読
- 第7回 外国における観光の調査とその先行研究の輪読
- 第8回 仮説の設定の基礎 仮説設定の重要性
- 第9回 仮説の設定の問題 新規性と実証
- 第10回 仮説から証明 定量的検証法と定性的検証法について
- 第11回 仮説から証明 多変量解析について
- 第12回 仮説から証明 テキストマイニングについて
- 第13回 論文の章立てのながれについて
- 第14回 論文の構成の論理性について
- 第15回 授業総括

授業の予習・復習

授業の前後に4時間程度の予習・復習を必ず行うこと。
毎回テーマを与えるので、それについて論文作成を意識して調査をしてくる。

使用教材

ノートパソコン持参必須

評価方法

論文概要の進行度 100%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

SNSやメールでも随時、質問など受け付けます。積極的な学修をサポートします。

前年度の授業評価

昨年度より担当 昨年度は受講者なし

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
観光ビジネス演習Ⅱ	丸山 政行	1年次後期	2

ナンバリングコード

M_ECO616893

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

観光ビジネスの修士論文作成

概要

授業の目的

観光ビジネスについて、総合的に理解ができるようになる。

授業の流れ

観光ビジネス演習Ⅰで学習したことをふまえ、先行研究の調査方法、仮説の設定
論証の方法と授業をすすめ、論文全体の執筆をすすめていく。

授業の方法

担当教員と学生の討論形式ですすめていく。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、前回の授業で行ったことについて、授業冒頭で発表をする。

キーワード

修士論文, 仮説, 実証

授業の到達目標

修士論文の完成

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 論文の形式の復習
- 第3回 先行研究の調査の重要度について
- 第4回 仮説の重要性についての討論 1
- 第5回 仮説の新規性についての討論 2
- 第6回 インターネット・アンケート調査方法について
- 第7回 聞き取り型アンケート調査方法について
- 第8回 論点の問題点整理について 1
- 第9回 論点の問題点整理について 2
- 第10回 論点の整理と矛盾点の検討 1
- 第11回 各人論文について, 討議 1
- 第12回 各人論文について, 討議 2
- 第13回 論文概要書の作成方法について
- 第14回 引用の整理, 参考図書の整理方法
- 第15回 授業総括

授業の予習・復習

授業の前後に4時間程度の予習・復習を必ず行うこと。
毎回テーマを与えるので、それについて論文作成を意識して調査をしてくる。

使用教材

ノートパソコン必須

評価方法

修士論文の完成度 100%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

SNSやメールでも随時、質問など受け付けます。積極的な学修をサポートします。

前年度の授業評価

昨年度より担当 昨年度受講者なし

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
インターンシップ	中西 孝平	集中	2

ナンバリングコード

M_ECO616070

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

実習・調査・研修

テーマ

インターンシップによる就業力の育成

概要

インターンシップとは、学生が一定期間企業や団体の中で就業体験を行うものです。それにより、早い段階から自分の適性や将来の進路のことなどについて、認識を深めてもらうことを目的としています。インターンシップを通して、普段の学生生活やアルバイトなどでは決して得られない、社会人としての基礎力を身につけることが期待されます。講義は、「インターンシップ先の決定等に関する担当教員との面談」、「県内実務家を講師とする講演」、「ビジネスマナー講座」の3つからなります。このうち、「ビジネスマナー講座」は、基本的なビジネスマナーを身につけてもらうことを目的としたもので、夏休み期間中に二日間にわたり行います。インターンシップ実習に先立って、ビジネスへの関心を高め、かつ社会人として必要なスキルを身に付けていただければと思います。なお、インターンシップ実習後に成果報告会等に参加していただく予定です。

※ 活動日誌や就業体験活動評価書の内容についてフィードバックを希望される方は、担当教員の研究室へお越しください。

キーワード

国内インターンシップ、ビジネスマナー、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- (1) ビジネスマナーを身につける。
- (2) インターンシップをやりぬく。
- (3) 自分の適性や将来の進路のことなどについて認識を深めることができる。
- (4) 激動の時代を生き抜く姿勢についてのヒントを学べる。

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 担当教員による面談など「学生対応の時間」:「キャンパスウェブ利用型インターンシップ」を中心とする対応

第3回 担当教員による面談など「学生対応の時間」:「キャンパスウェブ利用型インターンシップ」を中心とする対応

第4回 担当教員による面談など「学生対応の時間」:「キャンパスウェブ利用型インターンシップ」を中心とする対応

第5回 担当教員による面談など「学生対応の時間」:「本学独自開拓インターンシップ」を中心とする対応

第6回 担当教員による面談など「学生対応の時間」:「本学独自開拓インターンシップ」を中心とする対応

第7回 担当教員による面談など「学生対応の時間」:「3日間社長のカバン持ち体験」に関する説明等

第8回 県内実務家を講師とする講演(1) 講師:マスコミ関係者

- 第9回 県内実務家を講師とする講演(2) 講師:県内企業の人事担当者
第10回 ビジネスマナー講座(1) 社会人の心構え, 仕事の基本
第11回 ビジネスマナー講座(2) 指示の受け方, 接客対応の基本
第12回 ビジネスマナー講座(3) 接遇の心構えと5原則, 立ち居振る舞い(案内・名刺交換)
第13回 ビジネスマナー講座(4) 電話対応の基本
第14回 ビジネスマナー講座(5) 電話対応ロールプレイング
第15回 ビジネスマナー講座(6) 未来からのメッセージを受けて生きる

※ ビジネスマナー講座の詳細は次のとおりです。

- 学外講師が担当します。
- 全6コマを7月中に2日間実施します。
- なお, 期間中に受講できなかった方を対象として, 夏季休暇中にも実施します。

※ インターンシップ実習の詳細は次のとおりです。

- 3日～5日程度。8月後半から9月にかけて実施する予定です。
- 実習先等の詳細については, 4月に開催される説明会で発表しますので, 受講希望者は必ず参加してください。
- 事後研修として, 「成果報告会」の実施を11月以降に予定しています。

※ 運営等の都合により, 予定が変更される場合があります。

授業の予習・復習

- (1) 新規に必要な学習内容等は, 毎回授業時にその都度連絡します。
- (2) 授業前後に必ず合計で4時間程度の予習・復習を行ってください。自身がインターンシップを希望する業界や企業について調べたり, マナー講座等で学んだことをつねに確認し, 必要に応じて, 書籍等でマナーに関する知識を深める等, 行ってください。

使用教材

プリントを適宜配布します。

評価方法

前期授業と事前研修:50%

インターンシップ(含事後研修):50%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

・履修の順序・方法は以下の通りです。

- (1) 3月のオリエンテーション時の説明会に参加する(説明会後に質問等受け付けます)。(2) 履修登録を行う。
- (3) 4月に開催される

今後の予定に関する説明会に参加する。

・履修希望者は, 4月の説明会の情報など, 掲示板をこまめにチェックしておいてください。

・報酬はありません。交通費, 昼食代などは自己負担です。

・ビジネスマナー講座については, インターンシップに出向く整容スタイルでの出席が望ましいです(アドバイスも行います)。

・Webキャリア・ポートフォリオを活用して就業力に関する自己評価を行ったり, インターンシップでの様子を報告するなどしてもらいます。

・授業やインターンシップに関する質問等は, 授業時間中かメールで対応します。(担当者のメールアドレス: k-nakanishi@eco.iuk.ac.jp)

前年度の授業評価

実習のためなし。